『カチューシャは氣が付いたナ。』と思ふと俄に空恐ろしくなつて。宛も打つて掛らうとする拳を避けるやうに思はず後ろに引退つた。が、カチューシャは矢張ネフリュードフに氣が附かないので、軈て吻と溜息を吐きつゝ再び視線を裁判長に轉じた。ネフリュードフも亦歎息を吐きつゝ、『テキパキ進行して貰ひたいもんだが――』と心中に思つた。

此時の感情は、例へば獵に行つて首尾よく鳥を射留めは射留めたが殺し損なつたと同じ鹽梅で、負傷をした鳥が獲物袋の中に苦んでるものを見るのが極めて不快でもあるし可憫相でもあるし、寧そ一と思ひに殺して忘れて了はうかと煩悶すると同樣の滅茶苦茶な感じが證人調を聞いてるネフリュードフの心に一杯となつてゐた。

第二十回

處がネフリュードフの註文通りに行かず、審問は中々長く引張られ、證人は一人宛別々に調べられた。一番末が鑑定人で、副檢事や辯護士から宛も一大事のやうに無用な質問を山の如く試みられてから後、裁判長は漸く證據物件として提出された品物調べを陪審員に請求した。其中には小さな金剛石を幾許も嵌めた花雕の指環があつた。確かに食指に穿めてゐたもんだらう。夫から毒物を分析した試驗管があつた。何れも封印を施し一々紙を貼付けてあつた。

愈々陪審員が證據調べに掛らうといふ時、副檢事は起立して證據調べに先立ちて檢屍調書の朗讀を請求した。

裁判長は一刻も早く裁判を濟まして可愛い瑞西の女に會ひたいばかりでなく、檢屍調書の朗讀は列座の面々を怠屈させて晩飯時を遲らせる外何等の效のないのを知らないではないが、此朗讀を請求するは副檢事の職權であるから許すより外仕方なかつた。

書記は再び起立して l と r を同音にした舌の廻らぬ聲で醫師の檢屍報告を讀

上げた。先づ身體外部の調書は次の通りであつた。

『(一)スメルコーフの身長は六呎五吋なり。』

『見事な男でげすナ、』と例の元氣者の紳商は頗る興がつてネフリュードフの耳に私語いた。

『(二)年齢四十歳前後と見えたり。

『(三)全身悉く水腫を生じたり。

『(四)皮膚は濃藍色を帯び諸處黑斑を生じたり。

『(五)身體諸處大小一樣ならざる發胞を生じて其中壞裂したるものもあり。

『(六)毛髮栗色にして濃密なり。手を觸るれば容易に脫毛す。

『(七)眼球は眼窩より脫出して角膜は暗色を呈せり。

『(八)鼻孔、耳腔及び口より薄き鼠色の粘液を分泌し、且半ば口を開きたり。

『(九)頸は顏面及び胸部の腫脹のため殆ど區別し難し、云々。』

四頁二十四行の詳細なる檢屍調書はツイ此頃此町で盛んに浮れた西伯利亞商人の大きなデブ〳〵と水脹れのやうになつた死體の外貌を顯現と說明した。

ネ

フリュードフは之を聞くと、去らぬだに最前からの不快な心持が太とゞ愈增して、カチューシャの賤しい渡世、鼻や耳や口から流れ出した粘液、眼の窩から飛出した眼球、夫や是やは昔し己れがカチューシャに振舞つた非道の行爲と同じ種類、同じ性質のものらしく、八方から似たり寄つたりの汚穢ないものに取捲かれて其中に吸込まれて了ひさうな氣持がした。

外部の檢屍報告が漸く濟んだ時、裁判長は吻と息を吐き、先づお終ひになつたと面を上げると、其途端に書記は續いて內部の解剖報告に移つたので、裁判長は再び首を垂れて眼を閉ぢた。ネフリュードフの隣席の商人君は頻りに眠氣が催したと見えて彼方へ寄つたり此方へ寄つたりコクリコクリと船を漕ぎ出した。被告と憲兵とだけは凝然と沈着き濟ましてゐた。

內部の解剖報告は次の通りであつた。

『(一)腦蓋骨の皮は容易に骨より剝離して、血液の凝固したるを見ず。

『(二)腦蓋骨の骨は適度の厚味ありて完全したり。

『(三)腦膜は鈍色を帶びて直徑四吋の變色したる斑點二箇所を有せり、云々。』

其他十三ヶ條あつた。

其末に助手の記名調印があつて、最後の醫師の檢案書には死後の檢視報告其他の書類に明記されたる胃中の變化及び腸竝びに腎臟中の小變化に由てスメルコーフの死亡が胃中のアルコールに混じたる毒に基因する事略ぼ明確なりと論結してあつた。勿論胃の狀態より推して其毒の何たるやを決定するは困難なるが、胃中に大量のアルコールを存在したるを以て其毒のアルコールに混入して胃に入つたのは明かであつた。

『一服盛られたのサ、夫に違ヱねヱ、』と商人君は漸つと眼を攪ますと同時に呟いた。

此報告の朗讀は小一時間掛つたが、副檢事は尚だ中々滿足しないらしく、裁判長が『內臟解剖の報告を讀まずとも十分でせうナ？』と云つても、副檢事は傈ともせず、裁判長を顧眄きもしないで嚴乎とした調子で、

『イヤ、本官は朗讀を請求します。』

と云ひつゝ少しく身を起して、自分は此報告朗讀を請求する權利があるから其

權利を主張するので、若し裁判長が許可しないなら之を廉に控訴する權利があると云ふ意氣込であつた。

胃加答兒を憂つてる鬚の判事は誰よりも此朗讀に惱まされて裁判長に向ひ、

『元來何の必要があつて那樣な長たらしいものを朗讀するのだ？唯だ時間を潰すだけぢやアないか。夫だから新らしい箒木は掃除をする役に立たんで暇を潰すだけだといふが道理だ。』

金縁眼鏡の判事は何にも云はずに鬱々と面白からぬ顏して前の方を睨んでゐた。現在の妻君とさへ面白からぬ睚合をしたものが所詮世の中から好ひ消息を聞かう譯もなく何面白からう筈もないのだ。

報告の朗讀は再び始まつた。

『千八百八十ロ年二月十五日醫務局より命じられたる下名は――』と書記は再び嚴然として滿庭の面々を襲ふ睡魔を追拂はうとして殊更に大きな聲を張上げ、

『檢屍官助手立合の上第六百三十八號の內臟檢視調書を作る――

『(一)右肺及び心臟(六磅硝子壜入)。

『(二)胃の含有物(六磅硝子壜入)。
『(三)胃臟(六磅硝子壜入)。
『(四)肝臟、脾臟、腎臟(九磅硝子壜入)。
『(五)腸(九磅陶製壜入)。』

爰まで讀掛けた時、裁判長は一人の同僚に耳語き、又最一人に身を屈めて同意を得ると共に直ちに宣言した。

『法庭は此調書の朗讀を無用と認めて中止を命ず。』

書記は直ちに朗讀を中止して紙を疊んで了つた。副檢事は勃然として何事かを紙へ書付けた。

裁判長は更めて、

『陪審員諸君は證據物件を一々御調べ下さい、』と云ふと、陪審員長始め一同は立てテーブルの側へ行き、指環や硝子壜や試驗管を見たが、如何して調べて宜いのか全然解らなかつた。

紳商バクラショーフ君は件の金指環を穿めて見て、

『此奴ア大きな指だ、』と笑止しさうに笑ひながら、『全で胡瓜のやうでげすナ、』と、心中に被害者スメルコーフの馬鹿馬鹿しい大男であつたを想像して面白がつてゐた。

第二十一回

證據調べが終つてから裁判長は其の終結を報告して直ちに副検事に論告を命じた。且副検事も矢張人である以上は烟草も喫みたからうし、食事もしたからうから、成るべく他人の情も察して貰ひたいと希望した。が、此男は他人にも自分にも忍んで一向容赦なく其様な同情は少しも無かつた。元來性質が愚鈍である處へ、氣の毒な事には中學を卒業するとき金牌を貰ひ、羅馬法の地役論に關する大學卒業論文でも褒美を取つたので、先生大に増長して大天狗となり澄ました。其上に又婦人連に款てたのが毒になつて到頭圖拔けの大愚鈍となつて了つた。

扨て論告を許されたので、副検事どのは悠々と起立し、金モールの繡をした制服に堂々たる威儀を作つて、片手を卓上に突いて四邊を見廻しつ、少しく頭を下げて被告の視線を避けつゝ、検屍調書の朗讀最中に準備した辯論を初めやうとした。

『陪審員諸君。諸君の前に今提起されたる事件は本官をして云はしむれば現代の最も特徴ある犯罪であります。』

副検事どのゝ考だと、夫子自身の辯論は後年赫々の名を揚げたる辯護士の著名な初辯論と同様に必ず公衆の注意を牽くものだと思つてゐた。處が實際當法庭の傍聽人と云つたら、針妙と炊婦とシモンの妹と、夫から辻馬車の馭者と唯ッだ四人だけしか無いのだが、其様な事は一向お關ひなしで、這般な時の辯論が矢張名を賣出す初めになるとでも思つてるのだらう。博學多識を鼻に掛けて犯罪の心理的原因の奥を捜り、社會の病患を赤裸々にして示すが此男の長處であつた。

『陪審員諸君。諸君の眼前には極めて奇異なる犯罪がある。本官をして云はしむれば十九世紀末の特徴を具へた犯罪で、此の慘澹たる社會現象の有らゆる各特徴を有してをる。此特徴や一言以て覆へば現代社會の腐敗で、一と度此事件をX光線の下に照せば社會の各要素盡く侵蝕されざるはない――』

此前口上で長々と、腹案の箇條を一つも漏すまいとし、凡そ一時間と十五分少しも淀みなく滔々と流るゝやうに遣つて退けた。

其間、唯ッだ一度休んで、暫く唾を呑込んで立つてゐたが、軈て精力を集中して前よりは更に雄辯滔々と一度に盛り返した。或時は右へ歩いたり左へ歩いたりして、陪審員を見ながら柔しい猫撫聲をしたり、或時は手帳を見ながら妙に沈着冷ました俗吏然たる聲を出したり、或時は傍聽人から辯護士へ眼を配つて叱り付けるやうに故と聲を張上げたりした。が、己れに視線を集むる被告等三人の方は避けて決して見なかつた。

近來渠等法曹社會に頻りに流行つてる新らしい癲狂の名や科學的知識の術語は少と古臭いのも出來立てのホヤ〱も總括めて盡く辯論中に列べ立てた。例へば遺傳、先天的犯罪、ロンブロゾ及びタード、進化及び生存競爭、ヒプノチズム及び催眠暗示、シャールコート及びデカダン等。

此說明に由ると、商人スメルコーフは時代の進步に伴はない質朴正直なる生一本の露西亞人の典型で、人に欺され易い寛大な好人物であるゆゑ、墮落社會の惡漢の手に乘せられて非業な最期を遂げたのである。

シモン・カルニチンキンは奴隸制度の因襲の惡德を受けたる產物である。無智文盲で、物の道理も解らない、剩つさへ無宗敎の白者である。ユウフェミヤは其情婦で、矢張遺傳の犧牲で、墮落者の特徵を悉く具へてゐた。又此事件の重なる繰縱者のマースロワは卽ちデカダンの好標本で、最も下劣なる墮落を體現して居る。

『此女は』と副檢事はマースロワを見つゝ、『唯今抱主が當法庭に證言したる如く、此女は立派な敎育を受けて居る。啻に露西亞語を讀み又書き得るばかりでなく佛蘭西語をも知つて居る。然るに此女は孤兒であつて、生れながらにして罪惡の芽を身に宿して居る。生れ落ちると直ぐ立派な身分ある家に引取られて養はれたのだから、正直にさへしてゐたなら正當な生活を送る事が出來たのである。然るに其恩人を捨てゝ、己れが自墮落をしたさに身を持壞して、好き好んで妓樓に身を沈め、他の娼妓と變りて敎育のあるのを賣物にし、陪審員諸君も今抱主の陳述したのを聞かるゝ通り、一種の不思議なる魔力で客を騙した。此魔力を近頃の科學者殊にシャールコート派の學者は研究して催眠的效果と稱して居る。此の如き一種の魔力で好人物の佛何兵衛とも云ふべきお目出度い金

持の西伯利亞人を掌中に丸めて。金を奪つた上に無殘にも毒殺したのである。』

『渠奴、中々喋舌り立てるワイ、』と裁判長は嚴格な同僚判事に首を屈めて微笑しつゝ耳語いた。

『馬鹿ッ面だナア！』と嚴格な同僚判事は云つた。

副檢事は再び辯論を續けた。

『陪審員諸君、』と威儀端然として細い腰を前に屈めつゝ、『諸君は嘗に是等被告の運命を掌中に握つて居るゝばかりではない。諸君の決定如何に由ては或度までは社會の運命を動かす事が出來る。願くは此犯罪の性質を十分御合點ありて、吾々が病的人物と假稱するマースロワ如きものゝ爲め社會が如何に蠹毒さるゝかを御勘考ありて其危險を豫防し、健全無垢なる社會の分子をして此病毒に感染し、之が爲に破滅を生じないやうに保護して、社會から此危險を隔離せん事を望みます。』

と、陪審員の決定の重大なるを大袈裟に吹立てゝ、御當人までが吹倒されたやうにドッカと自席に就いたが、自分の辯論の出來榮を滿足した大得意の色は

歷然と滿面に現はれた。

此形容澤山に飾立てた辯論の意味は、マースロワはお客の商人を巧く綾なして迷はし、其所有金を卷上げんとして鍵を持て旅館に行き、宛も犯罪を行はんとした時シモン及びユウフェミヤに見咎められて、餘儀なく三人の間に贓金を分配し、且罪跡を蔽はん爲に再び商人を旅館に伴ひ歸りて毒殺したと云ふのである。

副檢事の辯論が終つてから、胸開きの廣い燕尾服の胴衣の下から眞白な臘引の襯衣が見える中年の紳士が辯護士席から起立して、カルニチンキン及びボーチコワの爲に辯護した。此辯護士は三百圓で二人に雇はれたので、二人ながら全然無罪だと主張し、マースロワ一人に罪を被せて了つた。マースロワが鞄から金子を出した時兩人が立會つたとマースロワの陳述したのを悉く非認し、毒殺の嫌疑を受けた犯罪者の證言が何の價値があるものかと極力主張した。又ボーチコワが銀行に預金した一千八百圓は正直律義な兩人が每日旅客から貰う三圓乃至四圓の祝儀を溜めたので、金子を盜んだのは全くマースロワ一人である。

勿論マースロワは常識を喪つてるから、贓金は誰かに遣つて了つたか、或は失くして了つたかも知れない。毒殺一條に到つては無論マースロワ一人の仕業であると云つた。

で、此理由から辯護士はカルニチンキン及びボーチコワの竊盗犯を放免せられん事を陪審員に乞ふた。若し又竊盗犯が全然否認出來ないなら、之だけは止むを得ないとしても、毒殺には全く關係ない事を承認願ひたいと云つた。

副檢事の論告に對しては辯護士は下の如く答辯した。曰く、此學識ある紳士の遺傳に關する大議論は十分に科學的研究の説明を盡して餘蘊ないが、ボーチコワの如きは兩親共に不明なれば適應すべき限りでないと。

副檢事はプリ〱しながら何事かを紙に書附けつゝ件の辯護士を輕蔑するやうに肩を搖ぶつた。

マースロワの辯護士は續いて起立した。些と氣怯れした氣味合で躊躇しながら辯護を始めた。金子を盗んだ一條に就ては更に打消さないで、唯毒殺一方ばかりの辯護をして、無論藥劑を薦めた事實は有つても謀殺の意志は少しも無く、

全く眠らせやうばかりに藥を與へたのだとクド〱と主張した。で、更に進んで、マースロワが斯の如き不道德社會に墮落したのは、抑も無垢なる處女時代のマースロワを誘惑したる男の罪であるに關らず、悖德の男は何等の制裁をも受けないで女ばかりが墮落の罪科を一身に背負つて了つたと辯じた。が、此病理學の範圍に踏込んだる辯論は甚だ奮はないで誰も彼も一同怠屈して了ひ、おしなべての世間の男の薄情や女の心弱く腑甲斐なき事をモグ〱辯じ立てた時は、裁判長は事件の事實以外に走らぬやうにと注意さへした。

此辯護が終るや否、副檢事は再び起立した。先づ最初の辯護士に對して、ボーチコワの父母が不明であらうがあるまいが遺傳説の眞理は明々白々爭ふべからず、今日の科學の進歩にては遺傳より犯罪を推定し能ふのみならず、犯罪から遺傳を推定する事さへ出來ると反駁した。マースロワの辯護士に對しては、縱令マースロワが其初めに或想像したる(と此「想像」と云ふ語に力を入れて)誘惑者に欺かれて墮落したにしろ、現在の事實には何等の關係が無い、目前の證據より云へばマースロワ自身が却て其手中に落ちたる犧牲(即ちスメルコーフ)の

誘惑者であつたは燎々明かである、と云つて仕たり顔に着席した。

續いて被告等は各々自身に辯論すべく許されると、

ボーチコワは再び己れは何等の關係なく、何事をも知らぬ存せぬと繰返してマースロワに悉く罪を被せた。

カルニチンキンも矢張同じ事を何度も繰返して、

『そりやア何とお思召さうと旦那方の御勝手でもムりやすが、全く以て飛んでもねヱ事で、手前は一向記憶が、ヘイ、ムりやせん。憚んながら少と御無理なお捌きかと――へい、』

マースロワは何にも云はなかつた。裁判長が十分に辯明したが宜からうと云つても唯だ面を擧げて四邊を見廻したばかりで、再び首を垂れつゝ、と聲を上げて泣いた。

此慘澹たる光景を見るに見かねたネフリュードフは迫ぐり來る涙に堪り得ず思はず鼻を塞らするを、隣席のバクラショーフは氣が附いて妙な顔をしつゝ、

『如何なすつた? えッ、如何したのでげす?』

と問はれてネフリユードフも我身で我身が實は解らず、何故如此なに悲しくなつたか、其理由は解らなかつたが、唯だ何かなしに胸が一杯になつたのだ。畢竟之といふは氣が弱くて女々しいからだと、涙を秘さうとして鼻眼鏡を掛け、ハンケチを出して頻りに鼻を拭んだ。

が、此時のネフリユードフは矢張自分の昔日の不行跡が露顯れはせぬか、若しや滿庭の人達が知つたなら如何なる不面目が自分の頭上に落ちて來るだらうと、夫ればかりが心配で、此心配が何よりも恐ろしかつた。

第二十二回

被告等の最後の陳述が終つてから、陪審員の審議に移す諮問項目の形式を議するため若干時を費やし、軈て出來上つたので、裁判長は全體を概括して説明しやうとした。

で、愈々陪審員に審判を附託するに先だち、裁判長は極めて快活に且懇懃に説明した。曰く、强盗は强盗である、竊盗は竊盗である、鎖鑰のある場所より盗取したのは鎖鑰のある場所より盗取したのである、鎖鑰のない場所から盗取したのは鎖鑰のない場所から盗取したのであると。此説明中裁判長は度々ネフリュードフを顧盻いて、宛も君だけは此重大な眞理を特に會得して貰ひたい、若し又合點が行つたら君の同僚にも能く理解まして呉れと頼むやうであつた。で、陪審員連が十分會得したと見ると、裁判長は更に一歩を進めて、殺人とは其結果として人間の死を生ずる行爲である、隨て毒殺は又殺人である事を説明し、再び此眞理が陪審員の腑に落ちたと見てから、此故に竊盗及び殺人が同時に行はれた場合には竊盗及び殺人の倶發を以て罪を論ずべきものである、と説明の

追加をした。

裁判長は成るたけ早くお終ひにしたかつたのだ。可愛い瑞西の女が定めし待草臥れてるだらうと思ふと氣が氣でないが、有繫に職務に關係はるとツイ時を忘れ、一と度口を開いたら中々止められないで、十分合點が行くやうに愈々精しく説明しやうとして、若し被告を有罪と認めたら有罪の決定を與へ、若し無罪と認めたら無罪の決定を與へ、若し一の犯罪を認めて他の犯罪を認めないなら一方に有罪で他方に無罪である決定を與へるべき權利がある事を細かに説き、且此權利は陪審員に與へらるゝが故に願はくは道理に由て此權利を行はん事を希望し、更に又如何なる條項に就ても單に確認を與ふる時は其條項中に含まれたる各項を悉く確認するものと見做す故に若し此條項の全部を確認せざる時は明かに何々の廉を除きて確認すと云はざるべからずと注意した。

此時、偶つと時計を見ると最う五分で三時だから、此以上の説明は省略して、左までに精しく説明しないでも思慮分別ある陪審員は必ず十分合點してゐるものと決めて、扨て本問題に入つて、

『此件の眞相は次の通りである。』と檢事や辯護士や證人やが數回辯論陳述した事實を繰返し反覆して一々精しく說明した。陪審員連は勿論熱心に謹聽してゐたが、有益にもしろ、イヤ有益には違ひあるまいが、少と長過ぎるのに閉口して始終時計を出して見た。辯護士、檢事を初め法庭に列なる面々は皆同感であつたが、漸とこさとお終ひとなつた。

之ほど丁寧周匝を極めたのだから何も彼も遺憾なく言盡したやうだが、裁判長は尚だ中々自分の發言權を停止する氣になれなかつたは、人を感動する力のある自分の聲を聞くのが自分ながら如何にも心持快かつたからで、尚だ尚だ云ひ洩した肝腎要めの事——即ち陪審員に與へられたる權限の重大なる事、陪審員は其權利を行ふに細心周密なるべき事、決して濫用せざるべき事、及び法庭に行ひたる渠等の宣誓は重んずべき事、竝に渠等は社會の良心なる事、會議室の秘密は神聖なるべき事等を諄々と反覆して說明した。

裁判長が說明を仕初した抑もの瞬間から、マースロワは一語をも聞漏らさじと一心になつて裁判長を凝視めてゐた。其お蔭にネフリュードフは相互の眼と眼が衝突る心配なしにシゲ〳〵とマースロワを見てゐた。

誰でも暫らく會はなかつた人に邂逅はすと何よりも先づ年來別れてゐた間の容貌の變化に驚くもんだ。けれども暫時凝視めてると年の移り行くに伴れた變化は次第〳〵に失せて段々と昔の面影を現じ、各自の特異の相貌が自づから歴然と心眼に映じて來る。

身には獄衣を着けてゐやうと、身體に鰭が出來て胸幅が廣くなつてゐやうと、前額から顳顬へ小皺が出來てゐやうと、腫れ眼縁の下脹れ顏になつてゐやうと、カチューシャは矢張カチューシャ——復活祭の夜の嬉しさに充滿ちたる活き〳〵した愛嬌のある眼で戀する男を無邪氣く見上げたカチューシャと同じカチューシャである。

『不思議な因緣もあるもんだ。何年か會はずにゐて、陪審員で出庭した今日といふ日に這般な事件が持上つて、罪人席に坐つてるカチューシャに再會しやうとは實に思ひ掛けなかつた。如何鳧が着くものだらう？　何卒成るたけ早く落着を附けたいものだがナア！』

だが、ネフリュードフの心中には漸と後悔の芽が萌したといふだけで、尚だ中中後悔に負けて了はず、飽くまでも唯の一時の出來事と信じ、時さへ經てば忽ち消えて了つて、自分の一生には何の影響もないものとばかり思つてゐた。例へば惡戯をして主人に首根ッ子を押へられた小狗が鼻の頭を板の間に摩られて、キャン〳〵鳴いて折檻を逃げやうと悶躁いても後退りしても、無慈悲な主人が中々放して呉れないやうなもんだ。ネフリュードフも己れが從來の不行跡には愛想を盡かし、恰も首根ッ子を眼に見えぬ大威力の手に押へつけられたやうな氣がしないではないが、併し實を云ふと何故如此な目に會うものか、自分の罪業が夫程重いとは如何しても思はれない。現在眼前に横はる事件を己れが過去の業の產出したものとは如何しても信じたくなかつた。唯何がなしに或る大威力の慈悲も情もなき手に取つて押へられて如何しても逃げられぬと觀念したばかりであつた。勿論、本來の元氣は猶だ少しも沮喪しないで、矢張平日の通り泰然として第一列に座し、無造作に足を変叉しつゝ鼻眼鏡を弄つてゐた。が、其間絕えず心のドン底では啻に此一條ばかりでなく、是迄の怠慢懦弱なる放蕩無賴なる生活の卑怯未練、陰忍酷薄を身に染みて感じ、既往十何年の罪惡を得知れぬ魔術で自ら欺いて包み終せた恐ろしい幕が今や漸く動き初めて、幕の中の慘澹たる光景がチラリホラリと瞥見されるやうな心地がした。

第二十三回

裁判長は說明を終つてから陪審員に諮問する項目廉書を手に持つて、故と嚴めしく勿體振つて、彼方より進んで請取りに來た陪審員長に交附した。

陪審員は何よりも評議室へ寛ぎに行かれるのが嬉しくて、一人一人に箆爾箆爾者で席を離れ、何だか羞恥るさうな風をしつゝ之から先き如何して宜いのやら無我夢中で順々に法庭を退いた。

陪審員が退庭して閾が閉められると同時に、憲兵はキラリと劍を拔いて肩に捧げつ、突と進んで戸口を警戒した。續いて判事連も席を起ち、被告も亦庭外へ引出された。

陪審員等は評議室に入ると、前と同樣、先づ第一に紙莨を燻かし初めた。法庭に列してる間は誰も彼も柄に無い演劇をしてゐるやうな心地がして何分尻が落着かなかつたが、評議室に引退つて紙莨を一服喫つてから初めて吻と息を吐き、漸く肩拔けがした氣になつて俄にがやがやと饒舌り出した。

『彼の女の知つた事ッちやアねエ。可憫相に連累を喰つたんでげすせ、』と好人物の紳商君は云つた。『思切つて寛典を加へてやらざアなりますめエ。』

『そこが大に考へ物だテ、』と陪審員長は勿體らしく、『個人の感情の爲め偏頗つた判決をしてはならぬからノウ。』

『裁判長の說明は大出來だッた哩、』と退職大佐は云つた。

『大出來！何が大出來？此方は眠くなつて堪らなかつた。』

『先づ一番の目の着け處は、若しマースロワガ共謀しないなら、旅館の傭人達が金子の有處を知りやう筈がないぢやアないか、』と猶太出の店商人は云つた。

『すると君はマースロワが金子を盜んだ發頭人だと云ふンだネ？』と一人の陪審員は云つた。

『俺やア爾うは思はねエ、』と何處までも親切な紳商君は云つた。『一から切まで彼の赤眼玉の極道婆の小細工に極つてらアな。』

『悉皆臭い哩。一つ穴の曲者ぢや、』と大佐君は云つた。

『だが、あの赤眼玉の婆は被害者の座敷へ入らんたら云ふぢやアないか。』

『彼の婆が何云ふか。阿呆らしい、那樣な奴の出鱈目を眞に受けて如何なる。

俺やア金輪際信じませんや。』

『貴君が信じると信じないとでは此問題を決定する譯には行きませんナ、』と店持商人は云つた。

『そちやがノウ、あの若い女郎が鍵を持つてたのぢやナ、』と大佐君は云つた。

『持つてれば如何するンでげす？』と紳商君は勃然となつた。

『夫から指輪もぢやテ？』

『指輪は女が陳述した通りちやげエせんか、』と紳商君は息卷荒く、『スメルコーフと云ふ奴が全體一風變つた變挺れんな奴で、御酒の廻つた勢で女を打擲した事はしやしたが、そこは根が善人でげすから氣の毒になる。是りやア左もあるべき筈、當然でげすテ。そこで氣の毒になつたから、「氣に掛けて呉れる勿、和睦の印に與るぞ、」と平詑まりに詑まつて指輪を呉れたんでげすせ。能く有る奴でさア。處で六尺五寸の大男だッてやすから、大丈夫三十貫以上の貫目があつたでげせうが、其の三十貫以上の大男の力で……』

『其樣な事は問題にならない、』と學校の先生のピョートルは云つた。『問題は此事件を發意し若くは敎唆したのは彼の女か、或はホテルの雇人か何方かと云ふのだ。』

『だが、ホテルの雇人達ばかりでは出來ぬ仕事ぢやといふは彼の女が鍵を持つてたンぢやからネ、』と這般な埒もない小田原評定が暫らく續いた後、陪審員長は言葉を更め、

『諸君、之から討議に掛りますから、何卒各々御着席なすつて十分に御意見を仰しやつて下さい、』と陪審員長は自ら議長席に就いた。

『那樣云ふ狹搔きの阿婆摺は何でも行りかねまじきだ、』と店持商人は此事件の主犯が確かにマースロワである意見を證據立てやうとして、自分の友達が大通りで美人の掏盜に時計を掏り取られた咄をした。

退職大佐は更に之よりも甚だしい例、即ち銀のサモワール（湯沸しの類）を矢張同じ質の毒婦に盜まれた一件を話した。

『諸君』と陪審員長は鉛筆でテーブルを叩きながら『之より諮問の項目を一々讀上げますから御注意を願ひます。』

一同は靜まり返つた。

諮問の條項は次の通りである。

(一)クラピエンスキー郡ボールカ村の農シモン・カルニチンキン三十三歳は他と共謀して千八百八十□年一月十七日商人スメルコーフに毒酒を與へて謀殺し且凡そ二千六百圓に該當する金員及金剛石入り指輪を盗取したり、此犯罪は確認すべきや?

(二)平民ユウフエミヤ・ボーチコワ四十三歳は亦前項同罪なりと確認すべきや?

(三)平民カテリーナ・マースロワ二十八歳は又第一項犯罪と同罪なりと確認すべきや?

(四)被告ボーチコワは第一項犯罪に就き若し其全部を確認せざる時は、千八百八十□年一月十七日マヴリターニヤ旅館に被傭中宿泊の旅客スメルコーフ所有の鎖鑰したる鞄より其目的を以て僞造せる鍵を用ひて解鎖して二千六百圓を盗取したる一部の犯罪のみを確認すべきや?

以上の四項であつた。

陪審員長は先づ第一項を讀上げつ、

『諸君、諸君の御意見は?』

此諮問は何の議論も面倒もなく即座に『有罪』と速決してカルニチンキンが毒殺にも竊盗にも關係したる事を一同確認した。唯つた一人職工組合頭取の老人だけが無罪を主張した。陪審員長は、此奴必定理由が解らないのだナ、と考へてカルニチンキンの犯罪に關する事項を一々反覆して聞かした。處が、老爺は十分解つてるのだが、何處までも慈悲を加へてやらねばならぬ、『吾々は皆聖人でない、』と剛情に主張し、何と云つても持説を曲げなかつた。

第二項のボーチコワでは議論が中々にやかましかつたが、結局辯護士が剛情に主張した通り毒殺の證據は頗る不十分だと云ふ事に歸して、無罪と一致した。例の紳商君だけはマースロワを放免したい計りに、此事件の主犯は疑ひもなくボーチコワだと云ふ説を極力主張した。多勢の中には無論此説に贊成したものも多かつたが、法律一點張の陪審員長はボーチコワを毒殺の主犯と認める根據

が少しも無いと堅く執つて動かず、散々評定を凝した末、到頭其說が勝利を得た。

第四項の同じくボーチコワに關する一條は直ぐ有罪と認めて了つたが、例の老爺の職工組合頭取の主張で寛大な沙汰を乞ふ事に決した。

第三項のマースロワでは非常な大議論が盛んに沸騰した。陪審員長は毒殺竊盜二罪ともにマースロワが關係してる事を主張し、紳商君は之に反對した。休職大佐、店持商人、職工組合頭取は何れも紳商君の肩を持つたが、殘餘の連中は曖昧にグラ〲してゐたので。結局陪審員長の說が成立し掛つたのは强ち此說が理由があるからでなく、陪審員連が何れも怠屈して了つて、何でも關はぬから少しも早く結局を附けて自由の身體になりたかつたからである。

此事件の顚末から考へても、昔し知つてるマースロワの性質から推しても、ネフリュードフは堅くマースロワの無罪を信じてゐた。殺人にも竊盜にも何の關係もないのは明々白々で、彼是れ云ふまでもなく陪審員連中は悉く無罪說に一致して了うと信じてゐた。然るに紳商バクラショーフの下らぬタワイもない辯

護說と、(此剽輕者がマースロワの美貌に悉皆打込んで了つたのは心に包み切れないで顯現と顏に出してをる。)陪審員長の剛情一徹の理窟で一同は倦き〲して了ひ、何でも關はぬからマースロワを罪人と決めて了はうとする形勢を見て、ネフリュードフは堪らなくなつて一と議論しやうとしたが、若しやマースロワを辯護し過ぎて昔しの關係が氣取られやしまいかと云ふ心配が先に立つてツイ躊躇した。が、此場合は迚も這般な悠長な沙汰ではないと、斷然勇氣を鼓して自分の意見を吐かうとして赤くなつたり靑くなつたりしてゐる最中、學校敎師のピョートルは突然座を起つて叫んだ。

『暫らく、異議が有ります。』

ピョートルは今まで默つてゐたが、陪審員長の權柄顏が小癪に觸つて異議を容れやうとして、丁度ネフリュードフが云はうとしたと同じ事を云つた。

『暫らくお待ちなさい。陪審員長はマースロワが鍵を持つてたのが竊盜罪の何よりも有力な證據のやうに考へらるゝやうだが、ホテルの雇人共は何もマースロワの鍵を借りなくたつて、マースロワが去つて了つた後で腰鍵で鞄を開けた

方が餘程世話なしちやァないか。』

『でげすとも――でげすとも、』と紳商君は云つた。

『第一マースロワは金子を盗む筈がない。境涯が境涯だから金子を盗んだつて如何する事も出來ない。匿す場所からして無い。』

『其事、其事、俺も其處を云はうと思つた處でげすテ、』と紳商君は我が意を得たりと云ふ調子で云つた。

『畢竟するに、マースロワが偶然旅館の座敷に來たのが災難。惡人奴等は是れ幸ひと巧く機會を利用して自分達の罪をマースロワに塗り付けたのだ、と、斯う鑑定した方が遙かに實際を穿つてやしまいか。』

ピョートルの議論の仕方が如何にも激昂した調子なので、陪審員長も矢張激昂して頗る頑固に反對した。が、ピョートルは陪審員の多數が必ず自分の味方をすると頭から呑んで掛つて、飽く迄もマースロワの竊盗罪は冤枉である、指輪は無論貰つたのだと極力主張した。

夫から毒殺一件が問題となると、マースロツの熱心な辯護人の紳商君は、本

と〳〵毒殺する意志がなかつたのだから放免するのは當然だと主張した。が、陪審員長はマースロワ自身が既に藥を薦めた事を自白した以上は放免したくも放免出來ないと云つた。

『でげすがマースロワは鴉片劑だと思つてたんでげすせ、』と紳商君は云つた。

『鴉片劑だつて人命を絶つ事が出來る、』と兎角に問題外に走りたがる休職大佐は喙を容して、自分の義理ある兄弟の妻が鴉片の過量で危なく死なうとした處を漸く醫者が間に合つて助かつたことがあると話した。此話を大眞面目で一生懸命に勿體振つて力瘤を入れて話すので、誰しも止めるだけの勇氣がなかつた。其中で店持商人は毎度大佐の話には中てられつけてるので、負けない氣になつて横槍を入れやうとして、

『だが、中には服み慣れて了つて四十滴位服んだつて一向平氣なのが有りますせ。現に私の親戚に――』

と話し出したが、大佐は一向辟易まないで、義理ある兄弟の女房の鴉片騷きを平氣で饒舌り通した。

『諸君、最う五時になりますよ。』と一人の陪審員は云つた。

『夫では諸君、如何したら宜からう？』と陪審員長は、『マースロワの事實は承認するが、竊盜の意志は毫しも無い、且何にも盜まなかつた――としたら如何なものだらう？』

ピョートルは自分の說が勝つたので得意になつて贊成した。

『何分寬大に取計らひたいもんでげすナ、』と紳商君は云つた。

一同は皆贊成した。獨り例の職工組合頭取だけは何としても判然と『無罪』としなければならぬと主張した。

『結局は同じ事になる、』と陪審員長は說明した。『盜むと云ふ意志はない、且何にも盜まない。夫故に無罪――と云ふ譯で、極めて明々白々である。』

『夫なら可也、夫で結構。寬大の上にも寬大を願度いのでげすナ、』と紳商君は大御機嫌だつた。

一同は既う怠屈して了つた。散〻面倒臭い評定で飽き〱して、遮二無二速決を急いだので、毒殺事件に就ては、マースロワが投藥した事實を承認したゞけで、毒殺する意志なしと云ふ肝腎要の但し書を加へなければならぬ事を誰しも氣が付かなかつた。

ネフリュードフ其人ですら矢張逆上せ返つてゐたから、此手落には少しも氣が付かなかつた。で、答辯書には其通りに『毒殺の意志なし』といふ但し書を拔かしたまゝで法廷に提出する事となつた。

ラベレーの昔話に、昔し或る法律家が事件を決するに當つて、凡そ關係ある法律文は洗ひざらひ悉く引照し、無意味の羅甸法文を二十頁も讀上げてから、扨て愈々といふ時になると骰子を振つて、若し奇數が出たなら被告、若し偶數なら原告の勝利と決定せん事を判事に申告したと云ふ咄がある。

此事件も丁度這般なものである。犯罪の決定は陪審員の總員が盡く一致して認めたからでなく、裁判長が永たらしい說明をしながら斯ういふ場合には『其事實を承認すれども生命を絕つの意志なし、』と答へるのだと云ふ肝腎要の一番大切な注意を陪審員に與へるのを忘れたからである。休職大佐が問題外の義理の兄弟の女房の鴉牙騒ぎを長々と話したからである。ネフリュードフまでが茫然

して『生命を絶つの意志なし』と云ふ但し書を拔かしたのに氣が付かなかつたからである。學校教師のピョートルが諮問に對する答辯書を讀上げる肝腎の時に退席したからである。第一、何より彼より陪審員一同が怠屈して了つて、何でも關はぬから一刻も早く濟まして了はうと急いだからである。

陪審員は鐘を鳴らした。法庭の扉口を警戒する憲兵は劍を鞘へ納めて退き、判事達も各々自席に復し、陪審員も亦一人々々に着席した。

陪審員長は重々しく容體振つて答辯書を裁判長に提出した。裁判長は受取つて一と目見ると喫驚して同僚に相談しかけた。何故なら陪審員等はマースロワに關する最初の項に――竊盗の意志なし――と但し書を付けて置きながら肝腎の第二項には――生命を絶つの意志なし――といふ但し書を落してあるからで、此答辯書通りだと、マースロワは金は盗まなかつたが何の理由もなく毒殺した事になる。

『何ていふ馬鹿げた決定をしたもんだらう、』と裁判長は左方の同僚に耳語いた。『之だと西伯利亞へ流し者だ。何にも罪は無いのだがナア。』

『えッ、何にも罪が無い――無罪だつてのかネ?』と小難かしい判事は云つた。『無罪とも、無罪とも、確かに無罪だ。之は訴訟法第八百十七條を適用する場合だ。』(第八百十七條には法庭は陪審員の決定を不法と認めたる場合破棄するを得とある。)

『君は先ア何と思ふ?』と裁判長は最一人の同僚に對つて訊いた。此柔しい判事は直く答へないで、例の數字のお呪ひをしやうと、自分の前の書類の番號を見て、此番號に或る數字を加へて三で割つて見た。若し割り切れたら一も二もなく裁判長の說に贊成する筈であつたが、生憎割切れなかつたので少しく躊躇したが、結局矢張、裁判長に同意して、

『僕も適用說だ。』

『君は?』と今度は又小難かしい判事に尋ねた。

『不可ん、絕對に不可ん、』と此判事は斷乎として首を掉つた、『左もなくてさへ陪審員は兎角に罪人を放免したがると新聞が攻擊しをる。若し法庭が其樣な手緩い事をしたら何と云ふ。如何な情實があらうと吾輩は斷じて贊成出來ぬ。』

裁判長は時計を出して見た。『可憫さうだが、如何したもんだらう？』と獨語ちつ、答辯書を陪審員長に渡して朗讀を命じた。

一同は起立した。陪審員長は右へ歩いたり左へ歩いたりして、大氣取に氣取つて咳拂ひしつゝ諮問と答辯とを一々讀上げた。

法庭は悉く、書記も辯護士も、イヤ副檢事でさへが意外の結果に一驚を喫した。被告等には此答辯書の意味が解らぬから、一向平氣に放念してゐた。

一同は再び着席した。裁判長は如何なる刑を適用すべきかを副檢事に質問した。

副檢事どのはマースロワの犯罪を確認せしめた意外な結果に得意滿々として、之も全く自分の能辯の爲だと自惚れて、意氣揚々として起立しつ、

『シモン・カルニチンキンは刑法第一千四百五十二條及一千四百五十三條第四項に照らし、ユウフエミヤ・ボーチコワは一千六百五十九條に照らし、カテリーナ・マースロワは一千四百五十四條に照らして各自處分すべきものとす。』

と云つた。此求刑は三人ともに刑の最も重きものに問ふたのである。

『法庭は此決定を議する爲め暫く休憩を命ず、』と裁判長は宣言して直ぐ退庭した。陪審員連は何れも暢氣に立派なお手柄をやつた心持で、仕たり顔に其後から續いて退出したり其邊らあたりを逍遙いたりしてゐた。

『飛んでもない馬鹿を行つちまつたナア、』と學校敎師のピョートルは陪審員長と話してるネフリュードフの傍へ來て、『到頭何にも罪の無い女を西伯利亞に流しちまうなんて、何の事だ。』

『えッ、何を云ふ？』とネフリュードフは喫驚して此男の例の癪に觸る馴々しい態度も忘れて訊くと、

『何をつて、君、「生命を絕つの意志なし」と云ふ但し書を落して了つたからナ。書記の話だと、副檢事奴は十五年の徒刑に處すると云ひ臭るさうだ。』

『爾うとも、其通りに定つて了つたのだ。』と陪審員長は云つた。

ピョートルはマースロワが金子を盜む意志がなかつた以上は殺人を行ふ意志も亦隨つて無かつたのは自然の結果だと盛んに主張し出した。

『だが君、今になつて其樣な理窟をいふが、我輩が評議室で答辯書を讀上げた

時は誰も異議が無かつたぢやないか。』と陪審員長は自ら辯護した。

『其時は僕は在なかつた。』とピョートルはネフリュードフに向ひ、『君は亦アッケラカンと放念してゐたんだらう。』

『拙者も實は氣が付かなんだ。』とネフリュードフは吻と息を吐いた。

『氣が付かんて事があるもんか。』

『全く氣が付かなかつた。だが、何とかしたら恢復が出來さうなもんだが。』

『最う無效だ、終結して了つたンだから。』

ネフリュードフは被告等を見ると、今や運命の決定せられんとする彼等は憲兵を背後に勾欄を前に身動きもしないで凝乎としてゐた。マースロワだけは微笑してゐた。

ネフリュードフの心はモシャクシャと擾亂れて來た。今の今までは的確マースロワは無罪放免となつて矢張此町に住へる事と思つてたから、之から先きの結局を如何附けやうと云ふ考も尙だ浮ばなかつた。勿論、今更如何しやうもないが、西伯利亞へ徒刑になつて了つては全然緣が切れて了う。籠の中に悶いてる

負傷鳥は助かる希望が既う失くなつて了つたのである。

第二十四回

果してピョートルの思はく通りであつた。

裁判長は評議室から宣告文を齎つて歸ると、直ぐ次の通り朗讀した。

『千八百八十□年四月廿八日皇帝陛下ノ勅ヲ奉ジテ當巡回裁判所刑事部ハ刑事訴訟法第七百七十一條第三項、第七百七十六條及ヒ第七百七十七條ノ第三項ニ由テ陪審員ノ決定ニ從ヒテ宣告ス。農シモン・カルニチンキン三十三歳、平民カテリーナ・マースロワ二十八歳ノ兩名ハ刑法第二十五條ニ照シテ公權及ヒ財産所有權ヲ剝奪シ、カルニチンキンヲ徒刑八年、マースロワヲ徒刑四年ニ處シ、各西伯利亞ニ於テ服役ヲ命ズ。平民ボーチコワ四十三歳ハ刑法第四十八條ニ照シテ公私ノ特權ヲ停止シ禁錮三年ニ處ス。本裁判費用ハ被告三人各自分擔スベキモノトス。但シ被告等支辨シ能ハザルトキハ國庫ノ負擔トス。證據物件ハ公賣ニ附シ、指環ハ原所有者ニ還附シ、試驗用硝子管ハ盡ク破棄ス。』

カルニチンキンは指の股を廣げた手をダラリと垂下げたまゝ、眞直ぐに突立ちて頰をビク〳〵と動かしてゐた。ボーチコワは平氣で沈着き冷ましてゐた。

が、マースロワは此宣告を聞くと同時に眞蒼になつて了ひ、『寃罪です、寃罪です。』とワッと聲を上げて法廷の隅から隅まで響渡るやうに泣出した。『餘まりです。何にも惡い事を仕た覺えのないものを、竊盜だの人殺しだのと、思ひも附かない、飛んでもない事を。何にも知りません。今申上げた通りで嘘でも僞でもない。そんな大それた、飛んでもない事を……』と腰掛に泣頽れて歔欷上げ、カルニチンキンやボーチコワが退庭しても尚だ泣止まずに動かないので、到頭憲兵が袖を引張つて無理遣りに引立てた。

『こいつア捨て置く事は出來ん哩。』とネフリュードフは獨語ちつ、胸に有餘る懊惱も忘れて、心も徐ろにマースロワの跡から續いて廊下へ飛出した。唯何となく最う一度マースロワに會ひたいばッかりに。

入口は一杯人集りがしてゐた。辯護士や陪審員は兎も角用事が濟んだので大喜びで、一度にドヤ〳〵と法庭を退出した。ネフリュードフは仕方がなしに雜沓の透くまで待つて、漸とこさと廊下へ出た時はマースロワは遙か前方へ行過ぎて了つたので、人が怪訝な顏して見るのも關はずに周章てふためいて追駈けざ

まに呼留めた。此時マースロワは既う泣止んでゐたが、尙だ啜泣をしつゝ淚に赤らむ活きてる空の無い顏を手巾の端で拭いてゐた。が、ネフリュードフの呼留めたには一向氣が付かずにトットと行つて了つた。

ネフリュードフは仕方がなしに小戻りしつ、今度は裁判長に面會しやうと急いだ處が、最う既つくに退庭して了つた後なので、周章てゝ玄關まで追驅けて、丁度薄鼠の外套を引掛け銀の把柄のステッキを給仕から受取つて今出掛けやうとする處で追付いた。

『一寸と貴官にお話し仕たい事があります、只今の裁判一件で、』とネフリュードフは慇懃に、『拙者は陪審員の一人です。』

『おウ、ネフリュードフ公爵でしたナ。何處かでお目に掛つた事があつたッけ、』と裁判長はネフリュードフの手を握りつゝ、いつぞや或る夜會で初めてネフリュードフに會つた時、好い齡をした自分が若いものよりは大浮れで盛んに踊つた事があるのを憶出した。『如何いふ御用ですかナ?』

『外でもないですが、マースロワに關する陪審員の答辯書に脫漏が有りました。

あの宣告だと、彼の女は罪が無くて徒刑に處せられたわけです、』とネフリュードフは滿面に愁色を浮べた。

『左樣、法廷は諸君の答辯書に從つて宣告したのでムる、』と裁判長は一向膠もなくスタ〳〵玄關口の方へ步きながら、『諸君の答辯書は些か撞着してゐるとは認めましたがナ、』と率氣ない返答をした。が、自分が陪審員へ說明した時、「殺人の意思なし」と云ふ但し書が無ければ有罪と決定するのだと注意するのをツイ云ひ忘れた無念に偶つと氣が付いた。

『無論仰しやる通りだが、併し此錯誤を修正する事は出來ますまいか。』

『控訴するのですナ。控訴する理由は十分有ります。辯護士に御相談なすッたら宜からう、』と言棄てつゝ裁判長は帽子を橫たに被つてスタ〳〵行つて了はうとした。

『併し夫は困る。』

『だが貴爵、貴爵も御承知の通りマースロワには二つ道が有つたんです、』と裁判長は成るべく叮嚀に心持快く應對はうとして、襟の上に被さる頰鬚を奇麗に

撫でながら、ネフリユードフの肱の下に自分の手を入れて、『貴爵もお歸りになるンでせうナ？』

『はア、』とネフリユードフは素早く上衣を引掛けて一緒に出掛けた。

で、ポカ／＼した氣持の好い日向へ出ると、敷石を轢る車輪の音が騒々しいので二人は思はずも調子を張り上げた。

『餘程奇妙なわけです、』と裁判長は、『元來マースロワは放免になるか、でなければ一時拘留される位な處で、西伯利亞なんぞにやられる筈が無いのです。貴爵方が「殺人の意志なし」と但し書を附けてさへ下すつたら文句なしに直ぐ放免されて了うのでした。』

『全く其但し書を拔かしたのは拙者共の勘辨出來ない大失策――』

『そこですテ。そこを御思案なさい、』と裁判長は微笑しながら時計を出して見ると、之は大變だ、戀しい可愛い奴のクララに約束した時間に唯つた十五分だけしか無い。

『辯護士に篤と相談して御覽なさい。控訴する理由は幾許でもあるから容易に

出來ますテ、』と急いで口早に云ひつゝ辻待馬車の馭者を呼び、『ヅヴォリャンスカヤへ三十錢、増しは與らんぞ。』

『へイ、宜しうムいます、さア旦那。』

『では急ぎますから失敬します。御用があつたら宅の方へ――ヅヴォリャンスカヤ町のヅヴォーリニコフと御尋ね下さい、』と馴れ／＼しくネフリユードフに會釋しつゝ、周章た馬車へ飛乘つて別れた。

*Fanárin

第二十五回

裁判長と相談したり、新らしい空氣を吸つたりしたお蔭に、ネフリュードフは多少か心持が落付いて來た。畢竟如此な風に氣が上摺つて逆氣せ上つたのは全く今朝から一日意外な豪い目に邂逅はしたからであらう。

『奇妙な因緣もあつたものだ。全力を盡して、少とも早くマースロワの運命を輕くしてやらずは俺の義理が濟まぬ。斯うなつたら片時も猶豫してはゐられぬ。早速ファナーリンか、ミキーシンに賴むのだが、一體何處に住つてるのか、左に右く此處の法庭で聞いて行くが上分別。』と偶つと有名な二大辯護士の名を憶出し、法庭へ取つて返して、外套を搔なぐり捨てつ急いで二階へ行くと、出會頭に廊下でファナーリンに邂逅はしたのを幸ひに直ぐ引留めて、實は用件があつて今搜しに來た處だと云つた。

ファナーリンはネフリュードフの顏を見覺えてゐたし、名は本より知つてゐたから、喜んで御相談に乘らうと云つた。

『實は私も非常に草臥れてますが、餘りお手間を取りませんなら大凡の御用件を伺ひませう。――如何です、此室へ入らしッては?』と判事の私用室らしき部屋へネフリュードフを案內しつ、卓子を央に相對ひとなつて、

『如何いふ御用件ですナ?』

『只今お話しするが、其前に一つ御承知願ひたいのは此件に關し祕密を守つて戴きたい。拙者が此事件に特別に身を入れてる事を餘り世間にパッとさせ度くないのです。』

『如何にも、無論でムる。』

『實は拙者は陪審員となつて當法庭に列したのですが。陪審員會議で誤つて何の罪もない或る婦人を西伯利亞へ流刑に決定したんですナ。拙者も陪審員の一人であつて見ると、與つて多少の責任があるゆゑ、實は良心が咎めて甚だ氣の毒でならんのです。』

と云つてる中に我知らず眞赤になつてドギマギして來たには自分ながら驚いた。ファナーリンは素速こく此容子を瞥と見て取つたが、直ぐ下を向いて何喰はぬ顏して聞いてゐた。

『如何にも。』
『全く罪もないものを誤つて重刑に處すべき決定を與へたんですから、何分氣の毒でノウ——夫故拙者は更に高等法衙へ控訴してやりたいと……』
『元老院へですかナ？』
『爾うです。そこで此事件を御引受け願ひたいので——』と首尾よく此厄介極まつた難問題に勝ちたい餘りに、『訴訟入費如きは幾許要らうと厭ひません。盡く拙者が支辨します。』と云つた。
『宜しうムる。お引受しませう。』と辯護士はネフリュードフが斯ういふ事には不案内なのを見て慇懃に微笑しつゝ、『が、元來先ア如何いふ事件でムるナ？』
と云ひつゝネフリュードフが事件の經過の概略を話すを聞取つて、
『宜しうムる。明日能く調べて研究して見ませうから、明後日——イヤ——木曜日の方が都合が好い、木曜日の午後六時に拙宅へお運びを願つて、其時に精しく御挨拶する事にしませう。夫では今日は——尙だ之から數件調べるものがありますから失禮致し升。』

と云つて互に別れた。先づ首尾よくマースロワの辯護を引受けて貰つたので、ネフリュードフは漸うやつと安心して町へ出て、春日和の長閑さに搗てゝ加へて新らしい空氣を吸ふと、初めて心持が爽然して來た。で、辻馬車に取卷かれて煩さく勸められるのを漸つとこさと拂ひのけてブラ〲と歩き出したが、カチューシャの顏や姿がチラクラしたり、昔しカチューシャを弄んで勝手に棄てた我が輕薄な所業が何から彼まで一時にムラ〲と心に湧いて來て、クル〲と頭腦の中を廻つて、俄に頭を壓へ付けられるやうな氣持がすると、急に鬱いで來て泣き出したくなつた。
『イヤ、如此な事は後日ユル〲と考へるべしだ。今の今、目前の急務は此心中の懊惱を一掃しなければならぬ。』と心中に思つた。
偶つと此時、コルチャーギン家の晩餐に招待されてる事を憶出し、時計を見ると尙だ十分に時間があるので、丁度通り掛つた市內鐵道の鈴の音を聞くや否、飛乘りして市場まで來て復た辻馬車に乘換へて、十分經つか經たぬ間にコルチャーギン家の堂々たる邸の門に着いた。

*Kölosof

第二十六回

『何卒此方へ、』とコルチャーキン家の馴れ〳〵しい肥胖した玄關番は專賣の音のしない英吉利製の鐵鉸の着いてる閾をスウッと開けて『お待ち申してました。皆樣食堂に在らつしやいます。閣下が入來しつたらお通し申せと云ふ仰しやり付けでムいます。』

と階段口まで案内して鈴を鳴らした。

『お客樣は有るかネ？』と云ひつゝネフリュードフは外套を脫いだ。

『お宅の方の外にはコーロンフ*さんとミハエルさんだけでムいます。』

『此時、美しい頰髯を生やした美男の用人は燕尾服の白手袋で二階から下りて來つ、

『さア、何卒お二階へ。先刻からお待兼でムいます。』

ネフリュードフは案内されて二階へ行き、お親昵の結構な大廣間の舞踏室を通り拔けて食堂へ行つた。

コルチャーギンの一家族は、居間から外へ一歩も踏出した事のない公爵夫人の外は悉く食卓を圍んで在た。上座の老主人公の左にはお抱への醫博士、右には主人の友達で以前は地方の貴族長、今は銀行頭取の自由黨員コーロンフが着席してゐた。醫博士の次には四歲になる末の令孃と保姆のレイナー*女史、其對席に一人息子のペーチャで、中學校の第六級生だが、此子の試驗が尙だ濟まぬばツかりに全家が尙だ田舍へ出掛けないのだ。ペーチャの家庭敎師の大學生が其隣席を占めて、其次がミーシャと呼ばれてる主人の甥のミハエル、其對席は四十になるが猶だ獨身の老孃カテリーナ女史、其次がネフリュードフの約婚の公爵令孃のミッシーで、その隣席が特に空けてあつた。

*Rayner

『オヽ能うムつた。さア、何卒、其席へ。大分待兼ねましたンでナ、御免を蒙つてお先へ、今やり初めた處でムる、』と老公爵は入齒で念入にクチヤ〳〵、と殺を嚙みながら骨の折れる顏をしつゝ、睫毛の無い赤味の帶した眼を釣り上げてネフリュードフを見たが、直ぐ視線を轉じて、『スチーブン、』と口一杯に頰張つた含み聲で胖然と肥つた品のある執事に向つて空席を眼で知らした。

ネフリュードフは以前からコルチャーギン老公爵を能く知拔いてゐて、度々食卓

を共にしたから、舌打して喰ふ癖のある下作な唇の赤ら顔、胴衣へピタリと掛けたナプキンの上からぬッと出てゐる太い頸筋、軍隊生活で鍛上げた赤銅作りの逞しい筋骨を十分看慣れてゐたが、今日といふ今日は此骨太の頑丈作りの身體つきが非常に癪に觸つた。此老人の殘忍酷薄なるは、昔し或る地方の長官をしてゐた時分、何の理由も絲瓜もなく、唯自分は金があるから何時までも在職する必要もなく、所詮一時の腰掛なら人民の面倒を見るがものは無いといふだけで、配下の人民を撲つたり蹴たりして、剩つさへ縊り殺した事すらあつたのを偶つと憶出した。

『はア、只今。』と主人の命を承はりたるスチーブンは澤山の銀器を飾り立てた戸棚から大きなソップ匕を出しつゝ、美男の用人に頤で合圖をすると、心得顔の用人はナイフやフォークや隅に定紋を縫附けたナプキンの綺麗に疊んだのを公爵令孃の隣席へ準備した。

ネフリュードフは順々に食卓を廻つて一人々々に握手の禮をした。老公爵と婦人達の外はネフリュードフの來る前に一々席を起つて會釋した。定つた禮式ではあるが、此食卓廻りや平生碌々口を利いた事もない人達との握手が此日は何となく馬鹿げて笑止に思つた。

で、遲刻の謝辭をしつゝミッシー令孃とカテリーナ女史の間に着席しやうとすると、老公爵は『ウォッカを飲らんのなら蝦だの鹽鰊だの鹽漬の魚卵や乾酪を準備した彼方の卓子で先つ腹拵へをしたら宜からう』と云つた。ネフリュードフは格別腹が餓いたとも思はなかつたが、一と口味はつて見ると初めて空腹が解つて、麵麭と乾酪を夢中になつて平げた。

『如何です、首尾能く社會の基礎を顚覆しましたかナ?』とコーロッフは陪審制を攻撃する反對新聞の慣用文句を皮肉に引照つて、『有罪者を放免して無罪者を處分したンでせう——はッはッ!』

『何ちや、社會の基礎を顚覆する——基礎を顚覆する?』と老主公は笑ひながら云つた。此老公爵は莫逆の友の學問見識を深く信任してゐるのだ。

ネフリュードフは迂濶に口を滑らして危なく無禮をしてはならぬと要愼して、何とも答へないで聞流し、聞えぬ振して蒸氣の昇てゐる肉羹を夢中に啜つて居

た。

『この人は打棄らかして食べさしてお置きなさいよ。』とミッシー孃は笑ひながら、故と耳立つやうに「この人」と云つて夫となく二人の深い中を仄かした。

コーロソフは大きな聲で陪審制に反對する新聞社說の受賣をして盛んに大氣焰を吐いた。主人の甥のミハエルも一緒になつて陪審制の反對說に雷同して同じ新聞紙上の別項に載つてるものを引張出した。ミッシー孃は此論戰には加はらないで、例の通りの花やかなお粧りをした上に、十分の嬌態を作つてネフリュードフに向ひ、

『嘸お疲勞でせうネ。お腹がお飢き遊ばしたでせう？』

『いゝや――時に貴孃は畫を見に入らしッたかネ？』

『否エ、畫の方は延ばして、サ[1]ラマートフさんの許でテニスをしましたの。成程ク[2]ルックスさんは非常な名人ネ。』

ネフリュードフが此席に臨んだのは、一つにはムシヤクシヤ腹を紛らさう爲めであつた。元來コルチャーギン家は萬事が贅澤づくめな上に、行く度毎に八方か

[1]Salamátof
[2]Crooks

ら款待されるから何處よりも一番好きであつたが、不思議に此日は全家の有りと有らゆるもの――玄關番の馴れ〳〵しい親切面、幅廣の仰山な階子段、眼の醒める如に見事な盛花、鞠躬如としてヘイコラする用人、美しくピカ〳〵した食卓の飾付け――何から何までが頓と面白くなかつた。當の御本尊のミッシー令孃其人からして、男に見せやう爲めの精一杯のお化粧から萬事の扮作や嬌態までが空々しくて氣に喰はなかつたから、況してや自由主義を鼻に掛けたコーロソフの獨りよがりの馬鹿さ加減や、老公爵の橫柄な下作な極道面や、スラヴ贔負のカテリーナ女史の自慢の佛蘭西語や、保姆や家庭敎師の幇間然たる卑屈面は鼻持もならぬ程不快で堪らなかつた。其中でも取別けて氣色に觸つたのはミッシー孃の口から屢々洩れた「この人」と云ふ言葉で。

ミッシー孃に對するネフリュードフの心は實は尙だ今日まで判然と定つてゐないので、或時は月夜に物を見るやうに唯妖艶かに美しくばかり見えたかと思ふと、或時は又日が燦然と射すやうな氣がすると共に瑕瑾が顯然して來たのを見免すわけには行かなかつた。丁度今は白晝の場合で、顏の皺が見える、髮毛の縮れ

てるのが解る、肱の尖つてるのが目に立つ、別して拇指の爪の馬鹿々々しく大きいと云つたら老爺酷似である。

『テニスは半間なもんだよ。』とコーロツフは云つた。『吾輩が小兒の時分はラプタをやつたもんだが、ラプタの方が遙かに面白い哩。』

『否ヱ、貴下は喰はず嫌ひなのよ。テニスだつて隨分面白いもんだワ。』とミッシー孃は「隨分」といふ言葉に力を入れたが、ネフリュードフには之が故とらしく思はれて氣障で堪らなかつた。すると、ミハヱルとカテリーナが傍から容嘴をして、爰にテニスとラプタの優劣論が沸騰して、保姆と大學生と小兒が默つてゐた外は各々盛んに議論を戰はした。

『能く議論をやりをるワイ。』と老公爵はカラ〳〵と笑ひながら胴衣へ掛けたナプキンを掻ぐり捨てつゝ、椅子から起たうと後ろへガタ〳〵搖ぶるのを見て用人が急いで椅子を押へると、直く座を起つて別席の卓子へ行つた。

其後から續いて一同も椅子を離れて各々別席の食卓に豫て準備してある玻璃器を取りつ、香水入りの湯で口を嗽いでから、面白くもない下らぬ話を復た始め出した。

『ねヱ、爾うぢやなくて、貴郎は爾う思はなくて？』とミッシー孃はネフリュードフに向つて、人の性質は遊戲の趣味から割出す事が出來ると云ふ自說に贊成して貰はうとした。が、ネフリュードフは無愛想な顏をしつゝ膠もなく、

『拙者には解りませんナ。其樣な事は考へたことが無い。』

と答へた。其の答へ振から容子までが平日とは違つて尋常でないので、ミッシー孃は心配して何が原因で機嫌が惡いのかを知りたくてならなかつた。が、何喰はぬ顏して話を紛らさうとして、

『ネヱ、貴郎、阿母樣の處へ入來ッしやらなくて？』

『爾うですナ。』とネフリュードフは一向氣の乘らぬ返事をしつゝ紙莨を掴み出した容子が會ひたくもないといふ風であつたから、ミッシー孃は怪訝な顏をして何にも云はずに男の顏を眤ッと看守つた。

が、有繋にネフリュードフも偶と氣が付いて心に恥入りつ、『人の家を訪ねたら不快な心持をさせないのが作法である』と思返して、勉めて機嫌の好い顏をし

やうとして、若し母御の公爵夫人さへお構ひないなら喜んでお目に掛りませうと云つた。

『えヱ〳〵、阿母様は喜びますとも。紙莨なら貴郎、阿母様のお部屋で喫つても宜いワ。コーロッフさんも矢張行つてらッしッてよ。』

ミッシー嬢の母なる公爵夫人のソーフャは何時でも床に臥てばかりゐた。横になつて客に應接するのが今年で八年目で、レースとリボンに包まれて天鵞絨や金ぴか物や象牙細工やブロンヅや描金や花の中に圍繞れて、始終牀の中で寢たり起きたりしてゐた。で、一と足も室外へは踏出さないで、親友と呼んでる人達即ち普通の平民共から超脱けてると信じてる人達に限つて此部屋に出入するを許した。

ネフリュードフも幸ひに此特別待遇を受ける一人であつた。根が中々才子である上に、亡母と此公爵夫人と格別懇意の間柄であつたし、殊に可愛い娘と配合せやうといふ夫人の下心があるお庇で此特待に預るのである。

夫人の部屋は大小二室續きの客間を通抜けて奥であつたが、廣い客間まで來

ると、前へ立つて行くミッシー嬢は矢庭に屹と思込んだやうに佇立つて、金塗の女椅子の背を押へながらネフリュードフと向合つた。

豫てからミッシー嬢は縁談に氣を揉んでゐたのだが、丁度ネフリュードフが似つかはしい上に、人物が好いたらしいので、如何でも此人を自分のものとしやうと思込んでゐた。(尤も自分を此人のものとするのではなく、此人を自分のものとするので。)で、心の行き方の違つてる人には能く有勝な——自分では氣が付かんのだらうが——ネチネチした執拗い手管で目的を果さうとしたが、愈々爰で打明けて男の心を引いて見やうとして、

『ネヱ貴郎、如何遊ばしたノ？變つた事でもあつて？』

ネフリュードフはぐッと胸に膺へ、顔を顰めて眞赤になつた。が、

『はア、有りました、』と惡びれもせず飽くまでも眞直ぐに、『非常な大珍事が起りました。』

『大珍事て、何——何ですヱ？お話し遊ばせな。』

『お話し仕ても宜いが、倘だお話しする時期でない。猶だ十分熟考して見ませ

んからナ。何れお話しする時が來れば詳しくお話しする。今日の處は何にも訊いて下さる勿。』と云つて愈々眞赤になつた。

『爾う、話して下さらないンですネ？』とミッシー孃は少と焦れ氣味にピク〻〻〻ピクッと顏の筋を動かしながら後ろへ椅子を引摺つた。

『はア、今はお咄し出來ません。』とネフリュードフは凛乎と答へた。此斷乎たる返答は唯ミッシー孃に對する挨拶ばかりでなく、實は大問題がヒシ〻〻〻と迫つて來たのが解つて、氣が氣でないから、何方附かずに今だにグラ〳〵〻してゐる優柔不斷の自分の心に對しても退くに退かれぬ背水の陣を布いたのである。

『そんなら宜うムいます。さア、參りませう。』とミッシー孃は思返して屑よく、役にも立たぬ屈托を追退けやうと首を掉りつゝ、常よりは足早に前へ立つて案内した。

が、男の冷淡なのを怨む心の苦なさは迫來る涙を呑込んで強に制へつけやうとするミッシー孃の容子に現然と讀めたので、有繫にネフリュードフは故と情なく當つたのを不便とも氣の毒とも思はないではないが、此場合生中に女々しく氣を弱くしたら取つて返しの附かぬ破目になつて、憖じひ女の緣が繫がれて了つたら最う一生切るに切られない關係が出來て了う。之が何よりも恐しかつたので、心強く凝乎と辛抱して、無言で其踵に附いて公爵夫人の居間へと行つた。

第二十七回

コルチャーギン公爵夫人のソーフャは丁度今、頗る贅澤な滋養物づくめの食事を濟ました處である。食事中は何時でも閉切で、殺風景な喰方を誰にも見せないのが夫人の常法であつた。

寢牀の傍の小卓には珈琲碗が載せて有つた。丁度夫人は此卓でパチトス（紙莨の名）を燻かしてる最中である。頭髮も眼瞳も眞黑な、前齒の長い、瘦削のヒヨロ長い婦人で、病人のくせに中々若がつてる。

此夫人と醫博士との間に特別の懇ろな關係が出來てるといふ妙な評判が世間に傳はつて、ネフリュードフの耳へも既から入つてゐた事はゐたが、目前に夫人の寢牀の側に大氣取りに氣取つてる醫博士が念入に揃へた髯を油光りにテカテカさせてるのを見ると今更のやうに世間の噂を憶出して不快な心持がした。

ソーフャ夫人と竝んで、低い柔はりした椅子に腰を掛けてるコーロソフは頻りと珈琲を攪和してゐた。リキュールの杯が卓上に置いて在つた。

ミッシー孃はネフリュードフを案内して來は來たが、自分だけは居座らないで、『夫ぢやア貴郎、お母さまに飽きが來たら復た妾の方へ入來ッしやいよ、』と唯つた今がた客室で妙な衝突があつたのを忘れたやうに、何喰はぬ顏して嬉しさうに笑ひながら、地厚の絨氈を輕く音のしないやうに踏んで去つて了つた。

『御機嫌能う。さア何卒――如何でしたヱ？』とソーフャ夫人は助才なく莞爾と空笑ひをした。が、如何しても空笑ひとは見えないほど上手で、眞白に磨き上げた長い齒を見せつゝ、『裁判所からお歸りになつてから大層鬱いでらつしやるッてネ。人情のある人は那樣な場所には居堪まれませんワネ。』

『仰しやる通り、』とネフリュードフは萎れ返つて、『那樣云ふ場所へ出ると、人は誰でも自分の不完全――いや、人が人を裁判する權利がないやうな氣がしますナ。』

『*Comme c'est vrai*』（眞實ネ）と夫人は宛もネフリュードフの言葉に感動したやうに力を入れた佛蘭西語で云ッた。誰と談話をしても巧くお上手を云ふのが此夫人の性癖なのだ。『此頃は畫の方は――相變らず御勉强？　妾し、畫は大好きなんですから、恁んな厄介な病氣でなかつたなら疾くに參堂つてお伎倆を拜見するので

したに。』

『畫はカラ駄目です。既くに廢めッちまひました。』とネフリュードフは一向平氣なく答へた。不思議に夫人の空々しいお世辭が秘し隱しにしてる齡と同樣にまざ〳〵と解つたから、平日の更まつた廻りくどい婉曲な言葉が口から出て來ないのだ。

『惜しい事ネ。』と今度はコーロンフに向て、『レビンの咄だと、ネフリュードフさんは全く畫才があるッて事ッてすのに……』

『能く臆面もなく空々しい虚言が吐けたものだ。』とネフリュードフは心中に思ひつ苦々しい顔をした。

此容子が例になく不機嫌なのを早くも見て取つた夫人は、ツイ鳥渡の手際では面白笑止しい世間咄に誘引めさうもないので、コーロンフに水を向けて新狂言の批評を訊き初した。宛もコーロンフの說次第でてんやわんやの評判が定つて了ひ、一言一句が千古不磨の金言であるかのやうに訊くから、コーロンフは得意になつて狂言と作者の瑕瑾捜しをして藝術に對する己れの主張を滔々と陳べ立てた。夫人は其議論に感服してゐるらしかつたが、時偶は狂言作者の肩を持つ事もあつた。が、段々とコーロンフの說に全で降參したり或は少しづゝ自說を變へたりした。

ネフリュードフは二人の談話を見たり聞いたりしてゐたが、其實何を話してゐるのか耳にも目にも入らなかつた。唯だ代る〳〵に二人を見て氣が附いたは、二人ながら演劇なんぞは如何でも好いので、食消化しに咽喉の筋を釣つたり舌を動かしたり齒をカチ合はしたりして運動をしてゐるので、其上にコーロンフはヴォッカと葡萄酒とリキュールをチャンポンに呻つた御機嫌で、偶に飲む百姓のやうにへゞラないでも、可成に酒量の強い上戸なみには醉つて、千鳥足こそ踏まず、管こそ卷かないが、精神の居處は確かに變つて無暗と大御機嫌で得意になつてゐた。

此間夫人は横合の窓から射込む日が、寄る歳なみの爭はれぬ顔を容赦なく照らさうと段々奥へ射込むのに氣を取られ、『全くねエ。』とコーロンフを合はしながら度々顧眄いて見たが、軈て直ぐ牀の傍の電鈴の鈕

其時醫博士は座を起つて、家族同様の心易立てに會釋もしないでプイと出て行つた。夫人は其後を目送りつゝコーロソフと談話を續けてゐた。處へ丁度美男の用人が電鈴に應じて來たので、『フヰリップや、帷帳を引いてお呉れ、』と命令けて置いてから又、

『貴下が何と云はうと彼の人の作には神秘的な處があります。詩に神秘的の分子が無かつたなら詩と云ふものでなくなつて了ひます、』とソーフヰヤ夫人は片眼を光らせて帷帳を引いてる用人を睨まへつゝ、『詩想を缺いてる神秘なら迷信で、神秘の籠らない詩なら散文です、』と寂しげに笑ひながら片時も目を離さずに用人と帷帳とを看守りつゝ、『フヰリップや、其窓ちやアない、大窓の帷帳だよ、』と面倒臭さうに云つた。で、這般な事まで世話を燒かねばならぬかと、自分の苦勞性を嘆息する容子であつたが、又思返して氣を紛らさうとしつ、指環の寶石で燦爛〳〵する指で芳い香のするバチトスを挾んで唇へ持つて行つた。

胸腷の廣い骨節の逞しい美男のフヰリップは訝まるやうに低く腰を屈め、太い膕の壯健さうな足で輕く絨氈を踏みながら、何にも言はずに唯々諾々と夫人の指揮した窓へ行き、夫人の顏を見ながら少とでも光線の射さぬやうにと氣を附け氣を附け帷帳を引いた。が、尙だ夫人の思ふ通りにならんので、復たもや夫人は焦り〳〵して神秘のお話を中斷しつ、飽くまで氣の利かないフヰリップを肝癪聲で叱り飛ばした。フヰリップの眼からは電光がピカ〳〵と光つた。

『畜生、如何すれば宜いンだ、』とは多分此時のフヰリップが腹の中で云つた文句だらうと、此一埒を見物してゐたネフリュードフは思つた。が、體力逞しい美男のフヰリップは勘忍袋の切れかゝつたのを漸つと辛抱して病人の氣難かしやの放縱一杯の厄介者の夫人の云ふなり次第に溫和しく勤めてゐた。

『勿論ダーウヰン說にも十分眞理は有りますがナ、』とコーロソフは低い肱掛椅子にガツクリ凭れて背ろへ搖りながら、眠さうな眼で夫人を見つゝ『だが、ダーウヰンは論點外に行き過ぎて了ひました。』

『貴下は如何思ひます？　矢張遺傳說をお信じですか、』と夫人はネフリュードフに鋒を向けた。ネフリュードフの默つてるのが何分氣に掛つてゐたので。

『遺傳說？　拙者は信じませんナ、』とネフリュードフは答へた。が、實は何を答

へたか解らんので、此時のネフリユードフは不思議と云はう乎、奇怪といはう乎、一場の奇妙な想像畫を眼前に髣髴して茫然としてゐた。

云つて見やうなら、美術家のモデルかと想像さるゝ筋骨逞ましい美男のフォリツプの傍に、瓜のやうな腹や杵のやうに瘦せこけた腕を露出しにしてる禿頭のコーロソフの裸體姿が歷然と眼に映つた。直ぐ又傍なるソーフォヤ夫人の一絲を掛けない裸體姿も絹や天鵞絨の下から透徹つてまざ〳〵と見えたので、自分ながら想像の餘り恐ろしさに慄然として眼を閉いで頭腦から此幻象を追退けやうとした。

ソーフォヤ夫人は此尋常ならぬ容子を昵ッと見てゐたが、軈て、

『ミッシーが貴下を待つてますよ、』と云つた。『行ておやんなさい。グリーグの新曲を貴下に聽かせたがつてるんですから。隨分面白いもんですよ。』

『ミッシーが彈きたがつてるものか。何かに付けては虛言を吐きたがる女だ、』と心中笑止しく思ひながらもネフリユードフは座を起ちつ、指環を穿めた骨と皮ばかりの夫人の手を握つた。

客間まで來るとカテリーナ女史が待受けてゐて、例の通りの氣障な佛蘭西語で、『陪審員てお役も中々ですワネ。』

『失禮ですが、』とネフリユードフは膠もなく、『少と氣分が懊惱してゐますから、貴孃方のお對手をして却て御不興になつては濟みませんゆゑ……』

『呀、如何して?』

『何卒、何にも仰しやらんで下さい。』と面倒臭さうに云ひつゝ四邊を見廻して帽子を搜した。

『爾う〳〵、貴郞は何時でしたつけ、何でも秘し立をしては不可んと仰しやつたが、お忘れなすつたの? 隨分猛惡いお話まで平氣でなすつたくせに、今日に限つて何故秘してらつしやるの?』と云ふ處へ丁度ミッシー孃が來たので、『ねエ、ミッシーさん、爾うぢやアなくて?』

『あれは勝負事をやつてた時――』とネフリユードフは嚴格べらしく、『勝負事なんぞの時なら何でも饒舌れますがナ――全く今日は氣分が惡い。平たく云ふと口を利くのが嫌なんです。』

『勝負事にしろ何にしろ、御自分で秘し立をしては不可ないと仰しやりながら言直すのは卑怯だワ。如何して其樣なに氣がくさ〳〵してらつしやるのか、眞直ぐに白狀してお了ひなさいよ。』とネフリュードフが大眞面目なのを知らず顏にカテリーナ女史は言退けた。

『自分から氣が鬱してるなんて、其樣な卑怯な事はないワ。』とミッシー孃は云つた、『妾なんぞは其樣な事は云はない。何時だッて此通り元氣よ。何しろ此方へ入來つしやいッてば。貴郞の懊惱を追拂つて上げますからネ。』

ネフリュードフは丁度馬が可愛がられて、口に轡を穿められ、馬具を附けられるやうな氣がしたが、今日ばかりは平生になくミッシー孃の甘言に中々乘らないで、是非とも家へ歸らなければならぬと云つて暇乞をした。ミッシー孃は平常よりも長い間男の手を握りつ、

『それぢやア仕方が無いワネ。ですけれども貴郞の身に降り掛つた一大事なら妾達にも矢張一大事なのをお忘れ遊ばしちやア嫌よ——ネ、宜ウムいますか——夫ぢやア明日は入來しッて？』

『さア——如何ですかナ、』とネフリュードフは云つた。で、自分の良心に對してか、夫ともミッシー孃に對してか、何方とも解らぬが、眞朱になつて急ぎ足で歸つた。

其後で二女は顏見合せしたが、軈てカテリーナ女史は、

『如何したのでせう——ドミートリさんは？ 餘程變ぢやアなくて？ "Comme cela m'intrigue."（妾くし氣に掛りますワ）是非探つて見なけりやならないワ。"affair d'amour proper"（艶事）かも知れないワ。"il est très susceptible"（あの人は物に感じ易いから）だもの、ネエ——ミッシーさん。』

"Plutot une affaire d'amour sale"（汚ない ラヴの方よ）』とミッシー孃は口まで出掛つたが、偶つと思直しつ口を噤むと同時に、今までの晴れ〴〵した顏色が何處へやら、俄に淋しい氣の拔けた顏をして下を向いて了つた。が、去氣なき體で、『誰だつて機嫌の好い時もあれば惡い時もあるワ、』とばかり云つた。が、其實、內心では、『矢張妾を欺してたのか知ら？』と氣が揉めて堪らず腹の中で、『散三種々な所爲をして氣を持たしときながら、若し爾うなら隨分性惡だワ。』

と思つた。が、『散三種々な所爲』とは何の事だと訊かれたなら、恐らく取留めた返事は出來まいが、併しネフリュードフが女の心を動したどころでなく、殆んど約束したと同樣なは確かで、言葉でこそ約束を交換さないでも口よりも物を云ふ眼や微笑や思はせ振で互ひの心を許し合ひ、ミッシー孃の方では旣くに自分のものと定め込んでゐたから、今更手を切らうても滅多に切るわけには行かんのだ。

第二十八回

『破廉恥で醜極まつてる、卑屈である、恥晒しである。』とネフリュードフは我が家を指して歩き慣れてる町を歸る道〱腹の中で思ひつ、ミッシー孃と口を交いてる最中のクサ〱した不愉快が容易に忘れられなかつた。尤も之まで竟に一度たりとも落花流水の情を仄かしもしなければ、勿論公然と申込をしたわけでも無いから、表面だけで見たなら何の疚しい事もなく、すこしも道を外れてゐないのであるが、實際白狀すれば、心中暗に許してゐたには違ひなく、口外しないまでも腹の中で約束してゐた事を忘れやしない。が、今日では最早徹頭徹尾到底結婚出來ないやうな氣がした。

『破廉恥である、卑屈である、醜極まつてる、恥晒しである、』と復た心中に繰返した。唯單りミッシー孃との關係ばかりでなく、己れの從來の行狀が何れも是も自分ながら愛想が盡きて了つたので、『一から十までが破廉耻極まつてる、卑屈極まつてる。』と我が家の玄關に差掛つた時呟いた。

で、茶と晩餐の仕度の出來てる食堂へ來た時、『晩飯は食はんよ。』と蹤から隨

いて來た給仕人のコルネーに向つて、『彼方へ行きなさい。』

『唯！』と答へたが、コルネーは直ぐ行かないで食卓の上を片付けてゐた。ネフリユードフはイマ〳〵しげに見てゐたが、少とも早く一人法師になりたくて焦慮しつ、何から何までが自分の感情を刺激しやうと挑發つてるかのやうに思はれた。

漸つとコルネーが晩餐の仕度を下げて行つて了つたので、サモワールの傍で悠然一人で茶を煎れやうとした時、忽ちアグラフヱーナの跫音が聞えたから、周章てゝ顏を見られまいと客間へ逃込んで、ハタと戸を閉めて了つた。

三月前に母が臨終を遂げたのは卽ち此座敷である。亡き父母の肖像を二個の反射鏡付のランプが照らしてるのを見ると母の終焉の時がツイ昨日今日のやうに憶出された。之がまた實に卑劣な恥かしい咄だといふは、其時自分は少しも早く母が死んで吳れゝば好いとばかり思ひ、見す〳〵助からぬ病氣に何時までも苦しめるよりはと、口前だけでは唯母の爲を思つて臨終を急ぐやうに云つてゐたが、其實、母の安樂を願ふよりは此方が母の苦しむのを見るのが忌で堪ら

なかつたからである。

で、母の懷かしい美くしい記憶を追懷しやうとして、五千圓の謝義で高名の美術家に描かした肖像畫の傍へ行つた。襟開の廣い黑天鵞絨のガウンを着た姿で、畫工が十分に技倆を揮つて、首筋から兩肩、胸の美しい處を思ふさま仇ツぽく描いた。怪しからぬ話であるが、夫よりも更に一層怪しからぬのは、半裸體の美人としての母の肖像には甚だ恥づべき且忌むべき不潔の聯想が伴つてゐるのみならず、三月前に此同じ座敷に此同じ婦人が病みほうけて、木伊乃の樣に骨にと皮ばかりに痩せさらばひて、座敷中は啻か全家に鼻持ならぬ惡臭を瀰漫したのを憶出すと、忽ち何處からか此臭氣が臭つてくるやうな心持がした、で又、臨終の前五六日、骨と皮ばかりの青白い枯びた手で自分の手を握つて自分の眼を眤つと見入つて、『ミーチヤや、妾が爲べき事を爲なかつたのを叱つておくれでない。』と云ひつゝ、艶の拔けた瞳からハラ〳〵と涙を覆した時の事を憶出した。

『あア不快だ！』と口裡に呟きつ、再び美くしい玉を削つたやうな肩と腕とを

露出しつゝ唇邊に慢りがな微笑を浮べた肖像畫を見上げた。

丁度五六日前である。此畫と同じ姿をした若い婦人を見たのを偶つと憶出した。誰でも無い、夫はミッシー孃で、丁度舞踏會へ出掛やうとする處へ行合はすと、舞踏服の仇な姿を見せやうために例の手管で態々化粧部屋に請じた。今、憶出すと、其の玉のやうな肩や腕が堪らなく淫らしくて蟲唾が走つて來る。

『彼の無作法な、人外な、昔しは如何な所爲をしたか解らない殘忍無慈悲な狸爺と、妙な噂のある箸にも棒にも掛らぬ慶庵婆と！揃ひも揃つて氣色に障る胸糞が惡い奴等ばかりだ。破廉恥である、卑屈である、恥晒しである！』

『いや、斯うしてはをられんワ、』と心頭忽ち決然として、『少とも早く不羈自由の身とならねばならぬ。コルチャーギンの一家や、貴族長の女房のマーリヤや、家の財産相續の一件や、如此な汚い關係からは一切離れて、綺麗さつぱりと腐れ緣を切つて了つて、夫から新鮮らしい自由の空氣を吸ひに外國へ―いや、羅馬へ行つて畫の修業をするが一、』と獨語ちてる中に偶つと自分の畫才の甚だ覺束ないのを憶出した。『……畫なんぞは如何でも關はぬ。自由の空氣を呼吸す

れば可なりだ。先づコンスタンチノーブルへ行つて―夫から羅馬だ。が、夫には左も右く此裁判一件を片付けて了はんとナ―何しろ辯護士に相談して見る必要がある。』

と左さま右うさま思案する中、忽ち隻眼が少し斜視である黑い獄衣の女囚の姿が顯然と眼前に彷髴んで來て、判事の前に最後の陳述をしつゝ、シク〳〵泣いた聲が尚だ耳の底に殘つてるやうな氣がした。堪らなくなつて急いで燻半しの紙莨を灰皿に投捨て、更に最う一本を吸付けて部屋の中を歩き出した。

其昔し此婦人と一つ屋根の下に起臥した時分の記憶が順繰に浮んで來た。最後の出會の時の燃ゆるやうな獸慾や、其獸慾を滿足さしてからの慚愧後悔を盡く憶出した。拂曉のお祭の青い帶付の白ひ衣服を今でも判然と覺えてゐた。『彼の晩は眞摯に戀してゐたのだ。天にも地にも恥ぢない清淨潔白の戀を持つてゐたのだ。イヤ、夫より最つと久しい前、論文を書き旁々暑中休みに初めて伯母の家へ逗留した時から愛してゐたのだ。』と徐に既往を憶起すとツイ昨日今

日の出來事のやうに思はれ、青春の活き〳〵した新らしい空氣が身の廻りに吹いて來ると、思はず悄然と戰慄つた。

昔の我と今の我と比較すると何たる差別であらう。縱令や彼の晩の教會のカチューシャと、西伯利亞商人を手玉に取つて今朝裁判に引出された賣女のリューブカとの差より甚だしくないまでも先づ似たやうなもんだ。彼の頃は不羈自由で何の疚しい事もなく、前途に洋々たる希望を抱いて、行く處として可ならざるは無く何事か成らざるは無いやうに思つてゐたが、今は無價らぬ愚劣けた薄ッぺらな空ッぽの希望も意味も何にも無い浮世の目に見えぬ網の目に束縛されて、逃げやうとしても逃げられもせず、頭から又逃げやうとする氣さへなく、萎縮けて了つたのだ。あの頃は直情徑行を誇つて、眞理を口にするを日課とし、且又實際に眞理を行つてゐたのだが、今では虛僞の深み——虛僞が却て眞實と認められてる極度の虛僞の中に陷つて、此深みから逃げる道が中々に發見らないので、段々と深みの中に落ちれば落ちる程最終には馴れッ子になつて、到頭虛僞を虛僞とも思はないほど平氣になつて了つたのだ。

如何したら貴族長の妻のマーリヤと手を切つて其良人や子供等に憚りなく顏を合はす事が出來るだらう？　如何したら虛言を吐かずに公爵の娘のミッシーと緣を切る事が出來るだらう？　如何したら土地私有を不正と認むる我が確信と杆格する亡母の遺產相續の處置を着けられるだらう？　如何したら又カチューシャに對する罪を償へるだらう？　何は扨置き此罪だけは片時も等閑にしては置かれぬ。苟めにも眞情から戀した女が這般な境界に墮落したのを他處に見て捨てゝは置けぬ。罪なくして宣告された不當の判決から救ふべく辯護士に金子を費つたゞけでは決して濟まぬ。金子で罪が償へるもんなら、カチューシャを辱しめた當時既に相應の手當をしたぢやアないか。あの時は金子さへ握らせたなら一切の罪が消えて了うやうに思つてゐたぢやアないか。

と過ぎし昔を呼起すと、廊下でカチューシャを引留めて無理遣に前垂の衣兜に金子を捩込んだ事を顯然と憶出した。

『オヽ、其金子の事！』と其當時と同じ不快な感情がした。『嗚呼堪らぬ、堪らぬ、何たる汚ない根性だらう！』と唯ッた今、恁んな不埒をして來たやうに聲

張上げつ、『匹夫下郎が得て恁んな所爲をする。苟くも拙者が――イヤ、其の拙者が匹夫である、下郎である。』と更に聲高に、『だが、斯くいふ拙者が眞に匹夫下郎……』と直立つたまゝ暫時口を緘んで沈吟して後、『匹夫下郎でなくて何んだ？ 匹夫下郎も同前ぢや。』と再び自問自答した。『マーリヤ（ネフリュードフが私通してる貴族長の妻）や其良人に對する我が行爲の破廉恥極まつたるを見よ。又亡母の遺産に對する我が態度の卑怯未練なる、富の集中を不正と認めながら親から讓られたからつてヌク〳〵と己が所有として勝手氣儘に費ひ捨てるとは何事ぞや。第一又、日毎々々の生活の放蕩無頼なる、誠に沙汰の限、言語道斷である。殊に最も怪しからぬはカチューシャに對する大罪――匹夫下郎の爲べき破廉恥罪！ 人は之を見て何と云ふ。縱令人は何と云はうとも云ふまゝに任せて置けやうが、人の批評は左まれ右くまれ、己れは平氣で安んじてゐられうか。縱令人を欺く事は出來やうとも、我れ自らを欺く事は決して出來ぬ。』

と繰返し繰返し慚愧悔恨する間に、偶つと憶當つたは今日此頃、殊に今といふ今もコルチャーギン公爵、公爵夫人、ミッシー令孃初めコーロソフ其他の面々が

誰彼の差別なく癪に觸つて蟲唾の走るやうな氣持がしたのは、飜つて思ふと、實は人よりは先づ我身で我身に愛想が盡きたからで、不思議な事には、今更のやうに我が心の卑劣しさに氣が付くと、我ながら情なく思はないではないが又幾分か罪が輕くなつたやうな氣がして何となく心が沈着いて來た。

是迄もネフリュードフは度々靈魂の淨めをした。此「靈魂の淨め」といふは散三ツ原放蕩をした曉不斗した拍子に眼が覺めると、俄に眞人間になつて廓つた腸を洗ふ事で、斯ういふ時は何時でも必ず自ら規箴を作つて永へにこの則に從ふ覺悟をし、二度と再び決して變るまじき覺悟で發心の日記を附け初めては自ら「新らしい頁を開く」と稱してゐたが、併し斯ういふ殊勝な覺悟も三日坊主で、何時の間にか再た世の中の誘惑の捕虜となつて了つて、前よりは更に一層深みに墮落するのが大抵終局である。

恁んな風に淨めをしては墮落から浮び上り、浮び上つては復た更に墮落した。初めての淨めは暑中休みに伯母の家に逗留してゐた時で、此時は一番感奮して一番永續きがした。最う一度は戰爭に招集せられ、書を擲つて劒を把り、國家

に身を殉ずべく軍隊に入營した時であるが、其時は此潔氣な決心を鈍らすものがあつて忽ち墮落して了つた。三度目は軍隊を去つて美術のために身を獻じやうと外國へ行つた時であつた。

其時から今日までは暫らく淨めをしないから心の底の道根が全で弛んで了ひ、今では良心の要求と實際の生活とは非常に扞格してゐて、此距離の著るしく距たつてるのに氣が付くと今更のやうに惻然として恐れた。愆うなつては最早淨めをしても迚も淨められさうも無い位に悉く腐敗し切つてゐた。

『汝は從來も度々悔悛めて眞人間にならうとしては矢張ズル〳〵に元の木阿彌となつて了つたぢやないか。』と心の底で誘惑者が囁嚅いた。『復たしても一つ事を繰返して如何する。汝一人ぢやない、誰でも悔悛めては惡い事をする、惡い事をしては悔悛める、之が卽ち人生と云ふものだ。』

と何處からともなく這般な囁嚅が聞えたが、此時は既に健全な威力ある永恆不磨の自由精神が心内に醒覺してゐたから、中中誘惑に乘せられないで、縱令ば我が現在の生活と將來期する處と如何程離れてゐやうとも、新たに奮起した精神の前には何事か成らざるべき。

『如何なる代價を拂つても是迄の腐れ緣を盡く斷つて了はう。誰にも彼にも眞理を打明けて眞理を以て世に處して行かう。』と決然として聲高く、『ミッシーに盡く打明けやう。自分のやうな放埒者は迚も眞摯に婚禮する資格は無いと、今迄無益に飜弄してゐた罪を屑よく謝して了はう。マーリヤにも……いや、マーリヤには話さんでも、マーリヤの良人に自分の破廉恥を懺悔し、今まで眼を瞞くでゐたのを詫つて了はう。母から讓られた財産は斷然放棄して了トう。カチューシヤにも會つて、自分が破廉恥の爲めカチューシヤの一生を誤らした罪を懺悔し、切めては我が力の能ふ限りは骨が舍利になつてもカチューシヤの運命を輕くしてやらう。先づ左も右くも會つて我が罪を宥して吳れと賴むのだ……』

『爾うだ、小兒のやうに平たく叩頭して詫まつて見やう。』と言葉を途切らしつ、『……若し何ならカチューシヤと婚禮しても可い。』と再た言葉を切つて、小兒の時から仕慣れたやうに胸に手を合せつ天井を仰いで、『神よ、願くは私を助け私を敎へ給へ、私の心の中に來りて其の穢れを淨め給はん事を。』

と只管に己れの心に神の宿りて心の穢を淨め玉はん事を祈禱した。が、此時は神既に心内に座して良心の眠を攪ましたから、神と共に住する心地がして人生の自由や滿足や歡喜ばかりでなく有らゆる正義の力を感得し、人の力の爲し能ふ最善最美のものは何に由らず成し得られざるのは無いやうに思つた。

此の自問自答の中に涙が兩眼に溢れて來たが、此涙にも善惡二つの意味があつた。數年間昏睡してゐた精神の醒覺を喜ぶのが善の涙で、之といふも己れが天性の善に由るのだと己れに阿るのが惡の涙である。

すると急に時候が蒸〱して來たので、庭を見晴す窓の戶を開けた、物靜かな清い照渡つた月夜で、車の轢る音が行過ぎて了うと後は寂とした。見上げるやうな白楊柳が丁度窓前に奇麗に敷いた小砂利の上に葉を振つた枝の細かに錯綜んだ網の目のやうな影を印し、其左方には馬車小屋の屋根が月を浴びて眞白に輝き、正面には植込の枝越しに土塀の黑い影が見えてゐた。ネフリユードフは四邊の景色を眺めながら新らしい清い空氣を吸つてゐたが、

『爽快、爽快、オヽ神よ、』と靈魂の自づと澄渡るやうな感情がして淸〱とした。

第二十九回

マースロワが監獄の穴に戾つたのは夕方の六時で、常から步きつけない上に、暫らく寢足になつてゐたから、往復十哩もある小石のゴロ〱した道を步いては堪らない、草臥れ切つて底肉刺さへ出來た。加之に、意外な重い刑に宣告されて疲勞して氣拔けがした處で急に腹が空いて來た。

尤も法廷へ引出される前に護衞の兵士が目の前で美味さうに麵包と茹卵を食べてるのを見て、唾を催して空腹を感じたが、彼等に物を請求るは不見識至極だと考へて昵と辛抱して了つた。夫から三時間といふものは空腹を忘れ、唯段段と勞れて來たやうな氣持がしたばかりだが、處へ飛んでもない重刑を宣告されたのである。初めは一圖に聞損じたと思ひ、自分が西伯利亞へ流される罪人だとは到底想像出來ないから、飽くまでも自分の耳を信じなかつた。が、裁判官や陪審員が宛も當然の知れ切つた事のやうに宣告文の朗讀を聞いてる平氣な沈着顏を見ると、俄に赫と取逆上せて聲を振搾りつゝ自分の寃罪を滿廷に訴へた。が、自分の叫き立てるのさへ矢張當然で知れ切つてるやうに見做されて、

幾ら叫いたつて騒いだつて仕方がない事が解つて、如何でも此殘酷極まつた不當の宣告に服罪せねばならぬかと思ふと、急に情なくなつて今度は失望の餘りにわッと聲を出して泣いた。

取別けてマースロワの奇怪に思つたは老人でなくて若い連中である。渠等は何れも目を細くしてマースロワの美貌に見惚れ、中にも一人の副檢事は格別に妙な素振をしてゐたくせに、愈々といふと寄つて集つて飛んでも無い無法な宣告をして了つた。開廷前や數度の休憩時間中、此若い連中は用あり氣な顔をしては態〱廊下を通つて被告人控所の開放しの入口を覗いて見たり、ヅウヅウしい奴は臆面もなく入つて來て失敬千萬にも正面からシゲ〱と顔を見たりなんぞして、一體なら肩を持つて呉れべき筈なのが、案に相違して辻褄も合はぬ出任せの理窟を揑ねて、本と〱寃枉なのが解り切ッてながら、西伯利亞へ徒刑に決定したのである。初めは泣きもしたが、段々と沈着いて來ると、今度は全で氣抜けがして了つて、茫然と手を束ねて監獄に還されるのを待つてゐた。今は何の念もなく唯煙草が喫みたい一方であつた。

處へボーチコワとカル

ニチンキンとが矢張宣告が濟んでから同じ此控所に來て、マースロワの顔を見るや否、ボーチコワは口汚く罵つて「咎人」呼ばはりした。

『如何しやがつた、ヤイ？　汝ばかりが好い子にならうたつて、ヘッヘッヘッ、爾う巧くは問屋で卸さねエや。イケヅウヅウしい踏張のくせに踏切の惡い阿魔だ。めそ〱と吠面かゝねエで、汝が身から出た銹だと往生しやがれ。西伯利亞へ行つたら最うべたくさとお化粧しやうッたッて出來ねエせ、ヤイ！』

マースロワは廣い袖口に手を引込めつ、首を垂れて汚い板の間を見ながら、凝然と身動きもしないでゐたが、唯つた一と言、

『妾に關つてお呉れでない。妾もお前さんには何にも云はないから……』

『えッ、何だと……汝に關つて如何する？　人う、チャンチャラ可笑しい！』

と罵り叫く時、押丁が此二人を引立てゝ行つて了つた。マースロワは吻と息を吐いて氣が爽然とした處へ廷丁が來て、

『お前かい、マースロワてのは？　何處かの貴夫人がお前に與つて呉れと。』と云ひつゝ三圓の金を渡した。

『貴夫人て如何な方？』

『受取れば宜いンだ。其樣な話をする暇は無い。』と愛想氣なく言捨てゝ行つて了つた。

此金子を呉れたのは誰でもない、妓樓の女將のキターエヴで、法廷から歸りしなに、マースロワに少とばかりの手當をしても宜いかと廷吏に訊いてから、三ツ釦鈕の小羊革の手袋を脱つて、膩切つた白い手で裾裏の衣兜から掴み出した美しい巾着の中から債券の利券の束を出し、二圓半に當る一枚を拔き取つて（露國では公債其他の利券が紙幣と同じく通用する）二十錢貨を二枚と十錢貨を一枚附けて廷吏に賴んだ。すると廷吏は直ぐ廷丁を呼んで其目の前で金子を手渡しするのを見て、

『間違ひのないやうにネ、何卒與つて頂戴、』とキターエヴは云つた。

其の言ひ方が如何にも胡亂に思ふらしかつたので、廷丁は癪に觸つて堪らなかつた其の餘憤がマースロワに當散らしたのだ。

が、マースロワは意外の金子が手に入つて、丁度欲しく堪らないものが直ぐ買へる嬉しさに、呉れ人が誰だか解らないのも頓着なく、『煙草を買つて貰つて

一服吸つたなら――』とばかり心中に思つた。今では何も彼も忘れて唯煙草を喫みたい一方に凝つて、其の渴えさ加減たら非常なもんで、廊下へ開く入口から風がもてくる煙草の香がする時は、其香ひのする空氣を吸ふのを切めてもの心床しとしてゐた。が、何時までも此控所に取殘されて歸れないのに、ホトホト怠屈して了つたは、退出命令を傳達する役目の書記どのが罪人なんぞは其方除けで、檢閲官が禁止した新聞社説の一條を一人の辯護士と論じて夢中になつてゐたからで。

漸つと五時になつてから許されて、ニージニ人とチュワーシ人との二人の護衞兵に護送されつゝ裁判所を出た。で、尙だ門を出切らない中にマースロワは二十錢貨を出して卷麵麭を二つに煙草を買つて呉れと賴むと、チュワーシ人は笑ひながら金子を受取つて、『宜しい、買つてやらう。』と直ぐ買つて來て、正直に釣錢を返した。が、囚徒は途中で喫煙するを禁じられてるので、途〳〵待遠しくて焦り〳〵しながら監獄へと歸つた。

軈て監獄の門まで來ると、汽車送りの囚徒が百人ほどもゾロ〳〵と今着いた

ばかりで、鬚の毿々した奴、綺麗に剃つた奴、年を老つた奴、若い奴、露西亞人は無論だが外國人も交つてる。中には頭を剃丸めた奴もある。何れも足に重さうな鎖を附けたのを引摺りながらガン〳〵と叫き立つて、息切の臭氣と塵埃とで控所を充たしてゐた。で、マースロワの傍を通ると誰も彼も顧眄いて、中には故意と摺合つて身體に觸つて行くのもあつた。

『ヨウ、別嬪――ぴるウるゝゝ、……』と一人は卷舌を鳴らした。

『今日は――姉さん!』と一人は片眼をパチクリさした。

顔から頷まで綺麗に剃つて口鬚だけを殘してる色黒の男は、足の鎖を重さうにガラ〳〵、引摺りながら後ろから飛んで來て矢庭にマースロワに抱付いた、

『昔しの親昵を忘れちや不可ねエ。美ついお顔を拜まして呉ンな、』と齒を露出して眼を光らしたから、マースロワは喫驚して振離した。

『調戯けるない、此野郎、』と副看守が後ろから飛んで來たので、色黒の囚徒は縮上つて逃げて了つた。

『お前は元來――』と副看守はマースロワに向つて、『何しに此處へ來た?』

マースロワは今、裁判所から歸つて來た處だと云はうとしたが、草臥れ切つて口を利く氣力さへなかつた。護送兵の一人は帽子の廂へ手を擧げて會釋しつゝ、マースロワに代つて、

『裁判所から歸つて來た處です、』と云つた。

『それぢやア早く押丁に渡しなさい。我輩は其樣な事をしてをられん。』

『はア。』

『ソコローフ、』と副看守は聲高に押丁を呼んで、『此女を連れて行け。』

其聲に應じて忽ち現はれた押丁は荒々しげにマースロワの肩を突き、後から隨いて來いと頤で指圖しつゝ女囚の檻房の廊下へ伴れて行き、一應身體を檢査めて禁制品を持つてないのを見屆けてから今朝引出した同じ穴へと投込んだ。

マースロワは煙草の箱を麪包の中へ秘して首尾よく押丁の目を眩まし終せたのだ。

第三十回

マースロワの檻房は間口十六呎、奥行二十一呎の細長い室で、窓が二つに破れ掛つた大暖爐が有つた。蠶棚然たる板張の寢床が室の三分の二を占めて、板張は何れも乾燥切つて反返つてゐた。突當りの正面の壁には眞黑に燻ぶつた燭附きの聖像が掛つて、何年經つたか解らぬ大時代の古い房が垂れてゐた。扉口の左方の薄暗い隅には臭い桶が置いてあつた。夕方檢閱を濟ましてからは夜は閉鎖切である。

同室の女囚は十五人で、其中の三人は小兒である。マースロワが歸つた時は猶だ明るかつたので、二人だけしか眠てゐなかつた。一人は旅行券が無いので拘留された白痴で（露國では露人なりとも旅行券なきものは浮浪罪に問はれる）、大抵眠てばかり暮した。一人は竊盜犯の肺病患者で、上衣の疊んだのを枕に横臥になつてゐたが、尙だ眠付かれないで、大きな目をパチクリさせつ、咽喉元にゴロゴロする痰を制へて咳をすまいとしてゐた。

此他の女は、大抵は粗末な茶染の木綿の下襦袢ぎりて、窓から顏を出して新人の男囚徒がゾロゾロ來るのを見物してゐた。眞摯に裁縫をしてゐるのは三人だけで、此內の一人が今朝マースロワが呼出された時に知慧を付けた老婆である。コラブリョーワ[1]と云つて、脊の高い、强さうな、氣難かしさうな、年中顏を顰めてる、ダブダブした二重顋の婆さんで、房々した短かい毛が顳顬邊りで胡麻鹽になつて、後毛が煩さうに頰に亂れてゐた。此婆は亭主が自分の連子に手を出したのを怒つて斧で殺した罪で西伯利亞へ徒刑に宣告されてるのだ。此檻房の牢頭で、內々で女囚達に酒を賣つてゐた。眼鏡を掛けて、百姓丸出しの大きな手で針を持ち、三ッ指で精々と何か縫つてゐた。

其傍でザクザクした粗布の袋を縫つてる女は鐵道の線路番人の嬶で、汽車の通る時に役目の旗を掉るのを怠つた爲め不思議な變事を出來した罪で三ヶ月の禁錮に處せられたのだ。色の黑い、脊の低い、鼻の扁平げた、小さな黑い瞳の人の好ささうな女で、世話燒で多辯家であつた。

最一人の裁縫をしてゐる女はフョードーシャ[2]と云つて、ホンノリとした色艶の肌膚細かな、小兒のやうに愛くるしい眼付の、尙だ極若い頗る附きの美人で、

1 Korablyóv
2 Fedósya

房々した長い髮を綺麗に編んで後ろに圓く結んでゐた。罪名は亭主を殺さうと仕掛けた毒殺未遂で、十六の時不承知なのを無理押付けに嫁にやられた結果が婚禮すると間もなく此大事件を仕出來したのである。處が保釋中の八ケ月間に何時となく亭主と段々交が好くなつて、愈々裁判へ廻される時分には二人の間は漆膠も啻ならずであつた。加之ならず舅にも(別して)姑にも大變氣に入つて了つて、是非とも免訴にしたいと願下げを嘆願したが、到頭その効がなくて矢張西伯利亞へ徒刑に宣告されて了つた。柔和しくて、愛嬌があつて、何時でも莞爾〳〵してゐた。マースロワとは隣同士の寢床に起臥する縁で、別段親睦くして、萬事妹氣取でマースロワの世話をしたり用をしたりするのを役目にしてゐた。

此外に尙だ二人、何にも爲ずに床の上に座つてゐた。一人は四十恰好の青白い痩枯れた、若い時は嘸美しかつたらうと昔の色香が忍ばれる面貌の女で、痩細つた青白い胸に乳呑兒を抱いてゐた。此女の犯罪は、甥が徵兵に取られた時、村の百姓の考では不法な召集であつたので、巡査に抗拒して當の本人を逃がさ

うと大騷ぎをした事があつた。現在の伯母だから、猶更先へ立つて騷ぎ立ち、馬に乘せて伴れて行かれやうとする馬の口を取つて動かなかつたので到頭捕縛されたのだ。最一人は人の好ささうな、猫脊の胡麻鹽頭の老婆で、暖爐の後ろの寢床に坐つてゐたが、其前を四歲ばかりの男の兒が莞爾々々しながら驅けてるのを捉へやうとしてゐた。此男の兒は頭髮を短かく苅つた可愛らしい元氣者で、老婆の前を摺拔ける度びに、『ホラ、捕まへて御覽!』

此老婆は放火犯で捕縛されたのだが、入獄したのを却て喜こんでゐた。氣掛りなは一緒に捕縛つた倅の身の上で、夫よりも猶ほと心配してるのは娑婆へ殘した老夫で、嫁は既くに逃げて了つたし、誰が衣服の洗濯や始末をして吳れるだらうと、夫ばッかりが氣が揉めて堪らなかつた。

此七人の外に、窓の鐵格子へ立つて屋外を見てるのが四人あつた。マースロワが監獄の門で出會つた新入の囚徒が丁度今、窓外を通るので、叫いたり妙な手付をしたりして騷いでゐた。

此中の一人はデク〳〵肥つて、頭髮は赤ッちやけて、顏や手は青く黃ばみ、

釦鈕の脱れた襟から喰出してる太い頸は斑點だらけであつた。大きな皴枯聲で大口を叩きながらグラ〳〵笑つてゐたが、竊盗犯ださうだ。

此傍に間の抜けた面をした、色の黒い、脊の低い、十歳ばかりの小兒位しかない小さな女がゐた。胴長の足短かの、腫物の汚痕だらけの赤ら顔で、眼の間が遠く離れた、厚唇の出齒である。窓外で何かあつたと見えてキヤツ〳〵と轉がつて笑つてゐた。此女は放火竊盗犯に問はれてるのだが、お洒落が好きなので「お洒落さん」と綽名が付いてゐた。

其後ろに立つてるのは贓品隱匿罪で捕まつた痩ッぽちの憫然な妊み女で、鼠色に汚れ切つた下襦袢一貫に大きな腹を包んで、何にも饒舌らないが窓下の騒ぎを面白さうに可笑しがつて見てゐた。

其又傍の腫れぼッたい出目の氣樂さうな顔付のズングリした田舍女は暖爐の後の老婆と遊んでる四歳になる男の兒と七歳になる女の兒の母親で、酒の密賣をして捕縛つたのだが、世話の仕人がないので兒供を一緒に監獄に伴れて來てゐるのだ。窓から少と離れて佇立つたなりに沓足袋を編んでゐたが、他の仲間

の大口を聞いては不快で堪らないやうに首を振つて顔を顰めつ眼を塞いでゐたが、小さな下襦袢を着て髪毛をジヤンジヤラに亂してる七歳になる娘は青い眼を据ゑて赤い毛の女の裾に攫まつて、窓の内外の男女の囚人が互に負けずに罵り合ふ猥褻な言葉を耳を引立つて聞いては覺込まうと一生懸命に口裡で繰返してゐた。

恁んな騒ぎには一切眼も呉れないでる十二番目の女は教會の執事の娘で、脊のスラリとした立派な女だが、自分の産んだ私生兒を井戸に投込んだので捕まつたのだ。房々したブロンド色の髪を太く編んだのが解けて亂れて肩に振掛つたまゝ、薄汚ない下襦袢ぎりで裸足になつて、他のものには一向頓着なく、側目も觸らずに檻房内を壁に突當るまで往つたり來たりしてゐた。

第三十一回

ゝゝゝガチリと魚鑰の音がして、マースロワが入つて來るのを見ると一同は皆顧眄いた。今まで側目も觸らずに歩いてゐた教會の執事の娘でさへが佇立つて、寸いと眉を釣上げて顧眄いて見たが、何にも云はないで復た大股に力足を踏み出した。

コラブリョーワはザンゝゝグリした粗布に一と針刺して、容子を聞きたげな顏しつゝ眼鏡の中からマースロワを見て、

『おや先ア、歸つて來たネ。如何おしだい。必と免訴になるッて云つてたんだが、御免になつたンだらうネ?』と男のやうな太い皺枯れた鈍聲で云ひつゝ、眼鏡を脱つて縫物を傍へ押遣つた。

『伯母さんと散三噂をしてゐたのサ、』と線路番人の嬶はリンゝゝ〳〵した聲で、『お前さんの明りが立つて直ぐ放免されるのは知れ切つてる。判事さんや陪審員さんや辯護士さんや皆さんが寄つて集つて氣の毒がつて、事に由つたらお金を呉れる人があるかも知れねヱなんて、爾う云つてた處なのサ。………だけどもネヱ、

斯うして復た妾達の許へ歸つておいでちやア、餘まり話が面白く無ヱと見えるネ。眞個に氣が揉めるよ、妾達の推量が外れッちやッたかしら。えッ、如何なつたの? 神樣のお思召が妾達と違つてるなら仕樣が無ヱワナ――ネヱ、姉さん、斯うなつたら覺悟が肝腎だよ。』

『其麼な事はないワ。貴婦を罪に落すなんて――』とフョードーシャは柔しい氣性で心配げに、愛くるしい青い眼でマースロワを見つゝ、晴れ〴〵した美しい顏を泣き出したさうに曇らした。

マースロワは何とも答へないで、端から二番目の自分の床に入つて、コラブリョーワの傍に坐つた。

『何か喰べて來て?』とフョードーシャは起つてマースロワの傍へ來た。

マースロワは返事もしないで、卷麵麭を床の上に投出しつ、塵になつた上衣を脱ぎ、眞黑な縮れた髮を包んだ手巾を脱つた。四歲になる男の子と遊んでゐた老婆もやゝゝッて來て其前に立ち、『チョッ、チョッ、チョッ、』と舌打をしつゝ氣の毒がるやうに首を掉つた。男の子も一緒に其傍に立つて上唇を突出しつ、眼を一杯

に睜つてマースロワの持つて來た卷麵麭を見てゐた。

マースロワは今日一日に遭遇つた意外な不幸のあとで、此同情ある多勢の顔を見ると、いゝいゝ、ワナ〳〵と慄へて泣出したくなつたが、此時までは凝乎と堪へてゐた。が、老婆の親切な氣の毒がる舌打を聞き、小兒が罪も無い眼を睜つて卷麵麭とマースロワの顔とを交み代りに覗るのを見ると、最う辛抱が仕切れなくなつて、聲を慄はして欷歔上げた。

『だから言はねエ事ッちやア無エ。確固した辯護士を賴みなせエとあれほど執拗く云つたぢやねエか。』とコラブリョーワは云つた。『えッ、何だエ？西伯利亞かエ？』

マースロワは籠上げる悲しさに返事が出來なかつた。で、卷麵麭の中から襟開きの廣い舞踏服の美人の寫眞入の紙莨を出してコラブリョーワに渡すと、コラブリョーワは見たばかりで首を振つて、如此な無駄なものに金子を捨てるのを不感服な顔をしてゐた。が、一本取つてランプで火を點け、一服吸つてから强にマースロワの手に戻すと、倘だ泣止まなかつたが、嬉しさうに受取つて一服吸

つてから『西伯利亞なの、』と低言で云ひつ、パッと煙を吐出しつゝ復た泣歔欷した。

『眞個に罰中りの人非人ばッかりだよ。』とコラブリョーワは呟いた。『如此な罪も咎も無ヱ可愛い子を西伯利亞へやるなんて。』

突然窓に立つてる連中がキャッ〳〵聲を立てゝ留度なくゲタ〳〵と笑ひ、甲高な黄色い聲が皺枯れた苦なさうな鈍聲と混雜になつた。窓下の囚人が可笑しな所爲でもして笑はしたのであらう。

『御覽てば――あの坊主ッくりが那樣な所爲をしてやがる、』と赤い髮の女はデクク〳〵した身體を可笑しさうに搖りながら、格子に摑まつて聞くに堪えない卑猥い言葉を大聲で怒鳴つてゐた。

『ふンふッ、肥滿女が復たガン〳〵我鳴つてやがる。何が笑止しいんだ、』とコラブリョーワは口小言を云ひながらマースロワの方を向き、『何年だい？』

『四年、』とマースロワは云つた。丁度其時止度なく頰へ傳はる涙が一滴ポロリと落ちて手に持つ紙莨を濡らしたのを腹立たしげに捻曲げて捨てつ、又別に一

本を取つた。線路番人の嬶は紙莨嫌ひで喫まないが、マースロワの捨てたのを勿體なさゝうに拾つて眞直に直しながら無体に、ぺラ〳〵と、

『本統の誠の道といふものがあればだけれども、今日日はお前さん、誠の道なんてものは豚が喰べッちまつて、各自が好き勝手な所爲をしてるノサ。だから妾達も散三唽をしてたんだがネ、伯母さんは必と御免になるッてたけんど、妾は「否エ、伯母さんの豫言は外れる、那樣な奴に裁判されるんだもの、必と辛い目に遭ふのサ」て云つたノサ。それ御覽、生憎と妾の云つた事がお手の筋だらう。』と自分でも聲の好いのに聞惚れて得意に饒舌り立つてゐた。

新入囚徒の行列がお終ひとなつたので、鐵窓から見物してゐた女連もマースロワの周圍へ寄つて來た。一番駈に小さな女の兒を伴れて來たのは酒の密賣をした女で、

『如何して先ア、其樣な重荷を背負はせられたの?』とマースロワの傍にべッ、、、タリ座つて編物を初めた。

『如何してッて、お前さん、地獄の沙汰も金子次第だからネ、お金子が無エから馬鹿を見るんで、お金子があつて上等辯護士せエ頼みやア、好い加減な惡い事をしたつて、巧く辯口を奮つて無罪放免にして具れるサ。何アに、心配する事アねエノサ、』とコラブリョーワは云つた。『何とか云ッたッけナ、名前は忘れちやッたが、頭の毛の長エ鼻の高エ人——彼の人に頼みやア必と立證を立つて綺麗に巧く行つて具れらアナ。彼の人にせエ頼んだらナア!』

『あの人なら眞物だとも、』と「お洒落さん」はべッ、、、タリ座つて出齒を露出しつゝ、

『彼の人なら立派なもんだが、千兩から下では請合つて具れめエよ。』

『お前さんも惡い星に產れついたのサ、』と放火犯の猫脊の老婆は嘴を出した。『だが、俺の事でも考エて斷念るンだネ。擬賊野郎に嫁をチョ、、、ロマカされて、此老齡になつて忰と一緒に牢屋で虱を飼つてりやア世話ア無エやナ。』と百遍も繰返した愚痴のお復習をした。『所詮乞食になる乎、牢に入る乎、何方の道遁れつこは無エのサ。』

『落つれば同じ谷川の水ッてからネ。誰でも同じ事つたサ、』と酒の密賣をした女は小さな娘の頭を見てゐたが、急に編掛けを投り出して娘を膝へ載せつゝ、器

用な指頭で娘の頭髮の虱狩りを初めた。『何故お酒の密賣をしたつて？　苦勞人にも似合はねヱ事を仰しやいますよだ。密賣でもしなけりやア小兒を二人如何して喰はして行かれるヱ？』

此言葉を聞くとマースロワは俄に一杯飲みたくなつて、『伯母さん、ヴォツカを少ッとネヱ……』と涙を袖で拭きながら時偶咽喉に迫ぐり來る啜り聲を制へてゐた。

『あいよ、上げやうとも。』とコラブリョーワは合點いた。

第三十二回

マースロワは麵麭の中からキターエワに貰つた利劵を出してコラブリョーワに渡すと、無筆のコラブリョーワは利劵の文字が讀めないので物識の「お洒落さん」に見せて、二圓半に當ると聞いてからヴォツカの壜を秘して置く風拔きの穴へ登つた。此體を見て一同は外して了つたが、其間にマースロワは上衣や頭を包んだ手巾の塵を拂ひつ、床に入つて麵麭を食べ初めた。

『貴姉にお茶を取つて置いてよ、』フョードーシャは襤褸に纏んだ錫の急須と猪口とを棚から取つて卸した。『だけども冷めつちまつたかも知れなくてよ。』

成程、茶は全で冷えて、茶よりは急須の錫の味がしたが、渴き切つてるマースロワは一杯注いたのを息をも吐かずに麵麭と一緒に飲んで了つた。で、其傍に立つて羨ましさうな顏してる小兒を見ると、

『さア、上げやう。』と云ひつゝ麵麭を引割いて與つた。

處へコラブリョーワはヴォツカの小壜と猪口を持つて來てマースロワに渡すと、一と口お毒見をしてから「お洒落さん」にもフョードーシャにも薦めた。此三

人は若干か金を持つてるので牢仲間の「華族様」と諢名され、何時でも互ひに持つてるものを分配し合つてゐた。

二三分經つとマースロワは少と陽氣附き、徐々法廷の一伍一什を元氣に話し初し、副檢事の身振までして見せた。何よりも呆れ返つたのは裁判官初め陪審員連が申合はしたやうに目も離さずに自分の顏ばかり凝視めて、休憩中の囚人控所にまで煩さく附纏つて顏を見に來たと話した。

『護送兵でさへが爾う云つてゝよ、「彼の連中が控所に來るのは貴娘の顏を見に來るンだ」つて。中には「斯ういふ書類は何處にある?」なんて、何ァに、書類も何も有るもんぢやァない。口の先で何を云つたッて、眼は妾の顏ばつかり、、、チャンと見てるのだからネ、』と笑止しさうに首を掉りながら、『巧い事を仰しやるのサ。』

『爾うだッたらうとも、』と線路番人の嬶は例の音樂の音のやうな聲で、『砂糖に集る蠅見たやうに迚も追切れやしないやネ。』

『夫から歸途にも痛い目に會つたのよ。丁度監獄の門へ入らうとすると、ソラ、

汽車で着いた新入がドヤ〳〵入つて來たらう。妾を見るとワイ〳〵て騷ぎなんだから、如何しやうかと思つてネヱ。看守さんのお蔭で助かつたけれど、助倍ッたらしい嫌な奴に嚙り付かれた時はハッとして、眞個に如何しやうかと思つてよ。』

『如何な奴だヱ、嚙り付いたッてのは?』と「お酒落さん」は訊いた。

『色の黑い口髭の生えてる奴さ。』

『それぢやァ必と彼奴に違ひない。』

『彼奴て——誰?』

『シ*チェグローフて奴——今通つたからネ。』

『シチェグローフて、誰?』

『シチェグローフを知らないノ。西伯利亞から二度まで逃げた男サ。復た捕まつたんだらうけれど、必と復た逃げ出すよ。押丁達も彼奴には持餘してるンだとサ、』と常から男囚と通信して獄内の何も彼も合點んでる「お酒落さん」は譯知り顏に、『必と復た逃げるのは定り巾着サ。』

*Stcheglóf

『所詮逃げるなら此方達も一緒に伴れてツて貰れヱてヱもんだ、』とコラブリョーワは云ひつゝマースロワに向ひ、『だがお前さん、辯護士さんが控訴つて上げるツてな話があつたらうネ。控訴うなら今直ぐ出さないとネヱ。』

『爾う、其樣な話は無くてよ。』

其時赤毛のデク〳〵した女は斑點だらけの兩手で濃い頭髮をポリ〳〵と搔きながら、「華族樣」が三人でヴォッカの酒盛をしてゐる傍に來て、

『其話なら妾が敎えて上げやう、』と口を切つた。『取敢へず先づ宣告が不服だつて書面を出して置いてから副檢事に申告するンだよ。』

『オイ、何しに遣つて來たヱ?』とコラブリョーワは唐突りに劍呑を喰れた。『ヴォッカの臭ひがするのにお氣が付かれねヱかい。血の循環の惡い女だ。用もねヱのにお饒舌りに來やがつて、汝達が餘計な世話を燒かねヱだつて、此方は善ッく御存じだよ。』

『汝に口を利いてるんぢやねヱよ。餘計な嘴を容しなさんな。』

『何を言つてやがる。ヴォッカが欲しくて來やがつたくせに。ワイ〳〵鳴り叫きやアがツて。』

『其樣な事を云はないで、伯母さん、少とお與りなネ、』と常から持つてるだけは悉皆人に與つて了う意のマースロワは云つた。

『汝達に吳れてやるのは……』

『勝手にしや、』と赤毛の女はコラブリョーワを目掛けてツカ〳〵と進み、『汝等が恐くてお堪り拳があるもんけヱ。』

『極道め。』

『汝の方が極道だ。』

『踏張め。』

『何だと? 踏張だと? 此撥賊! 人殺し奴!』と赤毛の女は哭上つた。

『瘋癲め――ツベコベ饒舌らずに引込んでやがれ、』とコラブリョーワは凄じい權幕で怒鳴りつけた。

が、赤毛の女は引込まないで段々チリ〳〵と寄つて來たので、コラブリョーワは矢庭に其胸を撞突くと、待構へてゐた赤毛は手早く片手でコラブリョーワの髮

毛を掴むや否横面を叩きつける、其手をコラブリョーワは素早く取つて掴んだ。マースロワは「お洒落」と一緒に赤毛の女を押へて強に引離さうとしたが、中々剛情に離さばこそ、髪毛を掴んだ手を弛めるかと思ふと今度は直ぐ拳に絡みつけて引摺る。此方は曳かれて横に首を傾けながら、力任せにデク〳〵肥つた赤毛の身體を厭といふほど撲付けると同時に其手に喰ひ付かうとした。

同室の女囚はドヤ〳〵と寄つて來て、二人を圍繞いてワイ〳〵騒いで仲裁へやうとした。肺病患者でさへが床から起きて來て、コン〳〵咳をしながら立つて見てゐた。小兒は恐がつて互に抱合つて泣いてゐた。

此騒動を聞付けて女囚の取締と押丁とが駆付け、漸つと二人を引分ける事は引分けたが、コラブリョーワは頭からヅル〳〵拔落ちる毛を拾ひつゝ、赤毛の女は下襦袢を裂かれて黄ばんだ胸まで引掻かれたのを押へて突立ちつ、互に聲高に罵つて、黒い白いを判けて貰ひたいと言合つた。

『先ア〳〵静かにしなせヱ。結局喧嘩の原因はヴォッカぢやねヱか。臭ひがするからチヤンと解らアナ。待ちなせヱ。明日になつたら典獄さんへ申上げるから、

典獄さんが何とか捌いて下さるだらう。宜いかヱ、最少と氣を付けて温和しくしねヱとお前達の利益にならねヱよ。』と女囚の取締は云つた。『俺は喧嘩の裁判をしてヱる暇がねヱから、さア、一同自分達の床へ入つて靜かにしなせヱ。』

が、騒は中々靜まらないで、暫らくは各自思ひ思ひにゴタクサと罵つて、抑も喧嘩の發端から何方が善いとか惡いとかペチヤクチヤ饒舌り立つて果しが附かなかつた。到頭押丁も取締も歸つて了つてから漸つと靜まつて思ひ〳〵に各自〳〵の床に潜つた。放火犯の婆さんだけは聖像の前に跪座んで祈禱をした。

『惡玉が二人揃つてやがる。』と赤毛の女は端の方の床に潜りながら惡口雜言を散々に吐き始めた。

『何とでも言や。最う與らねヱから覺えてやがれ。』とコラブリョーワは同じやうな毒口を吐いた。で、暫時は二人とも默つて了つた。

『仲裁者が無けりやア、汝が眼の玉を刳拔いてやつたんだ。』と赤毛の女は復た惡口すると、コラブリョーワも負けずに返答した。復た暫らく默つてゐたが、復た毒口を叩く。段々と其間が遠のいて、末は大雷雨の止んだ後のやうに寂とし

た。

一同は就眠いて、中には鼾を發くのもあつた。何時でも長たらしくお祈禱するが例の老婆だけは、尚だ聖像の前に叩頭いてゐた。教會の執事の娘は取締が行つて了つてから再び部屋を歩き出した。

マースロワは容易に就眠かれないで、熟々と自分が最早徒刑囚の身の上であるを考へつ、ボーチコワにも赤毛の女にも咎人呼ばはりされたを憶出したが、扨て如何にしても自分が罪人だとは思切れなかつた。隣床のコラブリョーワはマースロワの方へ寢返りを打つた。

『如何したッて覺悟められないワ、』とマースロワは忍び聲で、『隨分惡い事をしても捕縛らない人さへあるのに、何にもしないで西伯利亞へやられるなんて、這般な平仄の合はない話があるだらうか。』

『心配する事は無いよ、』とコラブリョーワは慰め顔に、『西比利亞だつて人が住んでる處だもの、死ぬ氣遣ヱはねヱやナ。』

『妾だつて死なうたア思つてやしないが、辛いワネ。今まで暢氣に樂をして來た身體だもの。』

『神様のお思召だよ、神様に逆らう事は出來ねヱと覺悟めるのサ、』とコラブリョーワは嘆息しつ、『凡夫の力ぢやア何うにも斯うにもならねヱワナ。』

『夫りやア知つてるともサ。だけども伯母さん、辛い事は矢張辛いワネ。』

と云つて、二人共に暫らく途切れて了つた。

『オイ、お聞きよ、彼の踏張阿魔めが泣いてるやうだよ、』とコラブリョーワが低音でマースロワに知らしたのは、隅の寢床から惘れッぱい變な泣聲がしたからで。

正しく此聲は赤毛の女の啜泣してる聲である。散三ッぱら馬鹿にされた上に到頭大好物のヴォッカを一滴も口に入れる事が出來なかつたを殘念に思つてるのである。倩々と考ふれば、是迄の生涯は他に弄ばれたり、辱められたり、辛められたり、打たれたりしたばかりで、唯つた一度嬉しいと思つたは、職人のモロデーンコフと出來合つた初めての戀情であつたが、此初戀も極アッ、、ケなかつた。或日の事、男は圖部六に醉倒つて來て、醉つた紛れの惡戲に大切な處へ硫

酸を注ぎ込んで女の七顚八倒して苦しむのを朋輩と一緒に見て面白がつてゐた此事を憶出すと急に情なくなつて、誰も聞いてまいと思ふから、小兒のやうに泣出し、鼻を鳴らして涙を呑込んでゐた。

『可憫相だワネ、』とマースロワは云つた。

『可憫相でねヱ事は無ヱが、餘計な嘴を容したがる奴だ。』とコラブリョーワは云つた。

第三十三回

裁判の有つた翌る日の未明にネフリュードフが目を覺ました時は何事か身の上の大事があるやうな蟲の報知がして、而も其の事たるや重大な吉事であるやうな氣がした。

『カチューシャ——再調査！』こりや斯うして依違臥ては居られん哩。早速一伍一什を話しに行かずばなるまい。

すると、不思議な事には此朝、待ちに待ち焦れてゐた貴族長の妻のマーリヤからの手紙——今となれば益々入用である其の手紙が屆いたから、急いで開けて見ると、今迄の關係を綺麗サッパリと絕つて目出度く婚禮して吳れと祝つて來たのである。

『婚禮！』と冷かに繰返した。『何時になつたら婚禮する事やら。昨夕は何も彼も男らしく一切マーリヤの良人に打明けて、身を潔くして些かなりとも先方も滿足させれば此方も氣安くならうと決心したが、扨て今朝になつて見ると爾う容易くは輕卒に實行するわけに行かぬ。といふは、今迄何にも

知らなかつた人に何も彼も暴露けて了つたら折角知らぬが佛で幸福であつた人に不幸の種子を播くやうなものではないか。

先方から聞きにでも來たなら知らず、此方から態々話しに出掛けるなどとは——無用、無用、無用の沙汰である。

ミッシー孃に平たく打明けやうと云ふ一條も今朝になつて見れば矢張爾うは行かぬ。這般な話は得て感情を害し勝ちなもんで、世の中には口に出さない處に面白味のあるものが澤山ある。何も更めて打明けないでも、之から斷じて往來しないとさへ決めれば夫で可いので、若し其理由を聞かれたなら、其時初めて打明けても遲くはない。

唯單りカチューシャに對する覺悟だけは義理明白、一點の惑も無く即時決行せにやならぬ。

『監獄を尋ねて何も彼も打明けて、自分の罪を赦して呉れと詫らう。若し又結婚する必要があるなら——爾うとも、必要があるなら結婚しやうとも、』と心中に思つた。

此考——即ち道德上の見地から萬障を排しても必ずカチューシャと結婚しやうといふ考は、此場合死中に活を求むる慰藉となつた。

財產一條に就ても土地私有が不正であると云ふ自分の信仰と成るべく合するやうに處分しやうと思つた。實際何も彼も思切つて悉皆捨てゝ了はうと云ふ程強くなれなかつたにしろ、人も己れも欺かずに力の成し得る限り實行しやうと覺悟した。

是程堅い決心を起したは近頃久し振であつた。處へ家事取締のアグラフキョーナが來たのを幸ひに、實際心中に期待するよりは一層輪を掛けた斷乎とした調子で、此邸宅は拙者には最早不用になつた。隨つてアグラフキョーナ御身に取締つて貰う必要も無くなつたと思切つて火蓋を切つた。

元來恁んな大きな邸宅を構へてるのは聽て結婚する意があるからだといふは言はず語らず解つてゐたので、俄に不用になつたといふ主人の心持が如何にも請取惡くて意味ありげなので、アグラフキョーナは呆れ果てゝ眼を圓くして主人の顏を不測さうに見た。

『是迄種々と面倒を見てくれたお前の親切は誠に忝けない。だが、恁んな大きな邸を構へて多勢の奉公人を抱へて置く必要は最う無いのだ。此先き若し世話をして呉れる氣があるなら、家財道具の面倒でも見て貰うのだが、之だッてもお母さんの存生中と同樣に放擲らかして置けば、其中には妹のナターシャが來て何とか處置をするだらうから……』

と言掛けると、アグラフヰョーナは首を振つて、

『お邸もお家財も要らないなんて、其麼な事を仰しやつて、若し復たお入用になつたら如何遊ばします。』

『イヤ、最う斷じて二度と要るやうな事は無い、』とネフリュードフは凛乎と答へた。『コルネーにも二た月分の手當をして暇をやると言つて呉れ。』

『夫りやア不可ません。失禮ながら御了見違ひでムいます。如何いふ御都合か存じませんが、外國へでも旅行つしやるお意なら、お歸り遊ばしてから復たお邸が要るのが目に見えてをります。』

『お前は見當違をしてをる。拙者は外國へ行くンぢやアない。無論何處かへ行くかも知れんが、少と風變りの處へ行く……』と忽ちさつと顏を赤くした。

『寧そ話して了はうか、』と心中に、『何も秘す事はない。所詮晩から早かれ話して了はねばならぬのだ、』と思案しつゝ、『實は昨日、拙者の一身上に不思議な大事件が生じた、』と思切つて打明けやうと決心して言葉を更め、『お前は田舍のマーリヤ伯母の許にゐたカチューシャを覺えてるかネ?』

『覺えてます段か。あの子には裁縫を教習んでやりました。』

『其のカチューシャがノウ、昨日裁判へ引出されたのだ。拙者が陪審員で列席してをる處へナ。』

『ヘッ、裁判所へ。先ア可憫相に!』とアグラフヰョーナは思はず聲を上げた。

『如何して先ア裁判へ引出されたのでムいます?』

『殺人犯で!』

『えッ、殺人犯!』と老女は偏呆れに呆れて了つた。

『殺人犯だ。爾ういふ目に會はしたのは悉く拙者の爲た業でノウ。』

『えッ、何でムいますと?』と訝かしさうに主人の顏を見つ、『變でムいますネ。』

衛ういふ大罪を犯さしたのが閣下樣のお仕業だといふのは妙でムいますネ』と老眼に電閃をピカリとさせた。此老女は其昔し主人がカチューシャに關係した一條を善く知つてをるのだ。

『全く拙者の一端の過失が渠女の墮落犯罪の原因となつてるのだから、拙者は此罪亡ぼしの爲め今日の生活を悉く更めて了う意だ。』

『變でムいますネ？　如何して閣下樣がカチューシャの犯罪の原因になつてをります？』と老女は不測の度を越して笑止しくなつたのを凝乎と堪へた。

『それはナ、カチューシャが重罪犯の嫌疑を受けるほどに墮落したのは畢竟拙者の過失が原因となつたのであつて見ると、カチューシャの今日は卽ち拙者が作つた罪だから、全力を盡してなりと助けてやらねばならんのだ。』

『それは閣下樣、結構なお道樂ではムいますが、何も其樣に御自分でお咎めなさるほどなお誤失でもないかと存じます。閣下樣ばかりぢやない、殿方には誰方にもある事で、話さへ解れば圓く濟んで平氣で忘れてお了ひになります、』と老女は眞摯に更たまつて、『本と〳〵お若い時分の些細なお誤失ですもの。そ

んなに深くお咎めになつて、何の關係もない犯罪まで御自分の咎にお脊負遊ばすのは失禮ながらお氣がお弱過ぎます。手前には一向其お心持が合點めませぬ。其樣な御遠慮は御無用と存じます。第一カチューシャは道に外れた渡世をしてをつたやうに承りましたが、豈夫か閣下樣の罪ではムいますまい。』

『イヤ、拙者の罪だとも！夫だから是非カチューシャを眞人間にしなければ拙者の義務が濟まんのだ。』

『しかし折角お盡力になつても眞人間になれば結構でムいますが、中々難かしいもんでムいます。』

『難かしいかも知れんが、成らうが成るまいがお前の關係した事でない。だがアグラフョーナ、お前は若し自分一身の處置に就て心配するなら、お前に話して置かう、死んだ母が遺言いたに……』

『いゝエ、飛んでもない。自分の事なんぞは決して考へません。お逝去れ遊ばした大奥樣には一と方ならない御恩を戴きましたから、此上に何の手前が身勝手を申しませう。嫁に行つた姪のリーゼンカが引取つて吳れると度々申します

から、愈々お暇を戴きます時は姪の處へ參ります。ですから手前一身の振方は何にも心配はムいませんが、閣下樣が其樣な向ふ見ずの事をお考へ遊ばすのが何分氣懸でムいます。お若い時分ですもの、其位なお誤失は誰にもある事でムいます。』

『いや、拙者の考は大分違つてをる。何でもない些細な過失だとは思つてをらんのだ。兎に角拙者には拙者の了簡があるから、此邸を始め家財一式の處分をするのを手傳つて貰ひたいものだ。宜いか、腹を立つて吳れる勿よ。是まで面倒を見て吳れたお前の親切は吳れ〴〵も忝なく思ふのだから。』

不思議にネフリュードフは世の中に最も惡むべく厭ふべきものは誰よりも自分自身であると氣が付いてからは、人を嫌つたり憎んだりする念は全で失くなつて了つた。況してやアグラフョーナやコルネーの平生の忠實かな心掛には心底から嬉しく思つてゐたから、實はコルネーにも自分の不德を懺悔したかつたのであるが、コルチーは平生からシカツべらしく四角張つてるので、其前で懺悔するだけの勇氣が何分出なかつたのだ。

で、裁判所へ行かうと昨日と同じ辻馬車で同じ町を通る路すがら、倩々一身の變化の甚だしいのに呆れて了つた。昨日はミッシー孃と婚禮するもしないも此方の都合次第で、ミッシー孃に取つては自分の妻となるが一生の幸福一期の榮なのは云ふまでも無いと思つてゐたが、今日は婚禮は扨置き交際するだけの資格さへ自分には缺けてるやうな氣がした。

『若しミッシー孃が自分の人物の眞相を知つたなら、中々傍へも寄せ付けやうとはすまい。昨日ミッシー孃が他し男と調戯けてるのを見て餘り快い心持もしなかつたが、今日は夫どころの詮議ではない。假にミッシー孃が婚禮すると云つたところで、爰に一人監獄に留置せられて今日か明日には西伯利亞へ遣られるといふのが解つてゐては、幸福は扨置き虛心平氣に冷ましてゐられやうか。其昔し欺して棄てた女が西伯利亞へ護送されやうといふ中で、若い妻と一緒に披露の訪問をして他人から祝つて貰へやうか。又女敵の關係を有つてる貴族長と一緒に議席に列なつて、ヌク〳〵と平氣な顏して地方視學の議案に投票するなんて事が出來やうか。又今日何時になつたら物になるといふ的もない氣樂な美術修

業なんぞと其樣な暢氣な所爲をしてはゐられるか』と濶然と氣が付いて、『何は扨置き兎も角も辯護士を尋ねて其意見を聞いてから――夫から監獄へ行つて、是迄の一伍一什をカチューシャに打明けるのだ。』

と斯う決心して、扨て愈々カチューシャに面會し、一伍一什を打明け、自分の過去の罪を懺悔し、其罪を償ふためなら何なりと力の能ふ限りは盡して見やう、次第に由つたら進んで結婚までもしやうと語る時の模樣を胸中に描くと、歡喜の念が油然として涙が兩眼に溢れて來た。

第三十四回

ネフリュードフは再び裁判所へ出頭すると、丁度廊下で昨日の廷吏と摺れ違つたので、昨日の囚徒は何處の監獄で、何處から免許を得たら面會出來るかと訊くと、宣告濟の囚徒なら諸方に收容されてをる、愈々宣告が確定するまでは檢事の許可を得て面會出來ると答へつ、

『裁判が濟みましたら檢事局に御案内致しませう。檢事は唯今法庭に出てゐますから、何れ濟みましてからですナ。さア、何卒彼方へ。手前の受持は只今初まる處でムいます。』

と、昨日に比べると氣の毒らしいほど叮嚀過ぎる應待振である。ネフリュードフも慇懃に會釋しつゝ、軈で陪審員の控所近くまで來ると、陪審員連は之から法廷へ出やうとする處で、紳商バクラショーフ君は相變らずの御機嫌で、例に由て少々喫飮してゐた。學校敎師のピョートル先生も例の通りの無遠慮な口を叩いて傍若無人な高笑をしてゐたが、平日ほどには不快な感情がしなかつた。

ネフリュードフは實は自分とマースロワとの關係の一伍一什を陪審員の前で告

白したかつた。『一體なら昨日法庭で、公判中に起立して衆人列座の中で懺悔すべき筈である。』と心中に思つた。が、扨て陪審員達と一緒に出庭して、前日通りの順序――先づ『開廷』と宣言せられ、昨日と同じ顏の三人の判事が金モールの襟付きの制服で正座に就き、昨日と同じ顏の陪審員が同じ脊の高い椅子に着席し、同じ憲兵、同じ僧侶、同じ宣誓と、版で捺したやうな順序で壯嚴に行はれるを目擊すると、縱令心では懺悔する意でも昨日と同樣に氣怯れがして此壯嚴を侵されなかつた。

裁判の次第は昨日と少しも變らなかつたが、陪審員の宣誓と陪審員に對する裁判長の辯論だけは省略された。

此日法廷に持出された事件は竊盜犯である。拔劍の憲兵に引張出された被告は二十歲ばかりの瘦細の胸幅の狹い若者で、血色の惡い黃ばんだ顏をして、鼠の霜降の上着を着て、唯つた一人で被告席に就き、萎れ返つて俯向いたまゝ、法庭に入つて來る人を一々上眼で見てゐた。此若者は合棒と二人で差掛小屋の鎖鑰を破つて三圓六十七錢に値る古蓆數枚を盜出したので捕縛つたのだ。告訴狀に由ると、共犯者と二人で盜んだ蓆を擔いで通行る處を巡査に捕まつたので、二人とも直ぐ自白して了つて監獄に入れられたが、共犯の錠前職は間もなく牢死して此男だけが法廷に引張出されたのだ。盜品の古蓆は證據物件として卓上に提出された。

審問の順序は總て昨日の通りで、證據書類、證據物件、證人、宣誓、尋問、鑑定人、對審と一と山ほどの手續をした。

證人の一人たる巡査に向つて裁判長や檢事や辯護士が代る〳〵に種々雜多の質問を亂發する每に、巡査は一々『然り』とか『知らず』とか云ふ紋切形の答辯をした。が、此巡査は平素の教練で神經が鈍くなり殆んど器械的となつてゐたが、夫でも矢張此囚徒の捕縛始末を申立てるのが嫌さうなが現然と容子で解つた。確に心中では罪人を氣の毒がつてるのだ。

最一人の證人は被害者たる家の戶主で、一見性急な肝癪持で、此古蓆は汝のかと訊かれた時澁々自分の所有らしいと申立てた。で、副檢事から元來此蓆を何にする、汝に取つては大切の品かと訊かれると、忽ち焦り〳〵と肝癪を起し

て、『役にも立たねヱ古蓆を盗みやアがつて、俺ア要りましねヱ。如此ヱな七面倒臭ヱ事を訊かれるなら、古蓆ぐれゐを捜すんぢやアがアせん。十圓札の一枚や二枚小附けにして捨てた方が文句が無くて氣が利いてるだ。俺ア、お前さん、辻馬車に最う五圓領奪くられてやさア。調戯ぢやアがアせんせ、加之に持病の僂痲斯までが痛んで來りやア世話アねヱや。』

と證人の陳述は斯くの通りであつた。が、被告自身は何も彼も悉く白狀して、弶縄に掛つた獸のやうにキョト〳〵して恐かな怯くに四邊を見廻してゐた。

事件は極明瞭であつたが、副檢事は前日通りに肩を聳やかして、狡猾こくも犯人を巧く弶縄に陷め込まうと、中々巧い質問を掛けた。

其辯論に由ると、此犯罪は人家の鎖鑰を破壞して闖入したる重罪で、其故に最も重き刑に處さねはならぬと論告した。裁判所指定の辯護士は檢事の說を論駁して、犯罪の行はれたは人家ではなくて物置小屋だから、犯罪其物を否定する事は出來ぬが、檢事の論告する如く社會の安寧に危險を及ぼすべき性質のものでないと辯明した。裁判長は前日通りに絕對中立の不偏不黨の役目を勤めて、

陪審員に對つて解り切つてる事實と當然解り切つてをるべき筈の理窟を執拗く說明して聞かせて後、前日通りに休憩を命じた。で、陪審員共は復た紙莨を喫つたりタワイもない下らぬ話をしたりする中に、再び廷吏が來て『開廷』と通告した。其間二人の憲兵は拔劍して犯人に座睡りさせまいと脅かしてゐた。

調書に由ると此若者は親許から煙草製造場の丁稚に遣られて五年間奉公してゐたが、同盟罷工の野次馬をして追出されて了ひ、夫からは奉公口が無くて浮浪いてる中に、持つてるだけは飮んで了つて、町中を彼方此方ウロ〳〵してゐた。すると或る居酒屋で、矢張同じやうに長い間、口が無くて浮浪いてる錠前職の飮んだくれ男と一緒になつた。で、其晩二人が酒に喰醉つた擧句に共謀して、差掛小屋の錠前を破して手當り任せに古蓆を擔ぎ出したのださうだ。二人ともに直ぐ捕縛つて直ぐ白狀して監獄に入れられたが、錠前職の男は公判にならない中に死んで了つたので、若い方だけが危險な動物と見做されて社會から隔離すべく論告された。

『昨日の犯人と同樣に矢張危險な動物なんだナ、』とネフリュードフは進行する一

伍一什を聞き取りつゝ心中に考へた。『渠等は危險だらう。が、彼等を裁判する吾等は危險でなからうか。餘人は兎も角、斯くいふ自分は人を欺き人に禍ひしたものだが、夫にも關らず、朋友知己鄕黨等皆少しも自分を卑めない。卑めるどころか、却て尊敬してをる……

『この小僧めが大した惡人でなく、尋常普通の人間なのは知れ切つてをる。誰にも能く解る。畢竟境遇が境遇だから根が罪の無い單純な男だけにツイ偶つと出來心に誤られたのだ。であるから斯ういふ少年の惡に走るを防ぐには何よりも先づ墮落の原因たる周圍の誘惑を除いてやるのが急務である。小僧めが零落れて田舍から町へ奉公に來た抑もの初めに心あるものが若し慈悲を掛けて敎つてやつたなら――』とネフリユードフは若者の意氣地無ささうなキヨト〳〵する顏を見つゝ、『町へ來て奉公に住込んでからでも猶だ遲くは無い。十二時間の仕事を濟ましてから年長の職人仲間に伴れられて居酒屋へ出掛ける段に、誰でも關はぬが、「那樣な處へ行つてはならぬ、汝の利益にならぬ、」と一言云つて聞かしたなら、小兒だもの、必ず行かなかつたに違ひない、隨つて惡い橫道に外れもせず、惡事もしなかつたらうに――

『然るにダ、長い間の奉公中、誰一人此若者を不便がる者なく、可哀相に犬や猫のやうに虱が生いてはならぬと頭の毛を短かく刈込まれて、職人原の走り使ひに虐使れてゐた。且又、酒を飮んだり、虛言を吐いたり、欺瞞したり、喧嘩をしたり、怠けたりするものが立派なお手本にすべき人間だと年長の職人達から敎へられてゐた――

『加之ならず、過度な勞働と不養生で身體を破損し、氣が違つた同樣に夢現で無我夢中に目的もなく往來を漂泊して、其果が人に欺瞞られてツイ浮か〳〵と差掛小屋に忍込んで、三文の足しにもならぬ腐つた古蓆を盜出したのだ。然るに吾々は無垢なる少年を此の如く墮落せしめた原因を尋ねて除かうとはしないで、渠一人を處刑すれば惡を滅ぼし得たものと思つてる――

『恐るべき哉！』

と、ネフリユードフは頻りに反覆熟慮しつゝ、眼前の裁判などは目にも耳にも入らず、此痛切なる實例を目のあたりに見て慴然として恐れた。如何して之が

今まで解らなかつたらう。何故又他の連中には猶だ解らないのだらう。何とも合點が行かぬ事だ。

第三十五回

休憩時間中にネフリユードフは二度と再び法廷に戻らぬ決心で廊下へ出た。渠等をして渠等の欲する儘に裁判せしめやう。此慘らしい不見目なお茶番のお仲間は迚も最う辛抱がならぬ。

何しろ檢事局を尋ねて檢事に直接に面會しやうとした。廷吏は檢事の事務繁忙を楯にして取次がうともしなかつたが、其樣な事には頓着なく檢事局の入口まで行くと、丁度中から出て來た他の廷吏に邂逅はしたので、自分は陪審員の一人だが緊急事件で檢事に面會したいと申込んだ。

公爵の肩書と衣服の立派なお蔭に廷吏は煙に卷かれて檢事に通じ、ネフリユードフは首尾よく通されたが、遮二無二面會を要求して止まぬ强情に檢事は困り拔いた顏をして突立つた儘、

『何御用事です？』と嚴格に云つた。

『拙者は陪審員ネフリユードフといふもの。實は折入つた用事があつて女囚マースロワに面會したいのですが、何卒許可して戴きたい――』と口早に凛乎と言

退けつ、今や一生の運命に大變化を來す序の口に飛込まんとするを自覺しつゝ、サッと顔を赤くした。

檢事は脊の低い色の黑い眼のキョロついた男で、胡麻鹽になりかゝつた五分刈頭髪と同じやうに短かく刈込んだ縮々鬚を生やした下顋を突出しつゝ、

『マースロワ? あッ、あの毒殺一件のですナ、』と沈着拂つた調子で、『だが、如何いふ用事でマースロワに面會したいのです?』と更に物柔かな低音で、『用事が解らないと許す事が出來ませぬ。』

『實は重大な用事があつて面會したいのでムるが——』とネフリュードフは赤面しながら云つた。

『爾うですか』と檢事は眼を釣上げてネフリュードフを眤と見ながら、『マースロワの裁判は如何なつたか、御存じでせうナ?』

『知つてます。昨日公判になつて徒刑四年と云ふ不當な宣告を受けました。併し渠女は全く冤罪です。』

『昨日宣告が濟んだばかりだと、』とネフリュードフが無實を主張したのを耳にも

入れずに檢事は、『尙だ確定しないから、矢張未決檻に居る筈です。面會日が定つてますから其日に直接お出掛けなすつたら宜からう。』

『だが、實は一刻も早く面會したいので……』と云ひつゝネフリュードフは段々と最後の運が迫つて來たやうな感情がした。

『一刻も早く——何故そんなにお急ぎになります?』と檢事は堪り兼ねた容子で眉を釣上げた。

『何故でも——マースロワが此の如き不當な重刑に處せられたに就ては拙者が大に責任があるので……』と慄聲で云つて、云つて了つてから要でもない事を口外したもんだと思つた。

『如何して?』

『實はマースロワといふは昔し拙者が若氣の到りで騙して棄てた女。畢竟其れが原因で墮落したので、若し拙者が棄てなかつたなら、恐らくは墮落もせず從つて今度のやうな馬鹿々々しい目にも會うまいと思ひます。』

『さア、如何ですかナ、矢張同し事でせう。だが、夫が爲めに面會する必要が

あると云ふのは――』

『有るぢやアありませんか、爾ういふわけですもの。マースロワに對する拙者の責任上飽くまでも嫌疑を晴らしてやる手段を盡して、愈々百計盡きたなら是非が無い。西伯利亞までも跡を追つて、隨分場合に由つたら婚禮……まで仕やうと……』とネフリュードフは口訥りながら云ひつ、我知らずホロリ〳〵と涙を覆した。

『えッ、何ですと……飛んでもない、意外千萬な――』と云ふ内、檢事は偶つと以前にネフリュードフの話を誰からか聞いた事があるのを憶出し、『貴下は確かクラスノペールスク郡會の議員でしたナ？』

『其麼な事は如何でも宜しい。拙者のお願ひする一條とは何の關係もありますまい、』とネフリュードフは腹立たしげに顏を赤めながら云つた。

『勿論』と檢事は一向平氣で腹の底に微笑を含みながら、『唯餘り意外な、餘り常識を外れた事を仰しやるから……』

『常識を外れてゐやうとゐまいとお關ひなさるな。面會を許して下さるのか、下さらんのか。』

『許す事は許します。今直ぐ面會認可の命令書を書いて上げますからナ、暫らくお待ちなさい。』

と檢事は直ぐ書卓へ行つてスラ〳〵と書きつゝ、『先ア、腰をお掛けになつたら宜からう。』と云つたが、ネフリュードフは突立つたまゝ凝焉としてゐた。

軈て檢事は認可書を書いてネフリュードフに渡しながら暫く不思議さうに其顏を眤つと見てゐた。

『最う一ッお話して置く事がある。拙者は以來陪審員として出廷致しませぬから……』

『それなら法廷へ然るべき理由を具してお屆けなさらんけりやならぬ。』

『拙者の理由と云ふは外でもムらぬ。一體裁判と云ふものは總て無用で且つ人道に背いたものだと考へます。』

『如何にも。』と檢事は底知れぬ微笑を洩しつ、其樣な說は誰も知つてる笑止な沙汰だと云はぬばかりに、『御道理ですが、檢事の職として下官はお說に同意し

兼ねると御承知置き願ひたい。左に右く理由を具して法廷へお届けなさらんけりやならぬ。法廷が其理由を相當と認めるか不相當と認めるか、何方か知りませんが、若し不相當と認めたら罰金を科するだけですから、其お意でお屆けなさるが宜しいでせう。』

『いや、此處で貴下にお話ししたからには、更に外で繰返す必要はムらぬ、』とネフリュードフは腹立しげに云つた。

『では失禮します、』と檢事は此變挺來なお客を一刻も早く外して逃出さうとして輕く頭を下げた。

で、ネフリュードフが室を去ると直ぐ、

『誰だい、君の話してたのは?』と一人の同僚が聲を掛けた。

『ネフリュードフ公爵さ。君も知つてるだらう、クラスノペールスクの郡會で不思議な說を吐く著名の男さ。先生、陪審員になつてらツしやるさうだが、昨日徒刑に宣告した囚徒の中に、昔し騙した女だが娘だかゞあるンださうで、其女と婚禮しやうつて仰しやいますのだ。』

『えッ、何だと? ……そんな馬鹿〳〵しい咄があるもんか。』

『あつても無くても爾う仰しやるのだから仕方が無い。加之も彼の通り夢中になつてる。』

『困り者だナ。此頃の青年は何故斯うだらう。得て其樣な不健全な思想にばかり耽りたがる。』

『だが、公爵は既う青年でもないせ。』

『併しネフリュードフ君も困り者だが、有名なイワシェーンコフ君にも閉口して了うナ。毎日〳〵困らせられる。無休に際限もなく饒舌り立てるとも、饒舌り立てるとも。』

『如斯いふ人間は絕對に滅すべしだ。那樣云ふのが眞に社會の毀潰しといふものだ。』

第三十六回

檢事局を去ると直ぐ其足で未決監へ行つた。が、マースロワは爰には在ないで、典獄が多分假留置監だらうと敎へて呉れた。

假留置監までは大分遠方だから、行き着いた時は日がトボ〳〵になつた。で、大きな陰氣臭い監獄の門を入らうとすると、門衞は引留めて鉦を鳴らし、其の音に應じて押丁が忽ち現はれて來た。

ネフリュードフは面會認可の命令書を出して示すと、典獄の許可が無ければ取計ひが出來ぬと云つた。夫なら典獄に會はうと二階の典獄の私室へと階段を登り切ると、面白い、節の細かい、手の急いピヤノの音色が何邊からか微かに聞え、只ある室から片眼を繃帶した意地の惡るさうな下婢が突と飛出して、手荒くガタンと閾を排ける其途端、曲調が中から漏れてネフリュードフの耳を打つた。が、其中誰も聞き飽きてるリストの亂曲だが、中々面白く上手に彈いてゐた。其の或る一節だけで、一節の切まで彈くと又初から繰返してゐた。

ネフリュードフは典獄は在宿かと訊くと、繃帶の下婢は不在だと答へたので、

『何時歸つて來ます?』と訊いた。

其時曲は復た止つて、復た初めから繰返した。音色冴えて段々と鮮かに手が籠んて來た。

『訊いて參りませう、』と云つて、下婢は內へ入つた。

曲は嫋々として次第に興を增したが、忽ちフッと切れて、それと共に人の聲がした。

『何時歸るか解らないッてお云ひ。訪問に行らしッたんだからネ。人う、折角油が乘つた處を邪魔ッけだよ。』と戶の背後から女の聲がした。曲は復た初まつたが、復た切れて、今度は椅子を引摺る音が聞えた。ムシャクシャ腹のピヤニストが時ならぬ時分の厄介客に邪魔されたのをブリ〳〵怒つて、到頭堪りかねて肝癪を破裂さした容子が眼に見えるやうだ。

『お父さんは在ませんよ。』と青白い病身らしい散らし髮の眼の緣の黑い娘は金切聲で怒鳴つて次の室へと飛出して來て見ると、意外に立派な扮裝をした紳士が在たので、俄かに言葉を改めて丁寧に、

『此方へ、何卒。何御用でムいます？』

『當監獄内の囚人に面會に來ました。』

『國事犯でムいませうネ？』

『いや、國事犯ぢやアありません。檢事からの認可書を持つてます。』

『左樣でムいますか。生憎と父は出掛けましたし、妾には一向解りませんが、何卒、先アお入り遊ばせ。あッ、副典獄にお話し遊ばしたら宜しうムいませう。多分猶だ役所に居りませうから、役所へ行らしッてお賴み遊ばせ。貴下のお名前は？』

『難有う、』とネフリュードフは娘の問には答へないで、急いで挨拶して歸つた。お客が歸つてからも入口の戶は開放したまゝで、斯ういふ場所柄に不似合な病身然たる娘の柄に無い陽氣な調が再た初まつた。慥にお稽古のお練習をしてゐるのだらう。

廣庭まで來ると、短かい口髯の生えた役人に會つたから、副典獄の所在を尋ねると、其人が卽ち副典獄であつたので、檢事の面會認可の命令書を見せると、

未決監への認可書では許す事が出來ぬと云つた。其上に此日は時刻が遲かつたので、『明日復た入來つしやい。明日の十時からなら誰にでも許します。典獄も多分居りませうから。すれば普通面會室なり、或は典獄さへ許せば事務所でも面會出來ます。』

您ういふわけで此日は到頭面會が出來ずに歸つたが、唯一圖にマースロワに面會しやうとばかり凝固まつてたから、歸路の途中も法廷の事などは少しも考へないで、檢事や副典獄に交涉した顚末ばかりが胸に浮んで來た。

マースロワに面會したさに檢事と面白くもない問答をしたり、少とも早く會はうと二箇所の監獄へ草臥足を引摺つたりした一日の骨折で神經は非常に興奮して容易に沈着かれなかつた。で、家へ歸ると直ぐ、暫らく手を附けなかつた日記を出して、彼處此處を拾ひ讀みしてから次のやうに書き留めた。

『余は日記を廢する事二年間、再び此兒戲を爲すまじと決したり。然れども日記は兒戲に非ずして、各自の心內に住する神聖なる眞我との交通談話なり。余の眞我は恰も二年間昏睡し、其間余は眞理を語るの友なく眞我と交會する能は

ざりしが、爰に此年四月二十八日陪審員として法廷に出廷するや端なくも意外なる事件に逢着して余の眞我は翻然として昏睡より覺めたり。其昔し余が一端誘惑したる後弊履の如く棄てゝ顧みざりし少女カチューシャは思ひきや獄衣を纏うて被告席に座し、加之も偶然の錯誤よりして何等の罪なくして徒刑に宣告せられたり。此事たるや、畢竟余が曩日の非理非道に基ひし、余の浮薄なる行爲の爲に此可憐なる少女をして暗黑の底に墮落せしめ、終には無辜の寃罪に泣く不幸に陷らしめたるや明かなれば、余は能ふ限りの力を盡してカチューシャを救ふべく決心し、此日檢事局の許可を得て監獄に行きたれども時刻遲れて面會を許されざりき。併し乍ら余は必ずカチューシャに面會し、叩頭して曩日の罪を謝し、罪過を償ふためには婚禮さへもすべく覺悟したり。神よ、助け給へ。余が心は平和なり、余が心は歡喜に充てり。』

第三十七回

其晩マースロワは暫らく就眠かれないで、何時までも眼が冴え〳〵して、見る氣もなく敎會の長老の娘が行つたり來たりする入口の方角を瞻めつゝ頻りに過去や將來を思ひ暮らしてゐた。此後は最う如何間違はうとも薩哈連の囚徒づれの妻となるやうな爾んな所爲は決して爲まい。成るなら監獄吏——書記なり看守なり、間違つたら見習でも關はぬから役人の端くれと名のつくものと夫婦になつて世を渡らうと考へた。尤も蜂が蜜を捜すと同樣に多勢が自分の踵を尾けて廻るのだから如何な男でも撰擇見取なのだ。

『衆人如此な目に會つて行着いちまうンだよ。妾だけは石にかゝぶり着いたッて瘦せなんかするもんか!』

と口裡で力んだが、不斗法庭で辯護士が自分の顏ばかり見てゐた事、辯護士は魯か裁判長初め判事も檢事も——夫どころかい、自分の顏を見たいばッかりに態々法廷へ來たものさへあつた事やら、朋輩のベルタが面會に來て馴染客の或る學生が自分の安否を大變心配してゐると話した事やら、續いてツイ唯ッた

今の赤毛の女の大喧嘩やら、麵包屋が大負けに麵包を負けて呉れた事やら、何やら彼やら夫から夫と種々雜多な記憶を順々に呼起したが、不思議とネフリュードフの事ばかりは少しも憶出さなかつた。

尤も一生に再たと有るまじき幸福な春かしい兒童時代や娘盛りやネフリュードフとの初戀を憶出すのは何よりも一番悲しいから、心の奥の奥の最極の奥に秘藏ひ込んで了ひ、今では全で忘れて憶出しもしなければ夢にさへも見なかつた。今日といふ日、久し振で法廷で顏を合はしても一向氣が付かなかつたは、最初からネフリュードフを念頭に置かなかつたからで、チヨツピリ髯の五分刈頭の昔しの軍人姿が毿々した八字鬚の前額の拔上つた少禿げ頭に變つて見違へて了つたばかりでは無い。七年前にネフリュードフが出征軍からの戻路に、伯母の家を素通りして了つた彼の暗黑な恐ろしい晩以來ネフリュートフの一條は全で過去に葬つて了つたのである。

其時は既う妊娠したのに氣が付いて日がな毎日ネフリュードフの歸つて來るのに待焦れ、腹の中の子は少しも苦にしないで、折々不意に柔かな塊が動き出す

のを不思議に思ふばかりだッたが、其恐しい晩から以來急に容子が變つて猶だ産れもしない小兒が既う荷厄介になつて來た。

伯母さん達もネフリュードフを待暮して、是非復た歸路に寄つて呉れと手紙を出したが、此度は命令通りの時刻に必ずペテルブルグへ歸らねばならぬから途中で下車する事は出來ぬと電報を打つて來た。此事を聞くとカチューシャは當日に停車場まで行つて會はうと決心した。

汽車の着くのは夜の二時だから、二人の老主人を寢床へ入れてから後、賄方の娘のマーシカを伴れ、肩掛を頭からスッポリと被つて、古靴を穿いて裾を端折りつ、ステーションへと驅付けた。

生暖かい風交りに緩溫い大粒の雨が車軸を流すやうに一としきり降つて復た止んだ後、田甫の小徑が漸と解る位の暗夜の中を、林の近路を拔けやうとして入ると鼻を摘まれても解らぬ眞暗三寶で、常から道馴れてるカチューシャでさへがツイ踏迷つたので、着車の時刻より餘程早くから裕然と待受ける筈の豫定が外れて、唯つた三分しか停車しない此停車場まで漸つと着いた時は、早や二番

カチューシャは雨に濡れたプラットフォームを一散走りに駈けて、危うく其端から轉がり落ちやうとしたのを漸とこさと段を駈下りて死に物狂ひに……………裾はヒタ／＼に濡れて足に絡はり、到頭ショールを吹飛ばされて了つたが、矢張夢中に駈けて行つた。

目の鈴が鳴つた處である。

マースロワは周章てゝプラットフォームに駈込んで一等室の前まで行つた。車室の内は油燈が燦爛してゐる上に、太い蠟燭を二本まで點けた卓子を央に、二人の士官は天鵞絨張の椅子に倚掛つて相對ひに骨牌戯をしてゐた。ネフリュードフは緊合と適つた洋袴に白襯衣を着け、後ろに倚掛りつゝ椅子に肱を凭れて笑ひながら紙莨を燻かしてゐた。其顔を見るや否、凍んだ手で車室の窓を叩く途端に、三番目の鈴が鳴つて、列車は不意に後ろへガタッと一ト下りして後徐々と一車宛進行を始め出した。骨牌組の一人は手に札を持ちつゝ突と起つて窓外を見た。恰も同時にカチューシャは再び窓を叩いて顔を出すと、其時此車室は徐ろに動き出したので、カチューシャも車室と並行して歩き出した。此容子を見て骨牌組の士官は頻りに窓の戸を降さうとガタ／＼させる處へネフリュードフが來て、士官を推退けて自分が代つて降さうとした。其中に汽車は段々早く進行し初し、カチューシャも愈々疾足出して駈出して、漸とこさと窓の下りたのを見たが、既う間に合はなかつた。車掌は意地惡くカチューシャを推退けつゝヒラリと車へ飛び

移ると共に汽車の進行は一段急速力を增した。カチューシャは雨に濡れたプラットフォームを一散走りに駆けて、危なく其端から轉がり落ちやうとしたのを漸とこさと段を駆下りて、死的狂ひに線路を沿つて益々走出したが、其中に一等室は二等室となり、終には三等室となりて瞬一瞬毎に速力を增し、到頭背後にランプの附いてる最終の車が通越して見えなくなつて了つた時、漸く機關へ水を供給する水槽の傍まで來た。風は頭を包む肩掛を吹いて、裾は、ヒタ〱、に濡れて足に纏はり、到頭肩掛を吹飛ばされて了つたが、矢張夢中に駆けてゐた。

『カテリーナ、肩掛が落ちてよ。』と後から息せきと追付かうと駆けて來る小娘は金切聲を出した。其聲に氣が附いたカチューシャは初めて顧盼りざま肩掛を拾取ると共に、ワッ、と聲を上けて、

『行つて了つた！』と泣出した。

『邦様な立派な一等室に天鵞絨の肱掛椅子に座つて、戯談を云つたりお酒を飲んだりしてゐるのに、妾は此處で泥塗れになつて、眞暗闇に雨風に揉まれて泣いて立つてる』と心中に思ひつゝ地面に、ベッタリ、座つてシク〱と歔欷上げた。

小娘も悲しくなつて、全濡れのカチューシャに縋り付いて一緒に泣いた。

『サッ、家へ歸らう。』と云つた。が、心中は一緒に伴れて來た娘の事なぞは考へないで、『今度の汽車が通つたら、寧そ一と思ひに轢かれて死んで了はうか。』と思ひつ覺悟を定めたが、前後不覺に頂巓まで登詰めて夢中になつた後、段々と沈着き掛つた時、能く有る事で、腹の中の子即ちネフリュードフの紀念の子が不意に伸びをしたらしく、細くて纖弱い強い棒のやうなものがウンと突張つた。するとツイ今がた迄も生きてゐられない程にネフリュートフを怨んで、寧そのこと面當に死なうとさへ思詰めた心持が忽ち何處へか消えて了ひ、此子が可哀相だと思ひ直して力泣く〳〵起上つて、肩掛を被りつ悄然と停車場を去つた。

其晩遲くカチューシャは全濡れの泥だらけとなつて、疲勞れ切つて家へ歸つたが、其瞬間からカチューシャの心持は段々と變つて到頭現在の境涯に墮落し初めたのだ。

此晩からカチューシャは神の存在や人間の至善を信ずる事を止めて了つた。夫迄は自分も神を信ずれば他も亦神を信ずる事と信じてゐたが、其晩からは眞摯

に神を信ずるものは世間に一人もないので、神だの神の法だのといふは悉く虚僞の塊だと思込んで了つた。又自分一人が戀したわけでなく互に思ひ思はれてゐたに違ひないのだが、戀に焦がれた男は己れの慾を遂げると忽ちケロリと忘れて了つて、女の大切な戀を玩弄にした。然も其人は自分が知つてる範圍の最高級の人であつたが、其人でさへが此通りなら、おしなべての男の惡性は推して知るべきである。

斯う思込んで了つてから後、カチューシャが遭逢はした事は事毎に益々此確信を強めざるは無い。ネフリュードフの伯母なる親切な實意のある老婦人でさへが、カチューシャが今まで通りに働く事が出來なくなると暇を出して了つた。夫から以後に出會つた人間は、女といふ女はカチューシャを金儲けの道具に使用ひ、男といふ男は初手の警察の好い齡をした老爺を始め監獄の押丁まで、皆カチューシャを快樂の目的物と考へてゐた。で、世の中に誰一人として此汚ない快樂以外に心を留めるものはないやうな氣がしたが、取別けて一本立になつた二年目に一時世話になつた老操觚者の說を聞いてからは益々此信仰を深くした。此老先

生は常から口癖のやうに、人生の快樂を組成するは唯此一義で、之を詩的生活とも美的生活とも云ふのだと極露骨にカチューシャに話して呉れた。

　で、人は誰でも己れの爲め、己れの快樂の爲に生きてるので、神とか正義とかは皆虚僞であると思つた。勿論、時偶は、何故世の中は斯うも間違つて互に苦め合つたり辛め合つたりするのかと不思議に思はぬでもなかつたが、斯ういふ時は何時でも這般な世の中には住はないのか一番の上分別だと直ぐ定めて了ひ、氣が鬱いだり結ぼれたりした時は煙草を喫んだり酒を飲んだりして紛らした。何よりも氣が利いてるのは情夫を作らへてやッさもッさを忘れて了うのが一番であつた。

第三十八回

　翌れば日曜日の朝の五時、婦人檻房の廊下から例刻の笛が鳴つた時、既から目が覺めてるコラブリョーワはマースロワを起した。

『あッ、妾は罪人だ——最う罪人なんだ、』とマースロワは心中に慄然としつ。目を摩りながらに夜が明けると共に徐々汚なくなつた惡空氣を嫌々呼吸し、最一度グッスリと二度睡をして樂しい夢でも見たかつたが、監獄の怯氣癖が睡氣に勝つて、足だけ踏伸しつ四邊を見廻した。

　大抵は眼を覺ましてゐたが、年嵩の小兒だけは猶だ睡つてゐた。酒の密賣をした女は小兒の枕とした上衣を目を覺さないやうに秘と拔取つた。線路番人の媽は襁褓の襤褸を乾さうと煖爐の傍に釣るしてゐた。碧い瞳のフェードーシャは泣叫ぶ赤兒を抱いて柔しい聲で和してゐた。肺病患者は激しく咳込んで兩手を胸へ當てゝ顏を眞赤にして、咳の途切れ目には嘆息といふよりは泣くと云つた方が當りさうな嘆息を洩した。赤毛の肥滿女は膝を折曲げて仰向になつたまま前夜の夢を面白さうに話してゐた。放火犯の老婆は聖像の前に立つて一々十

字を切つて折腰をしては一ッ言葉を何遍も繰返してお祈禱を上げてゐた。教會の長老の娘は床の上に座つて茫然した睡さう目をして前面の方を見てゐた。お洒落さんは脂氣のある黑い硬い髮の毛を指に卷付けてゐた。

忽ち上靴の音が廊下から聞えると共に閾が排き、ジャケツに鼠の短かい袴の掃除役の囚徒が二人ツカ〳〵と入つて來て臭い桶を房外へ持出した。女囚達は顏を洗ひに廊下の水槽へ出掛けたが、赤毛の女は隣房の女囚と落合つて復た喧嘩を初めた。復たしても惡口、怒鳴り合、それから泣言だ。

『獨房へ行きてエのか』、と老押丁は赤毛の女の肌抜ぎのボテ〳〵した脊中を平手でピシヤリと廊下の隅まで鳴るほどに喰はせながら、『好い加減に吐くのを止めねエと諾かねエぞ。』

『何だねエ、阿爺さん、』と女は茶にして了つて、『お調戲けでないよ。』

『さッ、依違しちやア不可ねエ。』と老押丁はヤイ〳〵急き立てた。『急いで支度をしや。日曜日のお勤めに行くンだ。』

マースロワが衣服を着更へて頭髮を粧る間もない中に、典獄は副典獄を伴れ

て遣つて來た。

『さッ檢閲だぞ、』と押丁は呼ばはツた。

すると、其邊此邊の檻房から女囚たちがゾロ〳〵と現はれて廊下に二列に竝び、各自が前列の肩へ手を掛けると共に點呼が初まつて、無事に檢閲を濟ますと直ぐ女囚の取締が一同を引率して禮拜堂へと行つた。

マースロワとフョードーシャは彼地此地の檻房から集つた百人以上の女囚の行列の中央にゐた。一同は悉く白い獄衣の揃ひに白い手巾を頭に卷いてゐたが、其中で色物の普通の衣服で交つてゐるのは西伯利亞の良人の許へ小兒を伴れて行く流人の女房達であつた。

階段は此囚人の行列で一杯になつて、上靴の輕いバタ〳〵といふ音が、折々は笑聲も交るガヤ〳〵した話聲の中に聞えた。中段の廊下の曲り角でマースロワは敵のボーチコワが前の方に行くのを發見けて、俄に顏色を變へてフョードーシャを見た。段を下り切ると女囚達は一同鳴を鎭めて、各自に十字を切つて頭を下げながら、倘だ一人も入つてない金光燦爛たる禮拜堂の中へと、互に押

合ひ壓合ひつゝ、右手の女囚席に着いた。

女囚が着席した後から、淡鼠の獄衣の男囚、即ち流人、收檻人、教會破門者等の面々が大きな咳拂をしながらゴタクサと左側と中央の席に着いた。

迴廊の一方は最先きに入場した西伯利亞の徒刑囚で、頭を半分だけ剃陷ちて重い鐵鎖を足に付けてゐた。

此監獄禮拜堂は或る富豪の商人が數萬圓を寄捨して新築粧飾したので、金銀五彩輝き渡つてピカ〳〵してゐた。

暫時は寂として聲なく、唯咳拂ひと鼻を拭む音と赤兒の泣聲と、彼方此方で鏗々鏘々たる鐵鎖の響きが絕間なかつた。が、中央に立つ囚徒達は徐々と動き出して、互に押したり押されたりして、到頭禮拜堂の中央に通ずる一條の道を作ると、典獄は此道を通つて滿堂の囚徒の最前なる第一列の中央の自席に就いた。

第三十九回

儀式は始つた、先づ次のやうな順序で。

一種奇々妙々な形狀をした到つて勝手の惡るさうな金襴の法衣を纏つた司祭は、細かに刻んだ麵麭を叮嚀に皿に列べ、一々昔の聖の名や祈禱を繰返しては葡萄酒の杯に一片々々殘り少なに摘み入れた。其時、長老は第一にスラヴ語の祈禱を讀上げたが、左らぬだに中々難かしくて解り惡いのを早口に讀むんだから愈々以て何の事ッたか全然解らなかつた。夫から囚徒等と一緒に代る〳〵に歌つた。祈禱は重に皇帝と皇族との健康を祈つたものばかりで、此願文を一々各別に、或は他の祈禱と一緒に何度となく繰返した。其間會衆は跪いてゐた。

其他に使徒行傳中の文句を度々讀上げたが、變に緊迫めたやうな苦しい聲を搾り出すので、何を讀んでるのか皆目解らなかつた。

夫が終ると、今度は司祭が燎々と馬可傳の第十六章を讀上げた。此章には基督は死人の中より甦つて、天に昇つて父なる神の右に坐するに先だちて、先づマグダラのマリヤに現はれて七ッの惡鬼を逐出し、更に十一人の弟子に現はれ

て曰く、此福音は遍く世界を廻りて宣傳へよ、信せざるものは死し、信じてバプテズマを受くるものは救はるべく、彼等より惡鬼を逐出し、病に手を觸るれば忽ち醫し、異邦の新らしき言葉を語り、蛇を掴み又毒を飲むとも害なく死せざるべしとあつた。

元來此儀式の根元は、司祭が斷つて葡萄酒に入れた麵麭の片が或る供養をして手術を行ひ且祈禱する時は神の血と肉とに變化するといふ假定に始まつたのである。

で、此手術を行ふが即ち司祭の役目で、金襴の袈裟に纏はる手を規則的に擧げたり下げたりして、終ひに兩膝を突いて祭机と其上に列べた祭具に一々接吻する。一番大切なは兩手で布巾の兩端を摘んで、靜かに拍子を取つて銀の皿と金の杯の上を右左へと引張つて動かすので、其間に麵麭と葡萄酒とが肉と血とに變じて了うのださうで、儀式中の此手術が最も嚴かに行はれた。

『惠みある最も純潔き最も神聖なる處女マリヤに――』と司祭は金の中仕切の奥から聲を掛けると、樂壇は其聲に應じて、處女の操を失はずしてキリストを

産みたるが故に有らゆる諸天神女よりは更に尊く更に榮えある聖母マリヤの譽れを輝かすは正しき務なりといふ意味の歌を莊重に歌つた。此歌の間に葡萄酒と麵麭とが血と肉とに一變して了うのださうで、司祭は布巾を取つて、先づ麵麭の片を中央から四つに切つて葡萄酒に漬けてから後己が口に入れた。神の肉の一片を食し、神の血を少々飲んだ意なのだ。夫が濟むと、帷帳を引き、金の中仕切の中央の扉を排けて、手に金の杯を持つて現はれ、敬虔の心深き者は來つて神の肉と血とを享けよと招いた。

五六人の小兒は忽ち現はれて來た。

司祭は一々小兒達に其名前を聞いてから、丁寧に杯から酒と一緒に麵麭の一片を抄ひ取つては一人々々に代る〴〵小兒の口の奥へと入れて與つた。長老は一々小兒の口を拭いて遣りながら、神の肉を食し神の血を啜つたと云ふ意味の歌を面白く歌つた。之が終ると、司祭は再び中仕切の奥へ入つて、殘りの血と殘りの肉とを悉皆喰べて了つて、口鬚と口と杯を拭いて、薄い牛の皮の靴の踵を鳴らしながら好い機嫌で現はれて來た。

大切な宗教の儀式は之で濟んで了つたのだが、司祭は不幸なる囚徒を慰めやうとして普通の儀式以外に別な儀式をした。今度は無數の蠟燭で照らされてる顏と手だけの黑い鎚金の鍍金像、即ち自分が食つた神に像つたとか云ふ鍍金像の前に行つて、妙な調子外れの聲で讀むのだか歌うのだか何方か解らぬが次の變梃な文句を列べ立てた。

『聖徒の中の榮えある最も美はしきエスよ、諸〱の殉教者に頌へられたる全能の主エスよ、私を助け給へ、私の救世主なるエスよ、最も美しきエスよ、救世主エスと汝を呼ぶものに惠を與へ玉へよ、祈禱に生れ給ふエスよ、總ての聖者よ、總ての豫言者よ、彼等を天に生るゝに値ひするものと認め玉へよ、人類を愛するエスよ。』

と爰で言葉を切つて、息を吐き、再び十字を切つて叩頭いた。典獄も看守も囚徒も皆同じ樣な所爲をした。廻廊からは鐵鎖の摺合ふ音が前よりは一層絕間なく響いた。

司祭は更に言葉を續け、

『有らゆる神の使の造物主よ、有らゆる權威の神よ、有らゆる神の使の最も驚嘆したる不可思議のエスよ、最も權威あるエスよ。吾々の有らゆる祖先の罪の贖ひ主よ、有らゆる王の讚美となれる最も美はしきエスよ、有らゆる王の力となれる最も榮えあるエスよ、有らゆる豫言者の滿足となれる最も善なるエスよ、有らゆる殉教者の力となれる最も不可思議力あるエスよ、有らゆる僧侶の喜びとなれる最も謙遜なるエスよ、有らゆる聖者の極美となれる大慈大悲のエスよ、有らゆる持戒者の律となれる森嚴なるエスよ、正義の喜びとなれる最も美くしきエスよ、有らゆる獨身者の節操となれる最も純潔なるエスよ、有らゆる時代の有らゆる罪人の救ひ主なるエスよ、神の御子なるエスよ、願くは我儕を惠み給へ！』

此無意味の長文句を繰返して、エスと云ふ度每に聲が段々と掠れて塞つて來た。で、首尾よく言了つた時、絹裏の袈裟を捧げて跪いて拜をした。樂壇からは再び『神の御子なるエスよ、惠み給へ、』と同じ言葉を繰返して歌つた。囚徒達は立つたり膝を突いたりして亂髮を背後に振つて、瘦せた踝骨に打撲を拵へ

た鐵鎖の音をチャラ〳〵と響かした。

此式は中々長い時間續いて、先づ『私を惠み給へ』で結ぶ讚美が終ると、次は又『ハレルヤ！』で終る讚美で、囚徒達は一句毎に十字を切つて拜をしたが、段々と叩頭の度數が減つて、初めは一句毎に一遍だつたのが、二句目に一遍、三句目に一遍となつて、到頭司祭が讚美を終り、救ひを濟ました嘆息を吐きつゝ本を閉ぢて中仕切の奥に引退む時は、一同大喜びで莞爾〳〵者だつた。

尙だ最一つ仕殘した事がある。司祭は軈て祭机に飾付けた七寶緣の金の大十字架を取つて禮拜堂の中央に持出した。典獄は先づ其前へ行き、恭やしく跪づいて頓首禮拜して十字架に接吻した。續いて看守押丁、夫から囚徒と互に低聲で無駄口を叩きながら押合ひ壓合ひした。司祭は典獄と談笑しながら十字架を彼方此方へと囚徒の鼻先へ突付けると、囚徒は爭つて十字架と司祭の手に接吻しやうとワイ〳〵騷ぎ立つた。之で先づ不幸にも橫道へ外れた同胞を惠めたり導いたりする此日の宗敎儀式を終つたのだ。

第四十回

此儀式に列つたものは典獄からマースロワに至るまで、司祭が何度も讚美したエス其人が斯ういふ儀式を禁じてゐたのを知らないやうである。

エスは唯此無意味な無用の祈禱や麵麭と葡萄酒とを材にする奇怪至極の譎詐を禁じたばかりでなく、同じ人間同士でありながら或者が勝手に敎師とか牧師とか稱して禮拜堂で祈禱する事を明々白々の言葉で禁じ、人は唯單獨で人の在ない場所に於て祈禱すべく、敎會堂で行うよりは精神又は眞理に於て神を拜すべく敎へて禮拜堂の建造を禁じ、却て其當時濫設された殿堂を破壞する爲に來れりと揚言した。就中現に目前に行はるゝ如く、同じ罪ある人間同士で裁判したり禁錮したり拷問したり處刑したりするは勿論、凡そ人を困める暴虐といふ暴虐は悉く禁じて、囚はれ人に自由を與ふべく來れりと云つた。斯う云ふ事は誰も皆知らないやうである。

加之ならず、斯る儀式をエスの名に於て施行するは基督に對する最大無禮且最大侮辱である事を誰も氣が付かぬらしい。又司祭が會衆に接吻すべく持出し

た七寶の飾附きの金の十字架は基督が斯ういふ種類の儀式を非難攻擊した爲に處刑された刑具に型つたものである事に思ひ到らぬらしい。又麵麭と葡萄酒の形で基督の肉を食し血を啜つた意でゐる坊主めらは、基督の肉や血ばかりでなく、基督の活ける分身たる可憐なる我々同胞の肉や血までに實際飽いてる。渠等を誑惑かし、渠等の最大なる幸福を奪ひて殘酷なる苦痛に忍ばしめ、基督が、眞に齎らしたる大なる喜びの音信は却て押秘して少しも與へないのだが、其樣な考へは爰に列席する面々は一向御存じなしである。

勿論、司祭は幼少い時から、之が昔からの有らゆる聖者より今に傳はりて現に敎會に行はれ國家に認可さるゝ眞實正銘の信仰だと吹込まれたのだから、虛心平氣に踧踖如として良心を以て自分の職を務めてゐた。尤も麵麭が肉に化けるとも、ヘタ矢鱈に仰山な言葉を繰返すのが心靈に必要だとも、又實際神の肉を食べたとも信じなかつたが、併し人は必ず之を信ずべき筈のものだと信じてゐた。殊に何よりも信仰を強くしたは、此役目を勤めてるお蔭に十八年間一家を支へ、悴を高等學校に送り娘を女學校に通はせるだけの收入を得られた事實

であつた。長老も矢張同じやうに信じてゐた。が、司祭に比べると更に一層信仰の強かつたは、長老となると頭から信仰の敎理の實質を全で忘れて了つて、唯だ葬式の時の祈禱文やお布施次第で「アカシスタス」を歌つたり歌はなかつたりするお勤めの祈禱文ばかりを覺えてゐて、夫故に頗る得意に、『惠み給へ惠み給へ』と繰返し、薪や麥粉や藷を賣ると同樣必要缺くべからざるものと思つてお經を讀んだり讚美歌を歌つたりした。典獄や看守押丁たちになると、勿論此敎理や敎會の儀式が解りもせず、又深く研究しやうともしないが、ツアールを初め貴顯高位の人々が信じてるのだから矢張信じなければならぬと信じてゐた。其上に何故だか說明出來ないが、此信仰が無慈悲な職業の罪亡ぼしになるやうに茫然と思つてゐた。恐らく此信仰を外にしては彼等が現在行つてるやうに虛心坦壞の良心を以て全力を奮つて人を苦めるは中々出來難い、イヤ、到底出來ないだらう。元來典獄は極の好人物で、此信仰が無かつたなら迚も斯うして安閑と暮してはゐられぬだらう。夫故初めから終りまで不動の姿勢を作つて、腰を屈めては熱心に祈禱し、天使の歌が歌はれた時は心中から感動し、小兒が

聖餐を受けに出た時は、一人を抱上げて司祭の傍へ突出した。

囚徒の大多數は金色の像や金襴の法衣や蠟燭や杯や『最も美はしきエス』とか『惠み給へ』とか何だか意味の解らぬ言葉を何遍も繰返す中に、一種の不可思議力が宿つて現世及び來世の幸福が此利生で得られるものだと思つてゐた。此信仰に執着する虚僞を明かに認めて心中に笑つてゐたは極少數だけで、多數の難有やは祈禱とか勸行とか蠟燭とか何とか種々の所爲をして御利生に有附かうとし、散々祈禱をした擧句碌な御利生がない時でさへも、信心甲斐のないのは全くの偶然で、大僧正初め立派な敎育ある人が難有がる此儀式は縱令や現世で御利生が無くとも必ず來世の功德になる肝腎な大切なものだと思つてゐた。

マースロワも矢張御多分に洩れないので此通りに信じてゐた。尤も他の連中同樣に儀式中は難有いと怠屈とが混雜になつた心持がしてゐた。で、初めは勾欄の後ろの人の群に交つて誰にも顏を見られまいとしたが、聖餐が初まつた時フョードーシャと一緒に前に出て、只見ると典獄の後ろに髮の濃い薄鬚の生えた矮小けな百姓が立つてゐて、眤ッとフョードーシャを凝視めてゐた。此男は

フョードーシャの良人だから、「アカシスタス」の歌の最中マースロワはシゲシゲと容子を見ては頻りにフョードーシャと私語き、誰も彼も揃つて爲る時だけ一緒に叩頭をしては十字を切つてゐた。

第四十一回

同じ日曜日の朝、ネフリュードフは早くから出掛けた。近在の農夫が悠々と荷馬車を轢らせながら妙な聲を出して市街を呼ばつてゐた、『牛乳や牛乳！』

前夜溫かな春雨が落ちたので、敷石を敷かない處には草が青々と萠出した。庭の樺の木は綠の綿を一面に散らしたやうに芽を吹き、山櫻や白楊樹は柔かな長い葉を開いた。で、其處此處の店や住家は二重の窓框を外して綺麗に掃除してあつた。

軈て古着市まで來ると、軒竝びの床見世の前に一杯の人集りがして、汚い扮裝の男が飾靴を兩脇に抱へ、火熨斗のかゝつたズボンや胴衣を肩に、競つて廻つてゐた。

此日は日曜日だから、工場を休んだ職工たちが小淸潔した衣服にテカ〳〵輝つた靴を穿き、女工は華美な手巾を頭に卷き、南京玉の緣飾りをした羅紗のジヤケツを着て居酒屋の四邊をウロウロしてゐた。黃紐附きの制服巡査はピストルを手にして突立ちて雜沓中の警戒を加へてゐた。

此角から監獄まではまだ三四十間離れてゐたが、申合したやうに小包一箇宛抱へた男女が多勢立つてゐた

面會人は大抵汚ない襤褸に纏まつてゐたが、中には相應に着飾つた紳士風貴婦人風のも交つてゐた

　列樹通りの人道や青々した芝生の上には小兒や犬が驅摺廻つてる。附添の保姆連までが一緒に浮れて腰掛でペチヤクチヤ饒舌つてゐた。で、日蔭が猶だ濕つて中央だけが漸と乾いた大通りを重い荷馬車が絕間なくガタクリする、馬車が縱橫に馳け違う、其中を鐵道馬車が鈴を鳴らしながら走つてゐた。敎會の鐘の音はゴンゴーンと空氣を劈いて、監獄で行うのと同じ祭式に會衆を招集し、人は日曜の晴衣を着て思ひ〳〵に所屬の敎會へと道を急いだ。

　ネフリユードフを乘せた辻馬車は監獄へ直附けにしないで、直ぐ手前の曲り角で車を駐めた。

　此角から監獄までは猶だ三四十間離れてゐたが、申合はしたやうに小包を一個宛抱へた男女が多勢立つてゐた。右手には五六軒の木造家があつた。左手には看板を出した二階家があつた。正面の宏大な煉瓦造りが卽ち監獄である。面會人は直ぐ側まで行く事が出來ないので、門衞は始終彼方此方を步いては近づくものを叱りつけてゐた。

　右方の木造家の門に丁度門衞と相對して腰掛を据ゑ、金筋入の制服を着た看

守が手帳を手に持つて腰を掛け、面會人が誰某に面會したいといふのを一々手帳に控へてゐたので、ネフリユードフも其側へ行つてカテリーナ・マースロワの名を書付けて貰つた。

『何故直ぐ面會を許しません？』とネフリユードフが訊くと、

『日曜日の禮拜が始つてますから、濟んだら直き許します。』

ネフリユードフは待草臥れてる多勢の面會人から遠く離れてゐた。すると形の壞れた帽子を被つた、顏に赤い縞の出來てる跣足の襤褸男が獨り群を離れて早足に拔駈をしやうとツカ〳〵と監獄を目掛けて行くと、

『こらッ、何處へ行く？』と銃を持つてる門衞が大聲で呼留めた。

『何を號きやがる？』と此襤褸男は門衞の叱咜位に怯ともしないらしいが、併し後へ戻りながら、『行つて惡きやア行かねヱだけだ。御大將にでもなつた氣で大きな聲を出すなヱ。』

多勢は喝采して笑つた。面會人は大抵汚い衣服——イヤ汚ないどころか、襤褸に纏まつてる者も澤山あつたが、中には相應に着飾つた紳士風貴夫人風のも

交つてゐた。ネフリユードフの傍には綺麗に鬚を剃つた肥胖した赤ら顏の男が下着然たるものを包んだ小包を持つて立つてゐた。ネフリユードフは初めて面會に來たのかと此男に訊くと、日曜日の度每に必ず來ると答へた。夫から段々話して見ると、此男は銀行の門番ださうで、貨幣贋造犯で入獄してる兄弟に會ひに來るのださうで、之が口火となつて身の上咄を始め、今度はネフリユードフの身の上を訊かうとした時、覆面紗を被つた若い婦人と學生風の男が護謨輪の馬車に合乘して、筋骨肥大のサラブレッド(馬の品種)を駛らせて來た。此學生風の男は大きな包を抱へてゐたが、車を下りるとネフリユードフの前へツカ〳〵と來て、囚徒一同に麵麭を差入れるには何う云ふ手續をしたら宜からうと訊いた。自分の約婚婦即ち馬車に合乘して來た婦人と其兩親とが囚徒に麵麭を差入れたいといふ志ださうで。

『拙者は今日初めてゞすから、』とネフリユードフは云つた。『能く存じませんナ。彼の男にお尋ねになつたら宜いでせう』、と右方に腰を掛けて手帳を控へてる金筋入の制服の看守を指さした。

受附の看守と差入志願の青年とが話してる最中、小窓の附いてる大きな鐵の扉が開いて、看守を伴れた制服の役人が現はれ、受附の看守が面會人の入監を許すと呼ばつて門衞が道を開けると共に待ちに待ち草臥れた面會人は一時にドヾヤ〳〵と吾れ遲れじと壓合つた。入口には看守が立つて一々聲高く十六、十七、十八と面會人を勘定してゐた。其奧には又別の看守が張番して、二階へ上るものを一々肩や脊中を叩いては數へてゐた。面會人が歸る時分に一人も檻內に殘らないやうに、又囚人が一人たりとも面會人に紛れて逃出さないやうに念入りに人數を數へるのである。

尤も看守が人數を勘定する時一々顏を見ないから誰が誰だとも知らずにネフリユードフの肩をも叩いた。ネフリユードフは不吉な看守の手で叩かれたのを頗る忌々しく思つたが、併し飜つて何しに恁んな處へ來たのだらうと考へると、不平を起したり不快を感じたりするのを深く耻入つた。

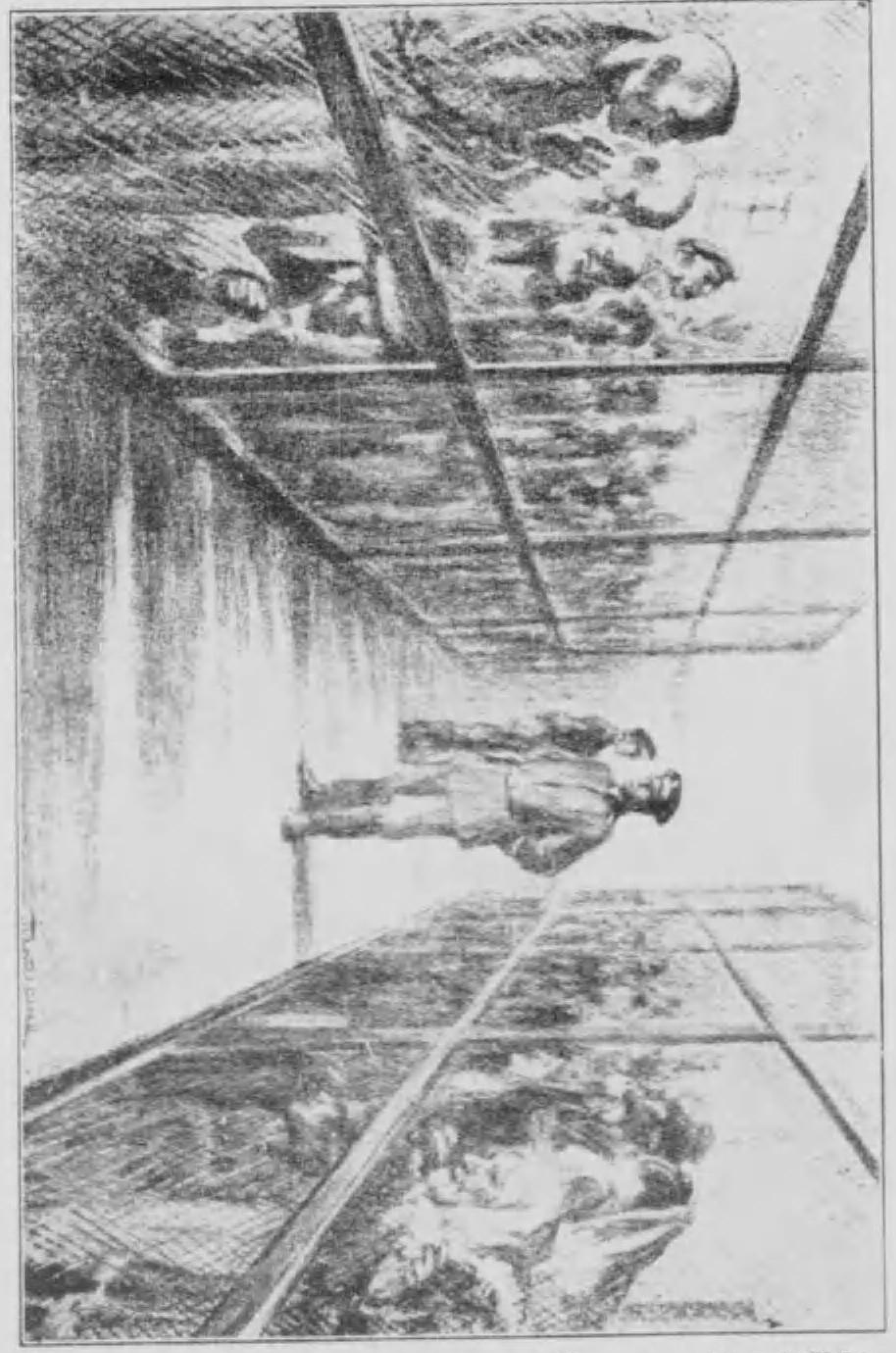
入つてから直ぐ奧は鐵格子の小窓が若干もある圓天井の大廣間で、集會室と呼ばれてるさうだ。此室の壁の凹龕に十字架の基督の大きな額が安置されてる

のを見てネフリユードフは呆れて了つた。『如何いふ了簡で恁んな畫を飾つたのだらう?』基督の像を見れば忌でも自由の聯想を生ずるが當然で、檻禁囚縛などゝは以ての外である。

で、周章てゝ急ぐ面會人を先へやつて、後から悠々と行つたが、此建物に收容されてる罪人の怖ろしさや、カチユーシヤや昨日の青年のやうに罪なくして呻吟する寃罪者に對する同情や、眼前に迫るカチユーシヤとの對面を思ふて生ずる恐ろしいやうな耻かしいやうな感情が一度に混雜になつて胸がワク〳〵して來た。

集會室の端に立つてる看守が多勢の通る時何か云つたらしかつたが、左や右うと思案に暮れたるネフリユードフの耳には何の言葉も入らないで、多勢の人頽れに壓されて、ツイ茫然と男囚徒の方へ行つて了つた。

眞前に夢中になつてる人達を遣過して、ネフリユードフは一番後から行つて面會室の扉を開くと、一時にワツと云ふ何百の聲がガヽアーンと響いて、何が何だか解らなかつたが、傍へ寄つて見ると直ぐ合點が行つた。



網と網との間を看守や憲兵が往來して警戒し、囚徒と面會人は各々一方の網にピッタリと粘着いて、丁度蟲籠に蟲が集つてゐるやうな有様で…………何十人が一緒になつてワイ〳〵叫つてゐた。

面會室は二分せられて、一方は面會人、一方は囚徒と、雙方共に天井から下までの鐵網を中一間を距て、二重に張つて分界し、網と網との間を看守や憲兵が往來して警戒し、囚徒と面會人は各々一方の網に緊密と粘着いて、丁度蟲籠に蟲が集つてるやうな有樣で、何しろ一間も離れて、加之に二重の鐵網越しだから、近眼のものは互に顏さへ能くは解らず、勢ひ大聲を出さなければ少しも通じないから、何十人が一緒になつて雙方からワイ〳〵叫つてるのだ。

雙方の鐵網は一杯に顏だらけで、妻や良人や父や母や子や兄弟やが互に顏を見たり、用談を話したりしやうと一生懸命になつて各自對手に通ずるやうにと、一人が大きな聲を出すと隣りのものも負けずに一と調子張上げ、各自の聲が混雜になつてガアーンと響くだけだ。

夫だから雙方とも互ひに談話が解らないで、顏を見合つては手振や容子で悟り合うのが結局である。ネフリュードフの隣りの手布で頭を卷いた婆さんは緊密と網へ粘着いて、顋を動かしては一生懸命に、頭を半分剃陷ちた青い顏の若者を目掛けて何か叫つてゐた。若者の方でも眞劔になつて眉を釣上げたり前額に

皺を寄せたりして耳を引立つてゐた。婆さんの傍には百姓服の袖無しを着た若い男が面白からぬ顔をして頭を掉つては同じ年輩の牢瘦れした髭々鬚の若者が何か云つてるのを聞いてゐた。其次には襤褸を着た男が手を振つて笑ひながら叫つてゐた、其又次にはいゝリウとして毛織の肩掛をスッポリ纏つた女が乳吞兒を抱いたまゝオイ〳〵いゝと泣いてゐた。確かに此女は彼方の網の中に立つてる坊主頭の胡麻鹽鬚の男に初めて會ひに來て、鐵鎖に繫がれたる獄衣の變り果てた姿を見て泣いてるのだらう。其又傍には門外でネフリュードフと嘴を交いた銀行の門番が立つて、彼方の胡麻鹽の犯人に精一杯の大聲を振搾つてゐた。

ネフリュードフは自分も矢張恁んな混雜した中で話をせねばならぬかと思ふと肝癪がいゝムラ〳〵いゝと起つて、恁んな奇怪至極な制度を設けて强行する輩に反抗したくなつた。唯併しながら斯ういふ無禮な目に遇つても人情を虐ぐる暴惡を憤るでもなく、獄吏獄卒は勿論、囚人自身すらも宛も之が當然であるやうに思つてるは實に不思議千萬な。

ネフリュードフは此室に留まる事凡そ五分間。何だか頭を壓へつけられるやう

な氣がして、今更のやうに己が力の頼みなき事、世の中と自分とは到底相容れないのを悟つて、恰で舟に醉つたやうな一種奇妙な道德上の眩暈がフラ〳〵として來た。

第四十二回

『左に右く此處へ來た用事だけは濟まさんければ……』と慘憺たる囚徒面會室の光景に打たれたるネフリュードフは漸くに思返して勇氣を引立てつ、『扨て如何したものだらう？』と四邊を見廻し、恰も制服を着た瘦せた小男が面會人の背後を往つたり來たりしてるのを見て、其傍へ行き、『女囚の面會室は何處でムるナ？』と故と重々しく丁寧に『何處で面會出來ます？』

『女囚の方ですか？』

『はア、女囚に面會したいのでムるが、』と愈々丁寧に云つた。

『集會室で爾う仰しやりやア宜かつた。併し何と云ふ女ですナ？』

『カテリーナ・マースロワ。』

『國事犯ですか？』

『イヤ、何ッ……』

『宣告濟ですか？』

『一昨日宣告されたばかり。』とネフリュードフは親切らしい看守の感情を害すまいと勉めて物柔らかに云つた。

『女囚の檻房なら、此道を斯う……』と云掛けてネフリュードフの風采の尋常ならぬを見て、『デーシロフ君、此お方を女囚檻へ御案内して呉れ。』と胸に勳章を佩けた鬚のある伍長に云つた。

『はア、承知した。』

と伍長が云つた時、鐵網の傍で胸の裂けるやうな聲を出して泣くものがあつた。

ネフリュードフは事毎に奇怪に思つたが、殊に何よりも一番奇怪で堪らぬのは此人情を無視する制度を奉じて非理非道の暴行を肯てする當事者たる典獄や看守押丁輩に手數を掛けてお禮を云はなければならぬ事だ。

伍長は男囚徒の面會室から廊下へ出て、直ぐ向側の角を折れて眞直に女囚の面會室へとネフリュードフを案内した。

女囚の面會室は男囚徒のと比べると少し狹かつたが、矢張同じやうに二重の網を張つて、面會人や囚徒の數こそ少ないが怒鳴つたり叫いたりする騷ぎや、網と網との間を看守が歩いて警戒してるのは同樣であつた。唯異つてるのは看守が女で、袖に金筋の入つた青い縁付きのジャケツに青い帶を締めてゐた。男囚徒の面會室と同樣に、一方の網には思ひ〱の扮裝をした町の人、片一方の網には白い獄衣や稀には色物の裟婆の衣服を着た女囚が雙方とも隅から隅まで一杯に網の目に集つて、爪尖立つて人の頭越しに怒鳴るのもあれば蹲踞んで人の裾の間から叫くのもあつた。

女囚の中で一番目に立つたはキイ〱云ふ聲を出す妙な風采の痩細ちの散らし髮のジプシー（穢多に似たる浮浪種族の名）で、縮髮の頭から手巾を滑らかし、囚徒側の中央に立つて、目眩るしい身振をしながら黄色い聲を出して、腰の下に緊く帶を締めた青い上衣のジプシーの男と叫き合つてゐた。

此ジプシー男の隣には兵士がベッタリ板の間に座つて女囚と話してゐた。其次にピッタリ網の目に粘着いてるのは鬚の綺麗な若い男で、顏をボウッと赤くし涙を一杯溜めて凝ッと堪へてゐた。此男の對手は髮の房々した美くしい女囚

で、即ちフョードーシャ夫婦である。其又次に大顔の女と話してるのは無宿者で、續いて女が二人、其次が一人の男を置いて復た女で、各自に四人と相對つてゐた。

マースロワは此中には見えなかつたが、後ろの方に窓の傍に立つてるのに氣が附くと、ネフリュードフの胸は早鐘を撞いて息が止まるやうな心地がした。愈愈絶體絶命の時が近附いて來た。

ネフリュードフは網の側へ行つて精々とマースロワを見ると、マースロワは青い瞳のフョードーシャの背後に立つて夫婦が舂しさうに話してるのを聞きつゝ微笑してゐた。此日は昨日のやうな獄衣に引換えて白いジヤケツの腰の邊りをキウと緊く帶を締め、胸を一杯に突出し、法廷で見掛けた時と同樣な眞黒な縮れた前髮が頭巾の下から前額に覆れてゐた。

『即時決心せにやならぬ、』とネフリュードフは心中に、『此方から呼んで見やうか、夫とも先方から聲を掛けるだらうか？』

マースロワはベルタを待つてゐた。ネフリュードフが會ひに來やうとは夢にも思はなかつた。

『貴下は誰に面會なさるンです？』と網の間を見張つてる女看守はネフリュードフの側へ行つて訊くと、

『カテリーナ・マースロワ、』とネフリュードフは苦しさうに答へた。

『カテリーナ、』と女看守はマースロワを呼んで、『お前に面會の方がある。』

マースロワは四邊を見廻し、反身になつて胸突出しつ、昔しから見覺えある暢然した顔をして二人の囚徒を割つて前へ出つ、ネフリュードフを眤と見て合點の行かぬ怪訝な顔をした。が、衣服のリウとしたのを見て早くも金持の紳士と見て取つて嫣然と微笑した。

『貴郎ですか、妾に面會し度いと仰しやるのは？』と例の斜視の瞳を寄せた笑顔を網の目に近寄せた。

『拙者……拙者……拙者が面會したいのだ……』とネフリュードフは「お前」と云はうか「貴孃」と云はうかと躊躇したが、軈て常とは違つた調子外れの聲で、『お前に會ひに求たのだ！』

『馬鹿を云つちやア不可ねエ、』とネフリュードフの隣の無宿者は大きな聲を出した。『お前は取つたのか、取らねエのかよ?』『虚弱で死掛つてるんだよ、』と一方からは誰だかゞ怒鳴つた。

マースロワはネフリュードフが何を云つてるのだか少しも聞えなかつたが、段段顔を凝視めてゐる中に今の今まで心のドン底に秘めて一生憶出すまいとした或るものが、俄に浮んで來ると、見る〳〵笑顔が失せて苦悶の刻まれた深い皺が前額に寄つて來た。

『何を仰しやツてるか聞えませんよ、』とマースロワは眉を顰めた。

『會ひに來たんだ――』とネフリュードフは口吶りながら云ひつゝ心中に、『爲なければならぬ義務を行ふのだ、懺悔をするのだ、』と思ふと忽ち涙が一杯溜つて咽喉が塞るやうな氣がしたので、兩手で鐵網を摑んで泣くまいとした。

『渠女が壯健なら來やしないやナ、』と誰だか直ぐ傍で叫つた。

『神樣が證人だよ。妾やア何にも知らないやネ、』と今度は囚徒側から號んだものがある。

マースロワはネフリュードフが逆上せてる容子を倩々と見てゐる中に段々氣が附き、

『貴郎はアノ……のやうだが――誰方でしたネ、如何しても憶出せませんよ、』と男の顔を見ないで云つた。が、ホンノリと赤かつた顔が次第に曇つて來た。

『お前に勸辨して貰ひたさに來たのだ』とネフリュードフは聲だけは高かつたが、恰で學校の兒童が暗踊するやうに無抑揚にスラ〳〵と素氣なく云つた。が、豫て期した贖罪の口火を切るや否、俄に胸がワク〳〵と顛倒返るやうな氣がして四邊を見廻し、人の見る目も耻しいやうな心地がしたが、耻かしく思ふのが當然だから耻かしく思はねばならぬだと氣を取直して、復た聲高に言葉を繼ぎ、

『勸辨して吳れ、拙者はお前に濟まない事をした。飛んでもない恐ろしい罪を作つた。』

マースロワは斜視の眼を放さずに眤とネフリュードフを見つ、身動きもしなかつた。

ネフリュードフは既う口が利けなくなつて、網から離れて迫み上げて來る涙の聲を制へやうとした。

ネフリュードフを案內した伍長は最前からの樣子を不思議に思つてゐたが、丁度此時再た面會室に來て、ネフリュードフが網の傍を離れてるのを見て、何故面會を請求した女囚と談話しませんかと訊いた。

ネフリュードフは鼻を拭みつゝ身體を伸ばして漸くに心を沈着け、

『網を距てゝは談話が仕惡うムるんで……少しも話が聞えませぬ。』

伍長は暫らく考へてゐたが、『宜うムる。少との間なら伴れて來られます……マーリヤ、』と女看守を呼んで、『マースロワを外へ出せ。』

第四十三回

マースロワは忽ち橫間の口から出て靜々とネフリュードフの傍まで來つ、佇立つて流睇に眤と見た。二日前に法廷で見た通りに黑い縮れた前髮が何本も渦を卷いて前額に垂れてゐた。容貌は病人然と青白く少と脹んでゐたが、如何にも美くしく沈着があつて、燦々した黑い眼が脹眼緣の下から怪しく光つてゐた。

『爰でお話しなさい、』と伍長は云棄てゝ退いて了つた。

ネフリュードフは壁側の腰掛へと行つた。マースロワは怪訝な顏して伍長を目送りつゝ不思議さうに肩を搖つてネフリュードフの踵に隨いて床几へ行き、ユラリと裾を捌いて其傍に腰を掛けた。

『お前は中々勘辨して吳れまいと思ふが、』とネフリュードフは口を切つた。が、忽ち涙に聲を塞らしつ、『今更過去つた事は如何することも出來んが、併し之からは拙者の身に及う事なら何でも爲る意だから、何卒打解けて何なりと……』

『如何して妾が解りました、』とマースロワは男の言葉は耳にも入れずに、男の顏を見るでもなく見ないでもなく訊いた。

『オゥ神よ、私を助け給へ！　私が爲すべき事を敎へ給へ！』とネフリュードフは心に念じつゝ昔しとは打つて變つて寸分も樂しさうな色を留めぬ女の顏をしげ〳〵と守りつ、『拙者は一咋日陪審員の席に列してゐたが、お前は氣が附かなかつたかネ？』

『少とも氣が附きませんかつた。氣が附くだけの時間が無かつたから、全でお顏を見もしませんかつた。』

『小兒が出來たさうだがノウ？』とネフリュードフは訊きながら自づと面熱りしたやうな氣がした。

『はア、出來ましたが、幸福と直ぐ死にました。』とマースロワは外方を向きながら平氣な顏をしてゐた。

『如何して、何故死んだのが幸福だネ？』

『妾も產後に病氣になりまして旣んでの事死損なひました。』と矢張俯向けた眼を上げないで云つた。

『一體如何云ふ理由で伯母はお前に暇を吳れたのだ？』

『誰が貴郎、赤ン坊を產まうて女を抱へて置く結構人があるもんですか。お腹にお氣が付くと直ぐお暇が出ました。だが貴郎、何しに其樣な話を遊ばすンです？　最う旣くに濟んじまつた事を——お止め遊ばせよ。妾やア何にも覺えてやしませんワ。』

『いや、猶だ濟まない。拙者の罪を償はん內は決して濟んでをらんのだ。』

『否エ、何にも貴郎に償つて戴くやうなわけは有りませんワ。有つた事は有つた事で旣う濟んじまひました。』とマースロワは意外千萬にも媚びるやうな哀憐を乞ふやうな淫らしい眼をして凝とネフリュードフを見た。

マースロワは二度とネフリュードフに會はうとは夢にも思はなかつた。況してや斯ういふ場所柄で今日といふ今日邂逅はうとは思ひも寄らないから、互に顏を合はして夫と氣が附いた時は唯呆氣に取られて了ひ、一端忘れて了はうと決心した昔日の記憶を俄に呼起せないで、初めは其昔し愛しつ愛されつした青春の戀の爲に洞開したる情や義理の徽妙な新天地を朧ろげに憶出し、夫から後に、世に側り難き男の薄情から身を棄鉢に持壞した墮落の徑路、夢のやうな歡喜に

續いた長い憂き艱難を憶起して、徐ろに胸の張裂ける心地がして來たが、扨て此擾亂れた感懷を解く力もないので、長い年月仕慣れたやうに眞摯な記憶を浮いた夢現の中に揉み込んで了はうとした。

初めの内こそ現在同じ腰掛に竝んでる男を昔の思はれ人のやうな氣がしたが、昔しを憶出すと忽ち胸がキリ〳〵と痛んで來たから、再び紛らさうとして眼前の鬚油を燦つかした美服の紳士と昔しの愛しい眷しい絕潔無垢の青年ドミートリとは全く別物として了ひ、矢張自分のやうな動物が時々入用になる一匹の人間だと決め込み、爾ういふ人間に對しては何時でも御用の時動物のお役を勤めて其代りに金を儲けてやれば可いと、そこで媚びるやうな微笑を與れて蕩さうとしたので、暫らくは如何して利用して呉れやうと考込んでゐた。

『其麽な事は濟んじまひましたワ。夫れよりかアノ、妾は西伯利亞へ流されるのよ。』と云つた時は有繫に唇が慄へて居た。

『知つてる、知つてる。お前の寃罪なのも知つてる。』

『寃罪ですとも、寃罪ですとも。何にも覺えがありませんワ。竊盜だの殺人犯だのと、飛んでもない。辯護士さんに頼めば如何にかなるつてますが、控訴したくてもお金が大變要るツてますから。』

『無論控訴すれば確かに何とかなる。拙者も其考で、既う辯護士に頼んで置いた。』

『お金を掛けなくても承諾つて呉れる辯護士さんがあつて。好いお方ネエ。』

『金の事は拙者が如何にでもする。』

二人は暫らく言葉を途切らした。マースロワは再び媚びるやうな微笑を洩しつ、

『貴郎にお願がありますが……』と唐突けに、『若し何なら少つとお金を……澤山ぢやなくて……十圓ばかりネエ……』

『可也〳〵、』とネフリユードフは不意を喰つて狼狽きながら懷中物を搜つた。

するとマースロワは恰も面會室を往つたり來たりする副典獄をジロリと見て、

『彼の人の前で出して下さる勿。取上げられツちまひますから。』

と低語いたので、丁度副典獄が後ろを向いてる隙を見澄まして紙入を出し、